增補俳諧歳時記栞草

江戸　豊亭主人纂輔
藍亭青藍増補

秋

漢書律暦志 少陰者西方西遷也陰氣遷落物於時為秋秋湫也物繁飲乃成熟

少皡 帝禮月令其帝少皡注云少皡白精之君金天氏也

摹收 神月令其神蓐收注云蓐收金官之臣少皡氏之子該也

白藏 爾雅秋為白藏一曰收成注云氣白而收藏萬物故曰白藏

金商 秋五行屬金五音屬商故有金風素商之称唐高宗九日詩云崙唐臨玉辰初律啓金商

明景 元帝纂要秋景曰明景朗明皎皎

籟 謂秋声也爾雅吹物為籟

黄鳥則法也言金氣始肅萬物于此周傷猶被刑戮之法

白籟

則四令

七月

立秋 節 [令廣義] 孝經緯云大暑十五日指申為立秋七月節

新秋 初金 [説文] 三秋 白帝 [中院殿] 公御説和歌 [廣韻] 五龠 也始也又始初也共謂新秋也

初秋 初秋 七月十四日 [令廣義] 立秋十五日斗指申

處暑 中 [月令廣義] 為處暑濟暑將退伏而潛處也處止也暑氣止息也是七月中也

文月 七日 [清浦奥儀抄] 此月ふつきとて文どもをひらく故ふ文ひろげ月といふと暑せ文ひろげ月有家○文月 [藏王] 七夕のあふよの空のうげうえて書ふらべるを暑くふつきともいふ

機棚月 [藏王] 鵲のよ

女郎花月 [藏王] なをしえのうつろふのころ待えらん家隆

涼月 [月令] 孟秋 月涼風至

盆秋 經曰 毎年七月十五日、為父母設盂蘭盆供十方自恣僧

相月 [爾雅] 七月為相疏云七月得庚則葉落而天下知秋通

桐秋 [淮南子] 日空相 [甲書] 梧桐一葉先落天下知秋之日

蘭月、蘭秋、肇秋 [纂要] 七月曰首秋上秋肇秋蘭秋 [月令廣義] 提要抄云蘭月

親月 [和尓雅] 此月諸人詣親墳墓故曰親月

餞月 餞字 [爾雅] 餞送行燕説文送去也餞餞曰送行燕説文送去也餞餞訓送暑の去を送る意なり

八月

葉月 肖 [月令] 肅殺の氣を生じ百草葉と落る故ふ葉落月といふ今暑くして葉月といふ

南呂 律 [礼記] 律中南呂 [高誘註] 云南呂也陰氏干陽任其成功

白露 節月 [月令] 云處暑後十五日、白露後十五日、秋分 [同上] 白露後十五日、斗指酉為秋分陰生於午極於酉故酉其中分也、仲

月之節為秋分秋陰中陰陽適中故晝夜長短亦均焉

仲秋 月令 八月為仲秋

壯月 纂要 商又曰壯月

桂月 同上 八月亦曰桂月桂の花の

らく月 萍環ふ出せる

中律 出處未考

難月 唐類函 萍環ふ出せる

八月乃難以達秋氣難八月

藏王 秋の

ふやらしちもと難月の誤ふや

秋風月 藏王 秋の葉ふ露充

みさと音ふくや身ふ

月見月 藏王 名ふし

きんしあき風の月 定家

おらむ秋の半

の空をとて望のつきも

ある月とるるふ長明

雁來月 月令 仲秋之月鴻雁來

九月

無射 律 礼記 九月律中無射高誘註云無射陰氣上升陽氣下降

萬物隨陽而藏

無有射出見

寒露 節 月令廣義孝經緯云

辛為寒露言露冷

寒而將欲疑結也

秋分後十五日斗指中 同上 寒露後十五日斗指戌為霜降言

而為霜矣

季秋 月令 季秋之月

紅樹 通俗志 小出せる人

疑ふ紅樹月の誤ふ藏王 ありと山ふくく

ふくくとて色紅葉の月の色とくくん 後鳥羽院御製○

朱彝詩云秋山有紅樹忽憶田野中○錄退之

詩云春風紅樹鶯眠處似妬歌章作艶声

ゝえゝまべ紅樹とるうハ

玄月 范蠡曰王姑待之至于玄月註云玄

九月の異名ふあるべ

月九月

長月 夜長月と

月也

素秋八九月ふ限ふ

秋の總名ふ素ハ白

ふ四時と五色ふ配ふ秋

菊月 又菊秋ふ

白ふ中ふ

月令 季秋月

菊有黃花

晚秋 對早秋

故曰菊月

梢の秋 李嶺云紅

木深月

紅葉月 詩歌

ともの

紫實月 藏王

ふ枕

小田苅月 藏王

ふ長き夜ふ

露をげく袖ら拂ふ色とる月　稍の秋こい
小田うの月　頭部　ふふおもし

七月

糸織姫

棚機七姫の内こ　異名分類　旧事紀ふ令天棚機姫神

織神衣上尋　犬飼星　その部二星　石枕　仙覺抄
ふうらぐし　うの条ふ出

八真の石ふあらぐ王こたなむこのうふ夜の王の枕とまさう

取草こ八棚機の歌と書付　曬衣裳　星のうし物　小袖
るふ芋の葉の露をこ書こ

四民月令七月七日麝を作こ藍丸及び菊花丸と合し經書及び衣裳こ曝しし俗ふ習ふこと然り　世說郝隆
七月七日鄰人こうふ皆衣物こ曝も蹇仰ぎ臥しこ
腹こ出す人甚故こうふ曰腹中の書こ曝のこ　○星のこ
し物衣裳こ曝ものこ物こうふ　七夕ふ巧こうふ為
こ　貫之家集　世こうふこ我ふ　赤い七夕の涙の玉の緒こ
やふうん秋きこも露ふく神の世ふ見ふ　つふ何
どうきまし　舟内侍　荒野集　七夕こ物うをもれひし

地の坊こ立花　洛の六角堂頂法寺　雲林院　八三條の南ふあり、三十三所順礼の一箇所也　道世僧專光數古の櫻枝こ二海のくちふ山水の景象こ擬ふ　利俗こ立花こうふ今ふ至て代こ　玩ふ僧俗此後第こ　例年七月七日立花數瓶砂の物等こ人爭ひてこれこ
こ　池の坊の立花こうふ　滑稽雜談
ふ又二星ふ供もるの意ふ　伊勢踊
こうふむうこうふ侍るこ

生身魂

○世ふうふ松坂音頭ふ　蓮の飯　闘志
本朝の世俗七月ふ　生こ二親こ供養して生身魂こ名
づくこも盂蘭盆の修行ふ　盂經　願くハ現在の父母
こて壽命百年病ふく一切苦惱の患ふ　是七月十
五日僧自恣の日現在の父母の壽命長久こ所願の文
ふ　是生身魂の修行ふ　和漢三才圖會三月盂蘭中元の日
祝用こ　俎　晉ふ　割開こ　こ　鯉
三枚こ一重こ　一刺こ　○同書こ蓮の飯者
姓の靈前ふ供こ以て親戚ふ贈こ礼式こ　秋

して生霊祭りに、稲の葉と以て熟せる糯飯と包み、稲
観音草と呼てるもの、綿る佛名と以て好とする。

妻

稲つるゝ [和漢三才図会] 秋の夜晴て電ひらめく常
〇かりう 俗傳に、此時稲妻稲光の故ふ稲妻稲光の
名あり、[御傘] 稲光る雷ハ陰陽の激躍するなり、稲の殿 稲妻ふ對して、
稲の殿といまゝ
[説文] 電ハ陰陽の激躍するなり、
べし、[續猿蓑] 獨ろて留守
ゆけばとゝ〜稲の殿 一東、

稲葉の雲

詩云多稼如雲云〇
秋風ハ田面ふ冬とさそふ〜ぐるまの雲の露ぞ〜く
る〜中院通茂公〇稲葉のおいゝ〜のぐさる景色とうすぐ

稲の花

[夫木] ゆふぐれといふまもうしふ我家の
門田の稲の花の浪よる 後久我内大臣

糸萩

[大和本草] 道年中華 ようりうこん
花紅ふ盛ん、春子と揃秋の末ふ實多く花紫
く蔓生ふ、嫩きとき茹て食ふ京都ふて多ふ三月
筋紫ふて南京豆といふ〇此種黄葉隱元豆ふ朝
諸種と共来る其一種ふ、

隱元豆

故ふ隱元豆と名づく、

稲蒔虫

[和漢三才図会] 蠶
蠶、蒔蚕、和名以
祢豆岐古萬呂 俗云祢宜 按ずふ蠶蚕斯ふ似て小く、
長さ三寸ばかり、青色尖て二ツ首兩眼の間廣し、但し蚕斯
ハ而眼の間狹しとゝ以て異なり、[杜人立烏帽子]
ゝ若しる状ふ似ふ故ふ俗呼て祢宜といふ小兒両足と稲
ふ身と伸して首と俯き仰ぐ稲と蒔形ふ似ふ故
ふ和名稲蒔といふ古萬呂ハ蚕の類の和訓の總名
[本草] 蟲蚕ハ總名あり數種あり草の上ふ在と草

冬蟲

蚕といふ冬ふ至て土穴の中ふ入て人死てこゝと食人
辛く毒あり其類土中ふ乳し深く其卵と埋し夏ふ至て
始て出づ〇按ずるふ蟲蚕方ふる首形莎雞ふ似て小く、
青白の色田の稲ふ生る夜ハ株ふあり、朝ハ梢ふ上り、稲の
露と飲し故ふ稲子と名づく、[本草綱目] 蟲蚕集解
く美なり小蝦の如し形同うして灰色、

蝗

田野ふ在て地ふ跳る者即蝗也、
二云蝗亦蟲ふ類也、方言ふ王者ふ冷氣ふ生ずる所、
天地殺伐ふ兆ふ此蟲の声と現ずるといふ八十一の子と生
ず冬大雪あるとき蝗ふ入て死ず [和名抄] 蝗 [本草綱目] 天
和本草 管子ふ曰年の五害水旱風厲蟲といへり虫ハ

螳螂和俗ふ實盛虫と称するあり、鎌ふ似て小く青色なり、首ハ兜と著さるゝ如し、稲葉と食ひて大ふ害を成す明と燈し鐘鼓と鳴す

芋虫 大和本草 蝎、又菜の葉ふ生らして こゝと迷る 青色ふして生ず 芋葉ハ生る ハ大なる拇指の如く、長さ三四寸あり、芋虫ふ似たり、青色ふして褐色ふ成り、後ふ化して蝶となる。

蟷螂 時珍曰、西蜀、斧の如く、輙ふ當て退ぞく故ふ當郎の名を得たり、頸脩し、大腹三手四足、髭と以て鼻ふ代ふ人の髪と食ひよく葉と斃して蟬と捕ふ、深秋ふ子と乳房と作るふ枝の上ふ粘著す即螵蛸也、房の長さ寸ばかり、拇指の如し其内重々として隔房ありて、房毎ふ子あり、蛆卵の如し、芒種の節後ふ至て一齊ふ出る

滑稽雑談 俗ふ鎌きりと云ふ、かの両臂斧の如し、又鎌とめらるゝもの也、よそをるあらくしく、○時珍曰今人疣と病者往々螳螂と捕へて食ひ、

龍馬 同 二名一物、この部懸蜂の条ふ註す、

兼三秋物

居待月 藻塩草 十八日、

万葉ふ座待月と書り、

絲芒 葉細く絲線のごとし、長三四尺一株ふ数百の莖最生す、秋莖と抽で花穂と成す、

色草 秋の千草なり、時珍曰、芋花とひら間ひらく者あり、莖と抽で花と生ず、黄色若ハ長蕚あり、こゝと護る、半辺蓮花の状の如し、○粒芋、唐の芋、青芋、螺芋、甘藷ふの種類あり、頭字の部ふ重ねて註しあり、

田舎杼 形円く諸ふして渋し、酢し杼大ふる塔杼なり、

犬殺梨 和漢三才圖会 北國最多し、奥羽建輕秋田の産、他國ふ倍して大あり、周ア一尺四五寸、俗呼て犬殺と名づく、狗子樹下ふ百ともに梨落るを撲殺す死を故ふ名づく、

稲 高錫食經 ふ 雅云稲穀、

稲殃 古ハ麥稲の穂と扱ふ、二つの小き音を以て鏘と選し繋ぎこゝと握り待穂と挾ふ扱近年稲扱と製す其建る三扱竹ふ十倍也、

稲舟 古今 最上川のゝれば くるる稲舟の、

稲扱 字彙 川ふ獲也取也、

稲 稲刑 ふ

國家上川、水をゆくにも舟を引のぼるにも舟のうしろのつなを
うが人の物とりふ言て、うづりふるに似られバいへ又一説ニ
稲とつミたる舟ゆへ、讃方物といふとも、人心と、
稲舟ふよせたくよむべきなり。

稲莚

藻塩草 莚をもちてたる所ふ、稲の面の平をしめる此申ものよりして
夜分ゆも居所ゆとのけらんば、○又新藁ゆて織たる莚とも又
かね稲とて木の枝ゆかくへ釣かねとかけをきしたるとも、稲莚
とこあり、万葉 玉ぼこの道行つとに稲莚しきても人をこ
ふるよしもがな 人丸 新古今 秋の田のかりねの床の稲むし
ろ月やどれともしける露かな 定雅○大きく莚の如く心
得べし。

鰯引 裂鱠

和漢三才図会 鰯 俗字鰮、和名伊和之、性柔弱故ふ俗字弱ふ従ふ、與
和之と訓及相通、中略 群行して至る時、海波稍赤し、漁
人豫知て網を下してこれを采る、鯨好て鰯を吮ふ為ふ逐
るる者数万群となりて浪捷のごとし、これを取て膾ふ作
て炙りて食ふ、又脂を取て燈油とす、○鰯引とハ網
を引の義、裂膾とハこれ魚、刀を用ふるに及バず指をもて
さくと解故ふいふ、本朝食鑑 一名御紫或ハ紫といふ本朝

宮闈の児女鰯の賤名を忌て御紫といふ、
鰯の塩糟其内色紫黒故ふ名つくるか、

鰯雲 秋天鰯先

あらんとする時、一片の白雲その
雲段々として波の如し、是を鰯雲と云

八月 芋名月

つの部月見ハ

十六夜月 既望

古今 君なくん段々…んのいさよふふ其の夢
の条たるべし
もさくれねふなり、○いさよふとハためらふ意、十五日の
月暮てのちあがりけりてのづる故にて、○ゆるく出ていさ
よふ月の雲 芭蕉○此句意ハゆるくと月ハ出たれども雲
のさわふいさよひてこゆといへる曲節なり、蔡氏集傳 月
以ハ既ふ望ば十六日、相望むことを望といふ

羊肚菜

和漢三才図会 羊肚菜今云兎口蕈、八月の中湿地ふ
多く生ず、其繖の表褐色、端曲り捲、裏ハ黄白色、細刻
あり、ほかしこれを蜂の巣のごとし、毒なり

石蕈

同上 状木耳のごとし、繖縮 黒色 裏灰白色、峯の頭繖の上ふあるは甚だ得がたし

小屋

同上 守舎木で看庵なり ○ 田間に建て猪鹿を追ふ処也

稲木 稲掛 稲

稲干

[多識篇] 喬木 伊奈加計 ○稲木、俗稲掛と書く、と書る長竹の長短相等しきもの三本を取こゝ二ツ筵を用ゆ、ことを縛り田中ニ於て禾を上ニ向りて乾す 東 [和漢三才圖会] 稲干形

て束ねて一把二把とす是多く人又稲塚あり、刈稲と束ねて後積て堆くもこれ恰も塚の如し是を稲塚と云、

負鳥

[古今] 我門ニ入るなるかりせ鳥の鳴ふつゝげさふく

凡ニ鳥ハきゝみゝ」真淵翁云、稲負鳥ハいかゝ

がゝこゝろをそこなくと論ぜ[illegible]ふ、或ハ鶴ニ田夫ゝあるどいふハ此哥とあるも心得ぬ[illegible]て[illegible]詞ともをらぬ[illegible]ども

そこ皆りふ足らぬ庭ときこのことをいとふあさり、

実ニ秋の半ばをすぎて來鳴かのゝ[illegible]り、[綺語抄] ひつゝを稲負

鳥のとゝくぶ、人ハ意路ニまぎらはざるまし、○鶴鴒、稲負鳥、

庭ときこつゝをせ鳥とゝきとゝ、鳥ホの諸名ひゝ、[三才

圖会] 鶺鴒 雀のごゝひ飛ときハ鳴行ときハ揺く大さ鶺

のとゝ脚長く尾腹の下白し頭の下黒く連銭のごし、

故ニ杜陽の人こ

ゝと連銭とゝ、

色鳥

[御傘] いろゝ秋ときる小鳥

とゝ[illegible]へ、[雲玉] さらニ又わゝる

もかふ山路ゆく秋やいろゝ

承鳥

[和漢三才圖会] 竊指 青雀 鷹紫雀 狀鳩

限りの色鳥のゝ[illegible]

ゝ小く黒く腹灰青色羽の末黒く白き斑あり、

背微曲て厚く淺黄色尾短く好て豆粟を食ふ

豆甘美と名ゝく俗呼て豆喰ゝ[illegible]と名つく常ニ鳴

て春月ゝく囀る比志利古木利とゝふ、

伊須加鳥

正字未詳 [同上] 狀鶺鴒のごとくゝして頸背

蒼く又腹膳最赤く紫ゝ[illegible]ゝ

翻語又とゝ[illegible]故ニ事物

翻語と伊須加の背とゝ、

九月 生玉祭 九日

[神社啓蒙] 生玉の社ハ摂津國東成郡天王寺の辺ニ

あゝ祭ニ神一座天の生玉の命 [社家註進記] 明應年中

本願寺の僧ゝゝふ来ゝて寺院と創し神地と以て境内

ニ接を、神其不潔と惡ゝて彼僧と罰をゝて僧ゝをれて神

殿と今の旅店の側ニ遷ゝ[illegible]遷営ゝ其後信

長の兵火ゝゝ殿社焼ゝ[illegible]縄ニ神殿と別所ニ

迁を、慶長年中ニ古城廓と築ゝくの日、今の地ニ遷を、

○例祭九月九日神輿一基遊行流鏑馬あゝ、社内ゝ

十坊ありそのうち　十五日　八所明神の社八
南坊と別當寺　**岩倉祭**　洛の北長谷村の
西岩倉あり、王城の四隅ふ岩倉と置まられ其一なり、
[拾芥抄] 大雲寺岩倉観音○　卿記ふ云、文明三
年三月廿九日、岩倉長谷の観音ふ参る、十一面圓融
院の御願、日野中納言文範卿草創なり、○鎮守岩倉
大明神、所謂八所とハ、八幡　加茂　松尾　山王　住吉　春
日　新羅　大座　是ふ太神宮　貴船　稲荷　平野と加へて、
以上十二社なると十二所明神と称す、是大雲寺の鎮
守ふて、土人本居神とも、例祭九月十五日、神輿巡行
そ、神主八村中の氏子交ると勤む、大雲寺衆徒
四人名代として公人法師二人供奉、夜宮ふ大炬火二ツ立、深
更ふ及て角力五番あり、[滑稽雑談] 俗ふ岩倉の尻く
き祭とり、夜ふ入て神供と奉る、一村の内新婦とまらして、
婚礼の服と着せ、神供の器と頭ふ戴き神前ふてこ
ゝむ、一村の老若ちいさき枝木と持新婦の尻どろ、新
婦ふと来ると、立まりちの
てうろうり、故ふ尻ときとり、**一宮祭**　十五日○河内
国交野郡北枚方村ふあり、祭る神牛頭天王八王子、北野の天神、
摂社帝釈天王、服立寄姫大明神、浅原大明神、鎮座年暦
詳あらず、例祭九月十五日、今八十六日神輿出と神輿神湯
ふあり、氏子八郷坊村　小倉村　招提村　田口村　伊豆田村　中宮
村　禁野村　濃村　是社僧神宮寺及社家岡田氏記之、是之
又一説ふ一宮平岡大明神八、河内國河内郡ふあり祭る神
天の児屋根命姫大神、香取神、鹿島神、若宮の社末社七八
社、神武天皇の御宇鎮座、例祭九月八日九日社務水足大炊
下祢宜神子五六輩、皆農民
ゝてこと兼務じと云、**伊勢御遷宮**　[紀事]　九大
社造替毎ふ陣の義ありて、時日と定らる、勅使あり、伊勢
大神宮春日の社廿一年を経るときハ必造り替り、遷宮の
時納る所の神宝行事官調進をこの月伊勢参宮の人多
く京師と出て、十六日の御祭会並ふ御遷宮ふあること
参宮の人、光霊山の國阿の家ふ
相傳ふ國阿深く大神宮と信じ、時ふ木履と着杖と
携て参詣とあり、行路の難あり、故ふその福ふ倒ふ
て以正安と祈る、○二十一年毎ふ遷宮の故ふ十五年

ゆみ至るまで木引かしめて三年かゝて木引成て又三年木拵のことあり 材木ハ木曽山並紀州大杉山なり出る○内宮御鎮座ハ垂仁天皇二十五年三月外宮ハ内宮鎮座の後四百八十四年と經て

紅風

九月の風なり 新古今 ものおもふころのあきかぜ 久我内大臣

隱君子

菊の異名なり 范至能菊譜序 山林好事者或以菊比君子其說以謂歲華搖落草木變衰乃獨燁然秀發戲視風相此幽人逸士之操雖寂寥荒寒而味道之腴不改其樂也 愛蓮說

菊花隱逸者也

いあて草

菊の異名なり 藻塩草 長月の九日菊の花を酒に浮べ其實邑中に在て未地に墜ざるを採ふ毛穎和名以加

毬栗

魚花

果

和漢三才圖会 其實椶に似て本窄く俗に唐椶と云ふ一月ありて熟す故に一熟と名づく其樹枇杷に似て葉苦く麻に似て小く皆色淡く潤ふ文理隆明なり五痔を治するとゝ

識て魚毒を治す

櫟

くろくぬと 櫟に似て花ハ栗の如し實ハ椎より少しく大し木硬くして多く船の櫓に作る

色見草

藏王 秋もまたもゝぐさの實を以て秋とす

色不變松

荀卿曰隆冬と經て凋まず雪霜と蒙て變せず其貞と得しるべし 新拾 いろかはらぬ松君とて千世の友とぞなる 入道前内大臣

花

大和本草 岩蓮花俗の名之其草の形葉のあらゝ恰も蓮花の開るゝ如し異名之或ハ云佛甲草是なり

岩蓮

鰯の黑漬

豫州の産なり宇和郡と称す製両鰓を切削て鰯と鯖の性腸の中に黑汁あり塩水に和して其魚黑しゝを黑漬とす

道恭

九日 迎鐘 山城国名所 槙尊 建長寺 異の角よりあり今の建仁寺大昌院管領也 楽師堂あり是珍皇寺ハ弘法大師の開基なりて元葬場

雍州府志 珍皇寺ハ弘法大師の開基なりて元葬場

七月 六

六道ハ五條の末北

小堂ニ地蔵と安置し、世ニ六道と称し、傳ヘいふこの所、冥途ニ通ず、故ニ小野篁の所より親ら六道ニ行て帰るなり、是ふるうて毎年七月十五日ニ九日ニ男女参詣す。紀事

今日諸人六道地蔵ニ詣て男女相雑て聖灵を迎ふるといへ各槙の枝を買て携帰る又新穀を買て聖霊供ず是を私と称ス○六道参ふまうで槙の枝を買ひて家ふるう、霊前ニおくハ俗聖灵槙の葉ニ乗て来るといふ是聖灵を迎ふる意なるべし。古事談 珍皇寺の別當某云、当寺の鐘ハ慶俊僧都こゝに鋳る、慶俊入唐の時留主もる僧ニいへらく、此鐘土中ニ埋三年を經て堀撞べし、衆僧三年を待ニ甚遠、纔ニ一年を過して堀撞ニ掘撞ニ其声唐ニ聞ゆ、慶俊曰我寺の鐘唐ニ聞ゆ念ずらく三年を待て是を掘撞ニふるる時ハ撞ずして六時ニ声伝るべしと歎惜す○かゝるの所謂ふて、聖灵をむかふるゆゑ撞ふ〻是を迎鐘といふ○六道ハ桓武天皇延暦十三年長岡より今の京ニ遷らせ給ふとき諸人の葬場と定めふ。遷都記 ふるとゝろ、本尊薬師製傳教大師の作七佛薬師のそのことゝ

初涼

王劉鐸詩ニ云、昊天清旦高秋瓜発初涼。

墓参

七月朔日より十五日ニ至り

て各祖考の墳墓ニ詣ることを唐山の人清明の日上墳祭掃ニ同し○源順家集ニ七月十五日ごんかゝせて山寺ニまゐる所にてのこりをれる蓮の葉をひろゝ露おく山ニ我いきをかくり是盆の墓参ことゝ 和漢文撰 前文略之一家之

ふ杖ニ髪の墓まわりはゆるこゝろのかゝゝもゝ芭蕉評ニ云故翁伊賀の西麓庵ニて、例の文稿をあらゝむるそ今思ふふ白髪の竟祭ハ其日の感情ハ演ずるを発白ハ祭る姿にあらず、此故ニ参の字と以て歩行の様と形容せしふ當季の詞も慥ニ増て切字の入所なし、此等や有様斡と云て まゐるこゝろのゝこゝもゝとゝ下の句と云ひ次て、俳諧の歌もゝるべきやゝ

蓮の飯

いの部生身魂の条ニ註ス、

花筌

籠造て花とりて美〻鮓

初鳥狩、初鷹

貞徳曰、とゝ出の鷹とはじめてつかふを、初鷹とも、初鳥狩とゝもいふまり、鳥屋出の鷹とゝ、夏の羽のぬけかはるを鳥

屋まで羽の出そろひくると盆の聖霊の箸とゝ
夜鳥屋より出をふより箸鷺しゝ申とゝ
の条をも見 ○小鷹狩
合もべし

鳩吹

歌林良材 藻塩草 袖中抄 ホ説同し

炭俵集 名月や誰が吹おとをホの鳩 酒堂

燃ふ代ふべきもけこ又夏月河

辺の遊興ゝ

花火

和漢三才圖会 天才圖会

御傘 正花を持ゝ

萩

和漢三才圖会 天

竺花ハ花史ホ云る

ゝ如ト挿まるふ枝葉長く垂地と蔽ふ狀糸櫻ふ似て

一挺三葉棗の葉ふ似て又南天燭の秋ふ似て尖らぶ柔

軟ゝ秋小花を着淡紫色俗専ら萩の字を用ふ奥州宮

城野方三里ばかり萩生茂ゝり山萩あり白花の者あり白

紫開分の者あり○或書ふ宮城野の萩ハ草ふあらず木萩

ゝ号おどふ作る木あり梢ホ青き枝生てゝ枝ふ花さくゝ

○をやゝあゝの萩鹿鳴草古枝草糸萩

萩の錦

錦ふ

小萩さゝ萩ホ其頭字の部ふわつて詳

ゝゝゝゝふあり

新後拾 いぐまくこかもてゝ

萩もぎの花のふゝきの露のたてあぬき 法皇御製

萩殿

萩の戸

禁秘抄 萩の戸ハ常の御所ゝ

六要抄 萩ふ限

と

の方貳間の前 五社百

首註 菊戸萩戸同しゝ

清涼殿の西

蓮の實とぶ

蘇頌曰其莖萩

ふ至て黒ゝして

水ふ沈む石蓮子ゝゝ○山谷詩倒載収蓮荀云

ゝゝも蓮の子の房中より抜出ゝ穴ゝ鞭と見立しゝ

初嵐

和漢三才畜会 山の氣と嵐とふ醫書ふ山嵐不正の

氣とふ是より今初秋以後朝夕山より吹風を俗ニ

嵐と名つく 連哥新式秘抄 初嵐

七月末より八月中ごろまでの風なり

絡線虫

うくうせん

六月の内ふ

ゝ鳴初て七月中ごろまで野義の中昼盛ふ鳴く其声

ギイ、スゝとふる如ゝ一二声の内ふ、チョンと舌打を俗ふ

蛩と云て小籠ふ入て市ふ賣て小兒の翫ゝ

長蟲蟲ふ似て大もり是もゝ

チョンを筬打音あり又ギスとゝ

夏の附合ふ、砂と這ゝ蘇の中の絡線の

蟋蟀

冬蟲

蟲蟲の屬長サ二四寸長

両額ふ眼あり目の上ふ二ツの鬚あり翅灰赤色黒

點あり腹の下白く善跳て捕へ難し

櫨 和漢三才圖会 櫨以て黄色と為す

〇今の俗これを櫨と云ふ、其葉小く淺青色にして天子の御袍黄櫨染と称す是なり帛と深て上り砥水と用ふ暑染ゑ黒茶色となる

莖微赤し三月小白花を開き紅子と結ぶ秋に至て紅色となる

漆 和漢三才圖会 漆の類多くして兼柳の如くにして滑く元山木今世子と採て專ら蠟燭を作る

依て多く平原の地に植て利とす

兼三秋物 廿

日亥中月 廿日の亥の正刻ぞ云云

ふと同じひきまり或ハ万葉裏書ふもこと薄と穂を出て籟とさげくるゆうみる薄といと能因申しけると

花野 千草の花の野に咲ちらてくること

野の花といふときハ花体とありて野ハ用とり花野といふときハ野体とありて花用とり心得し

芭蕉 和漢三才圖会 芭蕉乾草

濕草に載て軟ふる地に植て茂易し春葉と生じ秋に至て止む冬根莖枯ぬ年々発生ス冬と歴て大なる黄花を開く極めて

稀〇東鑑に其花と優曇華と云ふ〇

葉雞頭 雁来紅をいふ葉の部見る

薑 和漢三才圖会 生薑音姜今俗多く姜字と用ふ剝我の音ときて米其腰とも云ふ

蓼 倭名抄 生蓼 久礼乃波之加美 蜀椒 奈留波之加美 蓼椒 以多知波之加美 呉茱萸 加波波此等と以て考ふるに往昔波之加美といふ今ハ辛果の總名と

蓮芋 美なり或ハ呼て栗芋といふ

蓮 花ハ蓮と云ひ圃園に種るものを栗芋といふ

彈 彈塗魚俗波世川の末海の条に出ず

班龍 鹿の異名

鮒鈎 和漢三才圖会 彈塗魚あり常に水底に潛行小鍛と以て餌とす綸の端鈎と去ること三寸許の處に鉛の錘と着鈎と地に附し微動の響ご候て卒に是を秋月貴賤以て遊魚の一ツとす形細に似て小く細鱗體畧滑にして口濶く腰大に眼上に向く班點微黑を帯び尾にも又小班あり虎彈魚

納彈魚 飛彈魚ホの類多し

八月 八朔

田の實の節供

特牛の節 紀事 凡毎月朔八吉日ゆゑて相賀ぶこと中田面の節 華と同じ今日殊ふ八朔と称し、又特牛の節と称し、又田面の節と号し、中世農民稲の初穂を、又田面ふ田の實の節といふ、世ふ又其訓を借用て、愚の節と称し、蓋君臣朋友相依て頼の義ふ取、君臣朋友の間互ふ贈答の義あり、今日貴賤各白帷子を着し互ふ慶と修す、公事根源 八朔の風俗、後嵯峨院潛龍の時、外戚源の通方卿の亭ふ在〻ふ、近習の男女密ふ斯義をふして、閑素を慰め奉る、後皇位ふ即くあふ、永来嘉事ふ、

初月夜

或説ふ四日五日六日迄をいふ書ふ見る、〇青藍曰、仲秋の月ふ、初月と賞もてる八三五の月を待ちそろよりいふ、あるべし 猿蓑集 粟津とめそ〻ちぬる初月夜半残 初潮 十五日の潮といふ、一説ふ初潮の初の字八巣月の潮といふ 五雑組 海潮八月獨大なるハ何ぞや、潮ハ月ろ感ずるもの故ふ月望にして潮盛ふして、八月の望尤盛 御傘 伍子胥ろ死霊八月十五日夜ふ風波をおこすと

箱崎祭

十五日 神社考 筑前國那珂郡、此社ハ誉田帝の祠ありて、博多ふ近し、〇祭る神三座、中ハ應仁天皇、東ハ神功皇后、西ハ武内宿祢ろ、仲哀天皇三韓を討んと欲したまひ、神功皇后をくるふ、筑紫橿日の宮ふ至て給ひ、軍旅を催たの時、天皇崩御ありこの時皇后懐妊臨月あらんことを乃自ら男子の貌をなし、弓鷲矛鉞をとろし、祝して曰、請征伐の後降誕ありと、三韓ろ〻〻平定し、筑紫歸りくるへそ男子降誕〻〻應神天皇是ありその地を亟て宇弥邑ろ〻〻、鞆衣を宮ふ籠めて地ふ埋み、松を栽て標とふそその地と呼て箱崎と、醍醐天皇延喜廿一年六月廿一日、託宣ありて宮を宮崎の松原ふ建る、例祭八月十五日、〇古老傳ていふ、昔この松原ふ我定慧三字の簱を埋む、故ふ箱崎と号す、松をその所ふ植て標とふ、

縁起 昔日幡四流ふ幡四流虚空ろ降其所ふ松を栽て標とふ、故ふ八幡の号あり、諸説 神傘ふ正花あり春迄ふ異あり、

花曲

貞享式 神傘ふ正花あり春細ふ穿鑿をれば種々の理

屈あるとどおの分ふて置方うよさうと、如何する
事ふやちゝも今植ふる花種も花畑も決して秋ふ
むべきるふ〇花畠ハ草花ふるまバふり、初紅葉 初花初櫻といふふ同
木々の梢のまろゆまぢけこの 新拾遺 ものいとも
もゞまふあげそもばるる 宗長親王

薄荷 薄荷、薮蘭、
蓋荷菜ホの諸名あり、本綱曰二月宿根より苗と生ず
清明の前こゝと分つ方ふる莖赤き色其葉對生ス初
時形長くて頭円し長まるふ及て尖る其莖葉茎ふ
似て尖て長し冬を經て根枯ぬ按るふ多く山城ふ出
花紫 花彙 大和地方多く藝春種と下ふ長て
苗の高さ一尺以来葉ハ謝落金の葉の類し
て小ふり又俗ふよぶ琉璃草ふ似ふ差互して生ず三月
花と開く梢の葉の間ふあり形状円く瓣五出やて内
ふ蕊髭ふ又瑠璃草の花ふ異ふるとやト、こゞその
色白し又紅及ひ黄色のもあり下ふ長苞あて
ゝとゝ〳〵実と結ぶその形円く尖ふ穆ふ類して
大ふり秋ふ至て熟す黄白色ふ〇按ふるふ御傘

ホの非書ふ花紫と秋と〳〵若紫と春と然るふ本草花
彙ホの説三月花と開くふのふり紫草と種て試るふあり
て曰此草秋種るものハ春花と開き春種るものハ秋花さ
くといふ御傘ふ花秋ふりとゝ〳〵るも亦遠ふふあらず
〇絹帛を紫ふ染る者此草ふり、花芒 芒の条ふ出ル、濱木綿の花
大和本草 品和 濱木綿万年青ふ似ふり俗濱おもとといふ
海辺ふ生ず七八月白花とひらく莖高く巴て八梢ふ
数花あり花ひらく巻丹の花の形ハ似ふり好花ふ
あり李秋実と結ぶ花咲る跡ふ数顆ふ成る一顆の
大さ胡桃の如く内ふ核ふ白肉あり中畧 薫信曰今按ふ
西土ふもあり濱芭蕉といふ紀州熊野ふ多し莖ハ雪実
と畏る宅中ふ植て八冬月葉ハ厚く色ハ成ハ冬ふ
ておおふべしふ植て屋の暖ふ
ふかぐ〳〵海濱ふあるそこハ潮風温にして雪早く消ふ故
ふ是ぶ二種あり一種ハ葉柔く薄く其莖の皮多く重
まり是百重ふ成ふとゝ〳〵ふ一種ハ葉つよく
〳〵莖の皮重ふらず 万葉 三熊野乃浦乃濱木綿百

重成心者雖思直ふ不相鴨人九 滑稽雑談此者
末俳書ふ載る然ることゝ古奇ふ多くよりて
以て李ふ用ふ、

針蕈 和漢三才圖会 乳茸ふ似て微し、長さ二寸ばかり白色平地に生ず、狀松茸ふ似て

初茸 同上 淺山松樹の陰處ふ生ず、狀松茸ふ似て小く初生より傘ありて内ふ細き刻あり内外赤黄色立秋の初ふ出づ柔ふして味甘く諸茸より先ふ出つ故ふ初茸と称ず、

白雁 白雁 白くして翅翮黑く觜と脚と赤色其肉脂少し凡中秋白雁先来て雁金ふ次て遲し春ハ真雁ふ次て先て歸り白雁ふ次ぐ、

初鰍 和漢三才圖会 鮭ハ鯉の本字魚臭あり正字未詳狀鱒ふ似て円く肥太るゆゑ二三尺細鱗青質赤章腹淡白く肉赤く細刺あり脂多く味厚美ゝ頭の枕骨軟ふして瑪瑙の如し氷頭と称ず味亦佳ゝ 大和本草 本邦東北州の大河ふ多し南州ふハ稀なるのみ、和名抄曰鮭和名佐介俗鮭字鮏鮭の子ゝ 同上 其子二胞あり胞と用ふ非ず、

鮏 中數千粒明透上ふ一紅點あり、鮏と云ふ又鮏ふ甘子と云ふあり、

放鳥 祭の条ふ載ス

九月海 秋は

嬴廻 紀事 この月九日小兒小石と以て海螺の殼を穿ち鉛と鎔して売の内へ入れ或ハ洲濱鉛と売の内へ充て其力と助け各緒と以て海螺ゝ壓ひ勢ふ乘して臺中ふ投入れ運轉せしむ其力つよきものハ其力弱きものを盆外ふ出も互ふ勝負を爭ふ之れを海嬴擊と云ふ、席の両端と長て之れを盆と云ふ、

和漢三才圖会 いつゝの時より始まる之れ田夫野人の玩ぶ所なり海螺の売を用て頭の尖てゝ殼き平ば風の尖りと摩て凹ゝ糸繩と巻て引てつゝと席盆の中ふ舞ふ二三の螺と以て勝負とす山さる者と負とそ其先ふ入るものを甲かゝ後ふ入るものを乃宇と云ふ打合て同く出ることの有ハ張と云ふ張のゝきハ伊加と勝と九熊野より出づる海螺厚く堅し、

婆利女祭 廿日〇婆利女の社ハ洛陽高辻の北室町の西ふあて祭礼昔八七月なりしを中ごろより九月廿日とそ

雍州府志 繁昌の社、元針才女と祭る所やして貴ハ辯才天なり、針才女と繁昌と、和語相通し、依て誤傳あり、宇治拾遺 むかし出雲の前司こと人のむすめ、所ふるせうそくふ華ことさめ、鳥部山ふ葬ことさめ、その死骸かの所ふろうて後ふさらふ動ふ、くもあらぬせんこと多くて、此所ふとゝめ侍ふこふの塚のもとゝ、六七間ばかり八人も住つゝ流地ふて有りと、何人やらん、社と建つるよし侍て故有て辯才天と祭ぬ、

竈蓋内傳 牛頭天王娑竭羅龍王の三女と娶てゐ一つ、その名と婆利女といふ、○安藝嚴島の母才天女婆竭羅龍王の才三女なるよしいひつゝふ三ツの見ハ婆利女を母天といふるふこと故ふ死ふ[illegible]ばそ、○大閤秀吉ふめ社と東山佐女牛の八幡宮の傍ふうつゝ[illegible]の其ざ祭つゝ[illegible]ふ[illegible]ふ、ふ[illegible]の所ふ安置そと、

花の弟

異名多類 花の弟、おくまて咲やそ[illegible]ふ[illegible]ふとゝ、[夫木]ふ草の[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]と八重くふのこみゆる[illegible]、蹠、胎

榛 時珍曰榛同低、小ふして荆の上、

叢生も冬の末花とひらく、榛の花の如く、條ふして下ふ垂る、長さ二三寸、二月葉と生も、初生ハ櫻桃の葉ふとし、皺文多くありて、細き歯及ひ尖ありて、其實苞ふ子、三五相粘、一の苞ふ一ツ、實々ふして榛の實の如く、下壯上鋭し、生ハ青く熟ればハ褐ふ、其殼厚くして堅く、其仁白くして圓く大さ杏仁のとし、亦皮ふ尖ありて、然ハとも空なるもの多し、故ふ諺ふ十榛九空、○その葉悉く皺む、依て和訓ハしばみ、実と以て秋季と

柞 似て秋紅葉し、冬落つ、城州柞の表名所あり、

[くくるせと] 山木なり、高き者二三丈、葉ハ櫟ふも、且奈良の西南ふ祝園とゝふ所あり、城州の内し元柞園し、後祝の字ふ改む、祝園の神社春日大明神、[illegible]の森皆柞の木なりて、秋甚ふ紅葉も、他邦ふも稀なる木なり、

番綿、番貂 大坂ふあり、江戸へ積出も綿し、その廻船一番二番三番ありて、江戸へ着岸の遲速と以て損益と定む、商賣專ら勝負と事ふ、

初鴨 [貞享式] 此名ハ全く新撰なり、或ハ賞翫とも加減とも[illegible]、今按ずふ

奉膳式なと雁鴨と並あげながら、賞せざる処ハ秋冬の差別ありて、さまざまども見聞の恣情と論ずべし。初雁といふハ風雅を思ひ、初鴨とゆへハ風味と思ふ事と天眼と天耳とのちがひへなるも、譬バ初雁と音に興じても風味に思ふべき初鴨の冬なるハ勿論すて、初の字をとらず秋とおゆるなるへし。

肌寒 〔秋声賦〕其氣慄冽砭人肌骨

に

七月

庭の立琴

〔江次第〕乞巧奠所より筝一張を申下し、東北西北の机上の妻に置く。註に延喜十五年の例、和琴を用ふ。裏書に云、柱と立るに三様あり。常に半呂半律を用ふ。秋の調子あり。〔公事根源頭書〕半呂半律とハ、樂書に云、黄鐘調・大食調ハ律呂の調、平律の調也。〔夫木〕あはれさのあふ夜の庭におく琴のあまりに引かさくりふの糸　寂蓮

新綿

〔藻塩草〕に七月十六日あり。内裏の貢の綿なり。○俳諧に八貢にもあらざる作者あるべし。

二百十日

正月の節立春の初日よりかぞへて二百十日といふ。此ごろ秋の最中にて、金氣殺伐の氣変動する時也。故に必ず風雨あり。此時節中稲の花盛なるを以て、おそるゝ事を農民恐る。〔續猿蓑〕[illegible]二百十日も恙なし　葛平

廿六夜待

江戸の俗、今月廿六日の夜、月の出に三尊佛の影向を拝むとて高輪に群集して、此夜藝者居手踊或ハ音曲八人藝うつし繪等と仕組者あり。是を一夜藝者といふ。酒樓に月を待遊客是を招て興とす。又虫賣菓飴餅いろいろの商人来まで賑へり。土人幇間虎八云、土人ハ廿六夜祭と称す。其由来を尋るに審ならず。むかし近村の民、此処に来て毎年に生さる蒜を折取圓座として月の出づるを待し。このへんに今聖天棚に敷さる蒜を敷物に賣ハ、その名残なるべしと云。此外田安の臺、湯島の社地群集すといへども、高輪の賑ひにハ及ばず。

兼三秋物

似撰 御所[illegible]

濁酒 醪 [illegible] 和名毛呂美、今俗濁酒といふ。

八月

庭たゝき

鶺鴒 [illegible] 部に見えし

九月

鬼節

名久曽[illegible]田美

其葉秋ニ至テ紅葉ス、面色丹の如くやゝて青赤相
襍錦の如し、故ニ俗錦木と云ふ、子を[illegible]、頗る
て美ふ正しくして紅あり、信州野州の山谷にあり、

七月

星合、星の契大

齋部記 天の河の東に織女あり、是天帝の子
なり、機織ふ労役して、容を理るふ遑あらず、天
帝哀て、將ふ嫁せんとして、河西の牽牛と
與ふ、嫁して後竟ふ女工を廢す、天帝怒て責て河東
ふ歸らしめ、惟一年ふ一會せしむ、

星祭、星の手向

周處風土記 七月七日の
夜庭を洒掃して、露ふ几筵を施し、酒脯、時の果を設く
香粉を河鼓織女ふ散し、云注云二星辰会もるふ
當て、夜を守る者皆私願を懐く、或云天漢の中を
見るふ奕奕たる白氣あり、光曜五色あり、此をもつて
徴應とす、見る者拜して願ふふ富をもひ、壽をもひ、
子なきを子を乞ふ、唯一を乞ふ、願を得、兼求ふを得
む、三年ありて是をもとめ、頗る其作を受る者あり、○
牽牛、犬飼星、織女祭、河鼓秋さうの姫、薫姫さゝぐふ姫、

百子姫、子織姫、朝顔姫、梶の葉姫、妻、梶の葉、
天の川、秋去衣、石枕、九枝燈、庭の立琴、紅葉の帳、
火取香、願の糸、衣裳を曝す、芋の葉の露、素餅、銀
河、銀漢、雲漢、烏鵲の橋、紅葉の橋、羊の渡、三星の屋形
乞巧奠、乞巧針、乞巧瓜、七箇の池、百箇の池、妻迎舟、
妻迎舟、七種の舟、以上各頭子の詳ふもとりて誌す、

星のかし物

いの部衣裳を曝す

といへる条ふ注す、

星合の濱

増山の井 伊勢ふあ
マと是の逢ふ所なり

本願寺の籠花

七日 紀事 昨日
の晩、東西の本願寺水流並家礼花数種を以て松の火
を作り、又槽の形を作り、中ふ草花数種を建て
小紙をくゝりて堂上ふ[illegible]
おく、今日諸人[illegible]

盂市

草市 京の市

紀事 凡七月街市ふ大鼓[illegible]
寺時頭巾、作鬚、金銀箔の紙[illegible]
の具、又盆用紙子燈籠、臺燈籠、亀[illegible]
小行灯と賣是皆中元の夜点する所なり、[illegible]

乾瓢茄子 南小豆空間刻、木瓜、蔬菜、大小の三器供饗器、茄子、[illegible]

聞聖吳会 **穂屋** みの部御殿[illegible]の處用ゆ、

頭廻尾足具[illegible]、翅然として[illegible]

三月子と下し五月再び植ゑし苗の高さ三尺[illegible]

白の二色あり、大指のごとく、[illegible]

尖り桃柳の葉に似て鋸齒あり、枝の間に花落[illegible]

雜色亦変易[illegible]

初のり秋の尽まで開謝相続て実を結ぶ、

特珍曰其實小瓜の如くにして皺あり津潤に味不[illegible]

[illegible]のごとく木瓜[illegible]皺ハ乃チ花の落し處臍蔕[illegible]

木瓜灰に燒て池中に散ず以て魚に毒をなし、

木瓜の子 和漢三才圖会 世に木瓜と称するもの、木草の註に合ゆ是木瓜

桃ふ[illegible]て木瓜ふ[illegible]ものゆ、武州江州より多くこれを出す、

藥肆以木瓜小充近頃唐木瓜といふ者あり、人家花を愛

も是真の木瓜あり、

穂掛 藻塩草 田舍の稲のしろ穂の新

らき藁の十[illegible]ものを

て穂と組合せ門戸に掛て倉庫の[illegible]

掛て神に奉る[illegible]

灯 和漢三才圖会 駿州四月小花を開く純白[illegible]赤

白色あり[illegible]帶に青し宿根より自らおこる小兒中に[illegible]

白子を鑿去空殼をとりて[illegible]

音あり、○今の世小兒の童[illegible]白くうつくしく吹[illegible]

兼三秋物鬼 初花の卷寛政五年の所[illegible]

[illegible]と吹[illegible]

いふめ[illegible]

いしふ[illegible]

南瓜 源氏物語 野分の卷[illegible]

時珍曰南瓜の種[illegible]

[illegible]出す三月種とし[illegible]の地に宜し四月苗を生ず蔓

と引こと甚だ繁し一蔓十余丈延[illegible]

地に遍て即着其蔓中空其葉の狀蜀葵の如し八月[illegible]

の如し八月[illegible]化をいたす[illegible]

さ西瓜の如し皮の[illegible]

類[illegible]

收む暖處に置けば留て春に[illegible]

一名東埔寨一名唐茄子本草[illegible]

是ほらいも形螺に似て大
く、螺芋と故に名つく、ほど

月夜　つくよ　月に星の明きを夜とこの
より只秋季のみ云捨て八星月夜の名と
あはせて只秋のみ云ふ論あるまじ
是は秋にして月あるを称句脇に三吉こは此名目なる
きこは其三句は素秋にして七句目の月の座に准の事
にて異名とをぼべし、されば例の俳諸の序にこは故
翁芭蕉の遺訓なり、

八月　譽田祭

護國寺地蔵院

の縁起に云、當社は人皇十六代應神天皇の御陵なり、
世俗神功皇后の御胎内にはらみ給ひて三韓征伐の後、
筑紫の國に於て降誕御産の形ある故に誉田別
の皇子と号し奉る是云天の家と守護あらんことを、
此時に顕現てより治世四十一年仙齢百十歳の春、大和
国豊浦の宮に崩ず、玉躰を瑪瑙の棺に納め、河内
国藻伏の岡に葬り奉る、三十代欽明天皇の勅によ
りて宝殿を營み三所の神明と祀る所謂中殿は八幡

大菩薩、左は仲哀天皇、右は神功皇后、世に神祠多し
といへども、當社は玉躰を納め奉るの霊廟なりて八幡
宮の根源威験深きことを知るべし、元〇神祭八月十五日
と、先ッ十四日の夜奥の院の御宿前本堂へ鳳輦を行幸
ふし、翌十五日午の刻還幸舞樂あり、四月八日若宮祭
申年皇舞隔年ふることと行はる放生会は當社ふることなし
よし、但社の部八幡の放生会の条ふ出つ、

菩薩祭　廿二日

肥前國長崎ふ於て来船人船神と祭る、八月廿二日元
とぼさまとうとい、和漢三才画会舟の神と媽祖娘々
といは俗ことと舟菩薩といは唐船長崎ふ来て往々祭
る所の神是なり、船中の品物と水揚
して四ヶ寺あり、福州石屋町崇福寺、章州八下筑後
町福済寺、南京[illegible]町興福寺、[illegible]寺皆唐僧
住と、今は看主持の外は日[illegible]
いふあり、昔は[illegible]特あり、[illegible]
東ふて法事修行あり、本尊は[illegible]
その寺院へ恭諾も其異体とし[illegible]

り、四箇寺と
ふ黄蘗流なり、**穂芒** 花芒 芒の穂と尾花とに似たり
尾花 穂芒 やはらかなる形容の尾
ふ似たり、故ふ名く、**牡丹の**
花芒ともいふ、和漢三才蒔会 夏
月川の地と採晒し
乾し、古き畑の土と細き沙とを以て
和名抄 九月紅き
芽と出でと移し栽べし、こと培ふふ糞肥と用ふ
しかど冬月油渣と用ひて少し根の傍ふ入
ふ或ハ鮮魚の洗ひ水と灌ぐ亦佳なり、**頬赤鳥**
正字未詳 和漢三才蒔会 状雀より小く背の色も赤
雀のごとし、其頬赤く眉白くして 嶋鶉の文あり、声
青鶏ふ似て細高し、 同上 俗頬白鳥と
常に蒿間ふ棲む、 **畫眉鳥** 状ち鶯より大く、
灰赤色眉白く畫くが如し、頬赤白くして間黒し、
背上ふ黒点あり、翅尾畧黒く、尾の両端ふ白毛あり、
顔微赤黄色臆下ふ赤き斑あり、其足赤黒く其声
山滑かにして多く囀る、小鈴の音ある者、其声と謂て
行鈴 諸鈴 菊の異名あり 藏玉
の名あり、 **九月** **星見草** 庭もせふさくてい

いろいろほしとぐさゆゑなる色とまぐれあるべしこと清潭○
異名ありとも星みるやてよむなり 古今 くさぐさの雲の
ちくさなてうる菊ハおもろ 鶏上ナ 万葉 人
ほしくさてらやまくれる、 **鬼目** 家の庭根ふ自
然ふと生ぜ蔓草ふ、葉朝顔ふ似て小白花を開き秋
実と結ぶ秋季ふまるるれハ其実と貴しとす暮秋その
実甚だ紅し鴨好んてこれと啄む依て名とす、 **菩提**
○時珍曰白英ハ其花とりハ鬼目ハ其子の形象
子 校量類珠功德經 諸陀羅尼及び仏名と念誦する
ごとく、木患子ハ千倍なり、浄土ふ生ぜんと求め
ば、此珠を受よ、水精ハ百万倍なり、菩提子ハ無量倍な
りとせり 昔洛東建仁寺の千光国師宋ふ入此種と
得て帰朝し、筑前の香椎報恩寺ふ植つ
傳ふ云ふ、後其種を京師ふ移し植
泉涌寺六角堂敵山の西坡ふ
予ことを見る、一樹ふ果二色
く大く、又一ツの葉ハ木犀ふ似
ようの嫩なる細枝と出しそこふ花さき実と結ぶ

其実淡黒堅硬〳〵念珠〳〵して香氣芳芬〳〵、興聖寺の僧曰、是経に説る菩提樹なり、天竺此樹下に於て佛成等正覚し給ふ、樹の高さ一丈ばかり、枝極のごとく百日紅に似て甚だ奇麗なり

杜鵑草

大和本草 品 葉は紫草に似て短く小し筋多し、又篠の葉に似たり、蒼は蓮の如し、花秋開く、六出あり、中より蕊出て又花の形をなせる蕊と〻ふ小蕊の黑あり、杜鵑の羽の形に似たり、ちゞり染のごとし、莖の高さ一二尺ふもときぞ、

兼三秋物

辨慶草

和漢三才畜会 景天和名以波久佐俗ふいふ辨慶草、本綱に景天極めて種多し、枝を折て土中にさしゝ、淋酒旬日頃生ずるなり、二月苗を生ず、脆き莖微赤黄色を帯ゝ高さ一二尺、ときどき折ハ汁あり、葉淡緑色にて光沢あり、葉に厚く狀長き匙の頭及び胡豆の葉に似て尖らず、夏に白花を開き実を結ぶ、連翹のごとくにして小く、中に黑子あり、粟粒の如し、人皆盆に盛て屋上に養ふ、これを火を辟べし、故に慎火草の名あり、按ずるに景天佛甲草に似て大なり、こゝを折取て檐間に倒懸るに日を経て猶生て後地に栽るに亦活ずと馬歯苋に勝れり、蓋辨慶は源の義経の家臣にして、女童相伴て強勢の士なりゝ、故に相比してこれを名づく、

城岐久佐も亦古の字訓なり、

布瓜

時珍曰、六七月黄花を開く、五出微胡瓜の花に似たり、瓜蔓に黄あり、其瓜大さすべく、長さ一二尺甚しきハ三四尺、深緑色斑の點あり、瓜頭龍の首の如し、熟する時皮を去る、蔬に充べし

八月

紅蕓草

和漢三才畜会

大さ杵のごとし、

陰處に生ず、其織紅色裏白く細き刻有て毒あり、

虵草

大毒あり、故に人近よらず、

虵

穴に入

月令 仲秋月雷始収声蟄虫穴〇和俗春の彼岸に出て秋彼岸に入といふ、

七月

とゝ

あゝこの稀なるもの妻こそ故に女年に一度逢ふ、あゝとゝ一妻とよくこそ哥ありけれ

環をぐて活法の書ふ、織女の異名のやうふ云へり、年代渡出せるハ、もろもろしいかゝらど織女の、ひこ星を、織女の年ふ一度天の川を渡る意あり、万葉王燈喜不絶物可良佐宿者年之渡一夜耳、

籠 一切經音義 燈籠又爐ふ住ふ火の居所ニ凡火と盛の器と爐と云ふ 紀事 九中元燈籠を用ふるこ、寛喜前後ふ起て、今ふ至て相續て故事ことを定家卿明月記 近年民間ふ長竿を建てその末梢ふ燈籠と設け、紙と貼し灯と擧て遠近ことりふことを見る、流星ふ似ることり 五雜俎 宋の初ふ中元下元皆燈を張ること上元の例の如し、大宗淳和年中始てことをやむ、○本邦の俗、中元の夜家々燈を張て廿四日乃至晦日ふ至る、或ハ明日より三十日ふ至るもあり、又白き提灯を出せもあり、○高燈籠、折掛燈籠、花燈籠、禁裡御燈籠、キリコ燈籠、以上各頭字の部ふ録ちて註せ、舟燈籠、影燈籠、舞燈籠、揚燈籠、壇山の井ふ云へり其形容未考、

燈籠踊 紀事 洛北岩倉、花園、両村少年の女子、各大灯籠を戴き、八幡の社前ふ聚りて、男子大鼓と撃笛と吹踊とをくむ、是を灯籠踊といへ、頭上ふ載く所の灯籠踊る女子の家々、春の初ふりこと作て、互ふ其作る所の模様を秘ス云、

烏屋勝 鷲新毛と生し羽翼全く備つ、烏屋と出るの時、逸勢特ふ秀ぐ、これを烏屋勝といへ、○去年より八月廿一日ふ狩ゆくを名の秋ぞうれしき、定家

蜻蛉 秋津虫 ちろへ 和漢三才圖会 総名ニハ大也 秋津虫 邦の形蜻蛉ふ似ることを以て、秋津州と名づく、和名抄 蜻蛉 和名加ゲロ布 和訓栞 かけろふのあるハ蜻蛉といへ、中略 水辺の木蔭ふすゝてその飛負数々と水ふ点し、閃々と電のごとくふれど、関炎ふ比ていふるあり、

秋津 和漢三才圖会 総名ニハ大也 て青色ふる者紺鬢、一名天紺、又紺ふて明黎一名江雞、小ふして黄ふる者頭最大ふして身緑色、赤卒ハ小ふして赤きものあり、

富草の花 風俗通 わらとふおくるとみくるとの

そふてふつゝ入てゝゝと〈まる〉頼桐 天和本草 倭俗唐桐といへり高サ二
らん、云云稲の花をいへしいへて、
三尺ばかりすぎも、夏紅花をひらく花繁多
ゆゑて盛り久し、美ゆゑて愛すべし、

苧麻 乙く

うせと 和名唐苧又ちうしゝ、麻の如し、甚と
大あり、夏冬の間花穂と抽て色黄ゝ高さ丈余夏
ふ、實あり大

兼三秋物

番椒 天井字 和漢三才圖会

毒ありとぞ、
番椒南蛮の義なり、俗ふ云南蛮胡椒、今唐本に二月種
と下し、菜椒の如くして小、亦胡椒の木の葉ふ似て和く
五月ふ白花をひらき、実と結ぶ、數品大小長短尖りとる
と四きとの種あり、初め青く熟すれハ紅あり、秀吉公
朝鮮と伐ときに彼國より渡る故ふ俗又高麗胡椒と
いへり、○天井守番椒の一種、とぶくく上とむく故ふ名く
とぞ、猿蓑 白てんぢくこうしん

唐の芋 是と連禪紫芋と
まゝりいろう色つく、素
いへり蘇恭曰毒少し、
煮て食ふべし、時珍曰連禪芋甚大ゝて
子少し、○堅紫色と帶ぶ味美く栗のごし、

烏芋

部案山子
の条に出ず

八月

富賀岡八幡祭 十五日 名所記江
戸城南深川ふあり、祭る所鶴が岡ふ同じくしのふ別
當大栄山永代寺 台宗 深川ふ一の大社ゝ或ハのハ神体
ハ菅公の作あり、源三位頼政深くこゝとを崇む其後
千葉家ふ移ゝ、足利高氏ふ傳へ、基氏持氏ふ至り後
上杉ふ傳へて、太田道灌ふくくこゝとを信仰を、磯石集
寛永元年長慶法印夢のゝゝありて永代島ふ宮居
を建立し、同八年成就を、○深川の土人本居神ゝ又
祭礼八月十五日放生会あり二三十年ふ一度ふ祭ゝ行ふ

豊浦祭 神社啓蒙 長門國豊浦郡亀山ふあり、
祭る神中ハ應神天皇左ハ神功皇后右ハ
仲哀天皇あり、三十一社託式 人皇五十六代清和天皇貞
觀元年、男山ふ遷座の時行教和尚行宮を造むこれを
勸請を後土御門院文明年ゝ建立を、○今八月祭ゝ
三月十四十五日の西日亀山祭あり、ゝゝと先帝祭ゝいへ、
安德天皇の御祭礼あり、阿弥陀寺ふ御陵あり、海辺
ふ宮あり、この祭前後四日の間鳥飛ゝと得ゝを、又平

家蟹赤間が関の海辺ニ上る、常ハこのことなし、是先帝
の御祢月ごと里民の乞り、又九月十四日十五日、八幡春日
此両社を祭る、國主より馬二疋
を牽て競馬あり是八幡祭也

烏頭

蘓頌曰附子其苗高さ三四
尺莖四稜を作ス、葉艾ニ似て其花紫碧色、穂を作す其
實細小黒椹の如し、黒色本附子一物と種成熟するニ
至て四物あり、天雄 烏頭 側子 附子是也

黄蜀葵

時珍曰二月種を下し
或ハ宿き子土ニあり
て生ず、夏ニ至て始て長ず、葉の大さ蓖麻の葉の
如し、深緑色、岐子を開く、五の尖ありて人の爪形の如
し、旁ニ小き尖あり、六月花を開く、大さ椀の如し、鵝黄
色紫心六瓣ありて側てり、旦ニ開き午ニ收め暮ニ落、
亦呼て側金盞花とす、其莖長きもの
六七尺皮を剥て縄索となすべし、

木賊刈

日本木賊苗の長さ尺ばかり叢生す、根毎ニ一幹花も葉
もなし、寸々ニ節あり、色青く冬を凌て凋まず、四月こ
れを採○時珍曰木賊ハ目疾を治る者、これを用て磋擦ときハ
光浄なり、木の賊となるが如し、和漢三才圖會 物を磋
を砥の如し、故ニ砥草と称ス、

千振 和 / 胡黄連 漢

○本邦秋月これを採る、
三才圖會 苗の高さ五六寸一根ニ數莖其莖細くして
淡紫色葉地膚草ニ似て小く七月花をひらく桔梗の
花ニ似て小く黄色、○千振 大和本草 胡黄連、黄連
ニ似て大也、黄ならず味苦し此草日本ニありや不詳
千振とて秋白花をひらき葉細ニ味甚苦
苦き小草山野ニあり、たうやくといふ、

酴醾

大和本草 酴醾花の條下ニ云本邦のハ白花千葉菊
の如し、依て筑紫ニて菊いばらといふ中花ハ黄色
なる者ありと、農政全書ニ記せり、
故ニ黄色の酴醾とよぶ、

唐黍

たうきびハ江戸の俗もろこし
あしのふ 春の日 待意ゐ殿を
唐黍さん 荷

九月 杼の實

蘓頌曰三四月花をひらく黄色栗の花ニ似
山本ニて大木あり、葉の大さ七八
す、実ハ栗より少く大也、餅ニ作りて飢をしのぐ年の食
とそ、木ハ斑文ありて諸の器ニつくり箱として甚美也、

木曾の山中ふ多し、是と麹とをるふ其粉と熟易き
こ絲調へ温飽のごとく棒ふ捲て温ある内ふ急ふこと
と伸ばし、冷まし堅く縮つて伸ばし手廻し

眼缶子

甚急なる故ふ俗諺ふ掾麹棒ふるといふ其ありの

桐實

天和本草 荏桐とも油桐とも云、ダモと訓ぜ
るい非あり、桐ふ似たり、其實大毒あり、食ふべ
からず、實ふ油多し、民用をたもく、此油とぬるとて青漆
の如くなる法あり、○時珍曰、器子桐の實を荏桐と名く、
器子ハ實の狀器ふ似たるふ因てなり、荏ハ其油荏の油
ふ似たるなり、和漢三才圖会 農州江州多くこれを種油と
なすこと取る其功荏の油ふ同じ、煉成て漆ふ代ふ、
桐油漆と名く、五色とぬるべし、常の漆ハ白色を塗と
あとなを又松脂とまぜ、船槽を塗るふ水を漏さざるを
をチャンとのたし、年浪草ふ桐油、ダモ、同物といへるハと
ろし

唐柳 無花果の異名こ、

いの部ふ出ス

團栗 ○ ドングリ

の子こ數種あり、
ドングリハ櫟の一種小櫟といふ木の實こ椎ふ似
て大あり、味渋く食ふべからず、櫟の形狀るの部ふ出ス

七月中元 十五日 修行記

道書ふ云、七月中元ハ、大慶の月、
下ふ降りて人間の善惡を定む、諸大聖普く宮中ふ詣、
道士その所ふ於て經を誦し、一方の大聖ふ
昊篇を錄し、餓鬼囚徒ともふ解脫を得せしむ、五雜俎
道經ふ正月望を以て上元とし、七月望を中元とし、十月
望を下元とす、遂ふ三元三官大
帝の稱あり、是俗ふ安の甚しき、

地藏祭 日本紀事 洛外

六所の地藏詣あり、加茂御泥ノ池、山科、伏見鳥羽、桂、太
秦これを九一日六所の行程十四里、文德天皇仁壽
三年、小野篁地藏の像六体を造て木幡の法雲山大
善寺ふ安置せ、故ふこの所を六地藏村といふ、その後歷元
二年平清盛六ヶ所ふ堂を造ることわりて置く、七
月廿四日供養西光法師これを與へ行ふ、今ふ至りて七
月廿四日諸人六所ふ詣ることを地藏祭といふ、洛中の
兒童ハ又各香花を街衢の石地藏ふ供してこれを祭
る、又今日六齋念佛の徒ハ又六所の堂ふ詣て、太鼓を
擊鉦を鳴し、以て踊念佛をなす、俗これを六齋太鼓と

称を、洛東光福寺（干菜の寺）の一孤ちろ〻ふ虫（きろ〻ぎす）の異名異名分類ちろ〻むし夜ふく風やさむしろんとれむしのなくこゑうるる声つめ、

兼三秋物 茅（ちゝや）天和

本草 白茅、本艸ハ蘊頌云春芽を生ず針のごとし、俗ハ茅針といひ小児好て食ふ毒多し、血を破て血を止む

九月 重陽（潛確類書 重陽ハ魏ノ文帝の鍾繇ハ與る書ハ歲往き月来て忽ち復九月九日、九ノ陽數ニして日月並び應ず、故ハ重陽といハ俗其名を喜て長久ニして宜しくすべし、故ハ宮ノ中ハ高会ハ享を、

重陽宴 事根源 九月九日ハ節日にて侍臣ハ菊の宴行ハるゝ〻ことゝ重陽の宴と申、九月九日ハ月と日と九陽の數ハ叶ふゆゑハ重陽といひ、むかしハ天子南殿ハ出御ましまして、節会行はるゝ上達部、御子達ハ始て、其道のハかせ撰韻給り文つくり文臺ハ向て講ぜらる、十月の旬のころハ、もけ子も永魚ともハ例あり、又羣臣ハ菊酒を賜ハる大くハ五日の節会ハ御帳の左右ハ菜萸の袋をかけ、御前ハ菊瓶をあく、又茱萸の房を折て頭ハ挿めば、惡氣を去るといハ本文あり（下略）

千代見草（ちよをくさ）（ちよみくさ）ハ菊の異名あり、慈童八百余歲の後出て彭祖と名を替へて、長壽の術を魏の文帝ハ傳へ奉る、文帝百歲の壽と成さるゝ、和歌ハ菊ハ千代の秋を詠ぜること珍しくもこの此意ハ菊花の異名、藏王菩薩ハ名付給ふ、

契草 國ハ兄弟ハ菊の世ハ三ツ重びて、茅ハ紫へ行ふ、ことゝハ名殘と惜ハ、ハるゝ時、兄庭前の菊と、一本を二つハ分けつゝ、惡しきを、とりハ、ことゝハ此きくとこゝて、ものぐさむ、でしこハ、弟紫へ分ちつゝ下向して此きくとうゑかゝり、この菊二ハ分しまふかゝ枝ごとハ花咲ることなん、

兼三秋物 律（りつ）

の調 素隱曰按ずるハ律十二あり陽六ハ律と、黃鐘 大簇 姑洗 蕤賓 夷則 無射 陰六を呂と、大呂 夾鐘 中呂 林鐘 南呂 應鐘是也、名づけて律とハ、○貞德曰ものもらべ秋こゝ

呂の声ハ春まるべき道理なり共、其ときなるべ、呂ハ雑なり、

八月

龍膽 草

和漢三才圖会 其葉、笹の葉に似て厚く、九月花を開く、花紫にして鈴鐸の形のごとく、上ふむく、花中に黄子あり、又正白花の者あり、笹龍膽と名づく、八重御抄 えぞ草 云云〇思ひ草 八重垣 龍膽 とりまと露くさとの八、通具卿説「道のくの尾花ゆゑの思ひ草今さらかまぐ物とおもふ」〇ことふ 真淵翁云ニ、木丹とことぶきて云、字書ニ木丹草の花也と出る是ニ、源氏をとゝあの巻ニ四季といふるその夏の方ニ花ニ子、さうびくゝふまとゆゝの花くさぐくうゑて、はり、是ニ夏くゝふいくちゆゝ、〇尾花ゆゝの思ひ草ハ龍膽と定家卿の御説なれ、ども、くゝ、くゝとにを龍膽と云ふハ誤とおもふべし、

九月

鯉魚風 九月の風 流水汗霞道、鯉魚風起芙蓉老、

李賀詩 明前

ぬ

兼三秋物 **零餘子** 野山菓 草薢と蔓

菓の形状混雑して分別をぐ〜草薢ハ零餘子あり、山菓のごとく、故ニ諸説草薢と以山菓とし、菓ハ其蔓紫色と帯ぶ其菓四く尖あり其花白色穂とふ〜て下ッ垂る草薢ハ其葉四くして尖り且稜あり其蔓青色淡黄の小花とひらく、暗て爽と結ぶ、三稜あり、山菓もまく、麦とむもぶ故ニ見易らぢ、

九月

白膠木紅葉 時珍曰横〜木の形椿のごと〜五六月青黄色の穂とあり二枝ニ累々さうり七月實と結ぶ鹽膚子と名付く、菓の上ニ虫ありて倍子と結ぶ成て、

八月

縷紅 草 茎葉とゆふ細く杉藻のひらく形に似て長さ六七分の花あり愛まべし、

瑠璃鳥 和漢三才画会 瑠璃鳥俗云留里大さ雀のごとくふして、頭背翼上翠色頸頷腹下ニ至て純黒胸腹白く嘴脚尾共ニ赤色其目圓滑あ〜て清く轉る、

七月

鬼の洞念佛 七日

滑稽雑談 洞八八瀬河の西の山中ふかく、俗鬼のまぐ洞といふ口狹く中闊し、高さ二丈許、深き三丈、昔酒顛童子、此洞より丹波の大江山へ移りしの人、或る昔叡山ふ一童あり、僧徒其美しきと愛し、勸酒交歡の時時人と鼓血ごとく、酒ふ和して之を飲む、一旦魅ことなりて此洞ふ入る、此話羅山詩集酒顛童子の洞ふ題するこゝ序ふ見えたり。

雍州府志 毎年七月七日より十五日ふ至る、村中の兒女此洞ふ聚りて鉦と鳴らし、大ふ弥陀の号を唱へ、こゝ先祖祭といふ、

踊

書言故事 王子醇、ひとり軍士ふとゝへて鼓鼓ことし、遂ふ世ふ甚だ行はる、子醇西人と對陣せし時、軍士百余人ふ命じて鼓とふ、隊ふ軍前ふ出て虜見て驚き愕く、遂ふ之を擊破る、注ニ云鼓鼓ハ樂人雜劇とあり、こゝて跳躍とあるゝ、世人皆之ふ效ふ、○本朝の俗、七月十四日より晦日ふ至て、毎夜大人小兒街頭ふ踊とあり、○懸踊、念佛踊、題目踊、燈籠踊、伊勢踊、木曽踊、小町踊、七夕踊ふあり、各其頭字の部ふ入て詳ふ、

折こけ燈籠

用捨箱 魂祭ふむかし用ひし折こけ燈籠と江戸ふ絶ふ、

續 蓑虫よ 其角 折こけ燈籠月の支月 野馬

中 竹藪と折こけてその俗垣ふ

書 折こけ垣といふ、此燈籠と竹と折こけてつくる故の名あり、ひとりもれ出ていかく家とあてつくりしたはしく、よく竹とかしくもめくるゝ、ものゝ文名のごく折こけて上を狗く形のごとくあり、

麻柯の箸

聖天祭ふ供ふる一ツ一ツふ異ふ上とぞ、

續猿蓑 箸之 麻木の箸ゆとゝふ、こゝ惟然○時珍曰大麻其幹白うして稜あり、燭心ごとぐし、

送り火

火びの部迎へ火の条ふ注ス、

女郎花

和漢三才圖会 女陪之山麓ふ生ず、高さ二三尺莖ふ稜理あり、こゝ蒿の莖ふ似て、枝兩々對生し、節の間ふ葉と生ず、其葉三七及前故の葉ふ似て細く長し、七月穂と生じ花とひらく、最細小正黄色愛ふべし、本朝文粹ふ源順の詩云、如蒸粟俗呼為女郎者是なり、隨て子と結ぶ花白き者男倍之と名づく、

大和本草

敗醬藻塩草ふ白花あると俗ふとゝへし

とい又オホトチハ女郎花に似て花白きありとこそ、をとこなの花ともいへり、敗醤と名づけしハ、此花葉の臭醤の損じたるがごとしと本草にいへり、今試るに然りて、○此花を女子の艶姿にたとへて讀む歌俳諧ともに同じ、[古今]名にめでゝをれるばかりぞをみなへしわれおちにきと人にかたるな、僧正遍昭　[續猿蓑]ところへし鶉坂の秋にさくら

荻

荻の風　荻の声

馬莧　[大和本草]荻ハときまつしといへ淀川其外處々に有て、山野にも水辺にも生ず、中にもしげれども、少ハ其中にあり、て葦に交りて生じ似たるものあれ、水草也、○荻の葉の風わたりて音あるを荻の声とも荻の上風ともいふ、

翁草

[大和本草]麦門冬の一種ふて葉ハ大葉の麦門ふ似たり、暮春及び夏の初め純白なり、故に翁草といふ、後漸く青くなる根ハ門冬なり、尤大葉麥門のごとくふして、異草也、[滑稽雑談]按ずるに和名鈔など白頭翁を翁草と和らげたれ、然ども本草綱目を考ふるに別種也、白頭翁ハ俗にいふ猫草に類似たり、今云翁草にあらず、翁草ハ初生の葉純白なり秋月紫花をひらく、穂の如し、猶考ふべし、又翁草ともいふ、といふ恐もべからず、九月の部に註を

弟切草

[和漢三才圖會]初生地膚子の秋に似たり、兩々相對し枝に極あり、莖葉ともに按めば汁あり、須臾なれば紫色に變ず、六七月小黃花をひらく、單五瓣にして細き蘂あり、英を結ぶ、三稜あり、中に細子あり、葉に用ひて相傳ふ花山院の朝に鷹飼あり、晴頼と名づく、精くて神に入、鷹鳥傷を被ふることある時ハ葉を按てこれを傳る、ときハ愈也、人草の名を乞ひ問とも秘して言ず、然るに家弟密にこれを漏洩す、晴頼大に怒てこれを刃傷す、これより鷹の良薬となる、弟切草と名づく、○又薬師草と名づく、[慈鎮和尚鷹百首]秋の野にまさる良薬とる青くとりかつて鷹やしなひしん、やさしそれなるらん、

旋覆花

蕪須曰二月以後苗を生ず、多く衆の葉に近し、長さ一二尺以来、柳葉のごとく、莖細く六月花を開く菊花の如し深黄色七八月なるに

秋物

鬼芒

時珍曰葉茅のごとくふして長さ四五尺、甚だ快利ふして人を傷ること鋒刃の

兼三

如と

芋生の浦梨 芋生の浦伊勢うり、和哥ゆとへの浦

古今 そこのうつふかえさしゆわいるなしのおつしもれらもしれそこうくうん、

小田守 晩

稻守 山田守 九田と守て稻と守るハ人畜の傷殘ことを防ぐたまうく、

八月尾

花の粥 大内記田原康富日記 文安五年八月朔日 尾花の粥の事、この田来何事ふるや自然見及ぶのこの粥しゝ いまゞ見及ぶぞその子細とそらぞひ返答ー畢る 海人藻芥 八月朔日、小花の粥内裏仙洞以下令用給良藥、夫粥調法、薄黑燒ヲ粥二入合也 後水尾院當時中行事 八月朔の条に、多くこの御いそし初穂よ

鬼のもち草 そしてとそふのうゆきのしと供ん

紫苑の事 紫苑の部ゑるべし、

白粉の花 和漢三才圖会 白粉草正字未詳、春苗と生し冬枯る高さ二三尺叢生す、葉淡青ゆて柔く白雞頭ゆ似て微小く四ー其花朝以後萎ミ夕陽ゆ至て開く深紅色五出、蕚巢ゆて萼の長さ一寸余、亦紅花の中ゆ紅の蕊と出て、細く糸の如し、蕚の如し、蕚の本ゆ子と結ぶ灰黑色微胡椒の如くゆて中ゆ白粉ゆつゝと採て婦人の面ゆ塗る光沢鉛粉ゆ優れり、○中華の書ゆ云ふ、外國の物ゆんゝ、大和本草ゆ云ふ、

車前子 蘇頌圖經 春の初め苗と生ず、葉地ゆ布く、老の面の如し、年と累ー者尺余、中ゆ數莖を抽て長き穗を作て、鼠の尾のごとく花莖細密く、青色微赤き実と結ぶ、草歷のごとく、今人吾国採て七八月実 滑伯 滑伯 此者苗或ハ花とそも、古来より実と以て八月の部ゆせり、改実ゆ産べきゝ

尾花 はの部穗芒の条ゆ出ず、

思草 部龍膽の条ゆるべし、

黄蜀葵 ワウスケ ト呂 二名一物、この部ゆ

落穗 詩經 此有灑穗伊寡婦之利、注云、灑ハ遺て粟ゆの意ゆ、收成の際ゆ遺て粟ゆの穗ゆ、寡婦ゆ是と以て利とする、此穗ゆらしむ、寡婦ゆ是と以て利とする、此豊成餘ゆて尽く取らむ、又蜾蠃ゆ共ゆ

ことを見るを、列子拾穂者行歌

落鮎

淡鮎 和漢三才圖会七下簗 八月最長さ尺ふ

近し、此時鮎子の如き者腹ふ満其背淡斑の文と生ず刀刃の鋒くぐ如し、故ふ鋼鱗しの人八九月湍の水草の間ふ子と生て後漂泊して流ふ隨ふ下て死ず是落鮎ちり人其下て落るものと持簗と構て以てこれを捕ふ名つけて下り簗しの人九月より肉瘦て味甚劣る

九月

十五

岡崎祭

名勝 紀事 東山岡崎上一位十六日 志 九月十六日祭礼云云 東天王祭神輿一基鮮七本けり、その内一本の鮮麹下ふ埴と以て鷹二連獵犬一疋と造彩色と施せ、是と大鷹鮮とのふ其傍ふ感神院の三字と彫刻せ疑らくハ旧感神院の鮮ふ云云當社皇護院の杜ふあり、故有て吉田の地ふ移せ、然ふ同神社亦岡崎ふ在て故ふ東西と以てこれと分つ 雍州府志 犬鷹の鮮ハ、村人神宝と称してこれと崇む

豺祭獣

月令 此記戌月之候祭獣者祭之於天報禽者殺之食也

弟草、少女草

菊とも云ふ、ごとも草同前と藻塩草ふ出多人

梅と花の兄といひ菊と花の弟といふ故ふや、○古詩露ま でこあひおりへ〜少女草あらき風ふと花ハあてドに

翁草

菊とも松とも云ふ住吉の里ふ五位の松とて年ふ〜てる松あり、ふ此松の神やあらとけん後ふハ化して翁ふ成て住ふ人常ふ心中ふあ〜て琴とちらべ又庭ふ菊とうを名て愛し〜ふ人翁ど三の我庭ふし の松蔭ちのごとをむ翁ど草の花もさうあん○此故事ふ〜ふ〜て、松とも翁とも翁草とのふ〜〜

老母草の實

三四月 蕊と抽で淡黄花と開く穂の如し、其莖高さ〜ふ〜て随て実と結ぶ生ハ青く熟すれバ真紅累々として天南星の実ふ似て可愛 三才圖会 万年青葉芭蕉ふ似て蓬さ〜て衰へ〜ぢ其多寿と以て万年青と名く 大和本草

落栗

唐ふハ一切祝儀ふ用るよ〜し、花鏡ふ云ふ〜〜熟せんとして子出て其苞自ら裂けて地ふ墜る物是ふ

遅稲、晩稲

時珍

日稉稲早中晩の三収あり、六七月収る者を早稉と
も、八九月収る者を遅稉ともいふ、時珍曰、
十月収るを晩稉ともいふ、云云是遅稲なり、時珍
云云日、稲あり、

落水 苦環拾遺 田のおもて
水をいてり、畿内ハ所々稲を刈て後、田ハ菜種を植るゆへ故ハ
両作所といふ、田の水を落ハ菜種を植る用意、

おもゆ

すん 【ろくせつ】 鉄懋の木と田事紀ハ載るあり
是あり、秋甚紅葉を立花と好む者秘蔵して
ゆへ挟を、

七月 早稲

時珍曰、六七月収る
者を早稉と云食ハ

童相撲 扶桑畧記 延喜元年七月廿八日
丁丑、童相撲廿番を御覧、綾綺殿
において此事あり、古今著聞集 延長六年
七月六日、童相撲廿番終りて舞を奏す、

兼三秋

木綿取 桃吹 和漢三才画会 其実桃の如
し、四ツに裂て中ハ白綿を出
すを桃吹といふ、綿車を以て中の子を繰り去て
竹を以て小弓を作て弦を牽て綿を彈くそれを旬と

いふ、

若煙草 和漢三才画会 煙草 相思草 淡
婆姑 淡苞菰 羅山文集 陀波古
希施婁、皆番語也云云 按ずるに天正年中南蛮の商
船始て此種を貢す、以長崎の東の土山に植、二月種を
下し、五月移し植、新芽を摘去て虫を除くこと毎日
怠るべからず、高さ三四尺、葉南蛮より似て長大、七八月
葉を採て、葉逆を覆てこれをあぶり、盆一宿して取
出し、一葉ごとに繩にて編み、編ごとに吊して晒し乾し、
一夜露宿して、後晒し乾して、黄赤色となる、
皺を擴げて収む、云云若煙草是なり、

八月

楓菌 和漢三才画会 これ
とくとくと笑ひて歩む、

渡鳥 此月諸鳥異国
より群飛して
山林江湖に来る
是を渡鳥といふ、

九月

度會新嘗會 外言
十六日内
宮十七日 内裏より初稲を伊勢両宮へ奉らせ給
ふ、大嘗会といふ、即位の後日本国中
の神々へ御饌を奉らせ給ふ、
新米を奉る故に早稲米の御祭式、

吾亦紅 陶弘

景曰地楡其花子紫黒色鼓の如し、故に又玉鼓と
名く云云是花暑になつる也ツモカウ、本名玉鼓、一名地楡
比叡山鞍馬又ハ近道に生ず、宿根より二月苗を生じ
初生地にしく、独茎直上高さ三四尺、對し分て葉を出
す、これ楡の葉に似て稍狭く、細長くして鋸の歯の状り
似て青色七月花をひらく、槐子の如くにて紫黒色

か

七月　梶の葉姫

異名分類　梶の葉姫　搊機七姫の内なり

八雲御抄に梶の葉とよもの書も皆由緒あるか、云云　渓
雲問答に芋の葉の露と硯の水として梶の葉七枚に
歌一首づつ書よしみえたり、是等によるに　梶七葉
皆二星に奉る其専要の物と以名付とみえたり

年浪草　和俗七月六日、市中に穀の葉を賣、明夜詩哥を
書て以て二星に供する所あり、又短冊は楸の葉を用て
詩歌を書く　和漢三才図会　和名加知宇曽　俗云加知　搆をいふ
楮の皮今多く紙に造る、又布に織、往昔木綿と称せし、
今も赤祭祀の人木綿縄に彼るか、上古の衣服に象る歟、
今二星に供する時、詩哥を穀の葉にかくも、牛女神を
祭るの故に木綿の義に象るか、○菅章長家 高辻 朗詠
抄に曰、昔余吾の海に天人下て羽衣を猟師に盗まれ心
ならずも猟師の妻となり、年月を経て羽衣を取得て
天上し再び人界に下て、猟師と共に天上せし、女ハ織
女となり男ハ牽牛となる、其再び天へ上るの時、梶の
木の上より糸をおろし、是に取付て登る、故に二星の
手向に梶の葉を用ひ、願ひの糸として五色の糸を
用ふと云云　畧して爰に記す、此事淡海志にもみえたり

梶の鞠

あの部飛鳥井鞠の条に出つ

河鼓

志の部二星の条に出つ

烏鵲の橋

深塩草　鴉鷺記に云、史記に云瓊に夫婦あり、夫
を遊子といひ婦を伯陽といふ、偕老を契る、子ハ
二八の候陽ハ三四の旬也と云云、此文のこゝろハ、遊子十六
歳伯陽十二歳より夫婦となる、至て志切にして、共に月を愛
ずる事限りなし、夕には八月の出るを待て望に行暁ハ
月の入ことを惜みて、高峯に上る、伯陽九十九にして死
す、遊子深く歎て、月を形見とするほどに、或夜伯陽鵲
に乗て空を飛ぬるとみて、遊子殊に歎きて、百三歳にて

死せり天の星となりて烏ハ乘て天を飛行て銀河ハ望て川と隔てなりさまたげ帝釈毎日此河あて水とあび給ふ故ハ水ハ星を有て渡ることを許さるゝ然りといへども七月七日ハ帝釈善法堂へ御参るの日あれバ水とあび給ふ一日一夜あり此ときハ烏と鵲と羽とをならべ橋となりて彦星織女と通ずと是を鵲の橋といふ和名抄云大和本草鵲ハ畿内東北の國ハ多くなり筑紫ハ多し朝鮮ハ来ふや高麗烏と云鳶ハ黒白あり尾長ハ本草ハ載ざる鵲ハ多く合り門

茶 せの部 **懸躍** 紀事十四日より晦日ハ至て夜ハ人小児街頭ハ躍の条ハ注ス

と催し或ハ又各同列して相知處の家ハ至て大ハ踊躍とす是を懸踊といへ掛らるし所の家再ひ踊躍を催して二日ハ酬ゆ

是を返しと称ス **蜻蛉** 蜻蛉との部とんぼ

こいの部 **柏ちる** 御傘 柏ちるハ夏あり無言抄ハ秋と有々辟事のかゝりの常

盤木の散ハ夏之中畧今此國の人の申柏ハ初秋ハ紅葉してちるものといへり此注ハつきて無言抄ハふちるとしてあるべし

秋之 貞享式 此柏ハ御傘ハ説ありて論語の松柏と襲と一説と畢竟ハ雑とあせれとも爰ハ散字と結びて決て秋と定べきこと下畧

蓼三秋物 **桂** とこつの部月の桂と

男 いへる條ハ出づ、 **鶴来紅** 来雑頭時珍曰雁来紅葉

穂子とも雑冠と同じ其葉九月鮮紅なるゆへ

花のごとし故ハ名く呉人呼て老少年とす一種六月来紅の者あり十様錦とあづく、○雑頭ハ雁のくる時猶赤し芭蕉 増山の井 雁来紅一説ハ増山の井の花云

枕草紙ハ増山の井の花 **柳** 時珍曰柳高樹大葉圓ハ雁の来し書といへり云云 て光沢あり四月花とひらき

黄白色實と結ぶ青緑色八九月熟す○楊柳酬柳白柳

胡盧柳 樹練柳 木淡柳 似柳 伽羅柳 巴蛇柳 華柳

田舎柳 君遷柳 樽柳 椿柳

以上各頭字の部ハつきて注也 **柳餻** 蔵器日柳餻昔柳ハ米粉を和して糕

蒸て小兒に與ふ食し
て下痢下血と止む、

案山子

彈　**鳥邨**　**和漢三才圖**
僧都　**添水**　**全**　**藝類**

聚云、古者三皇の世ふハ、人死して未棺槨殯葬あり
ず畏ふ白骨と以しらるとと中野ふ投て孝子其禽獸
の食ふと視るふ忍びず、彈と作りて、とと守り、鳥獸
の害と絶つ、按ずるふ俗ふいふ案山子、今田圃の中ふ草
偶ふらと持せ、以鳥雀と防ぐ、備中國湯川寺ふ玄賓
僧都迹と民間の奴ふ晦まして田ふ入稻と護りて鳥雀
と驚ろかして勞ることを、今ふ至て鳥雀と懼ることを知ず霊と僧
都ふ

續古今　山田守僧都の身をうあしき秋
そぬれぬとふ人もあれ　玄賓

和訓栞　傳燈録ふいふ
案山子ふりとをり、鹿ふしあらべ、山田のそんづと以
るの意ふり、信野ふて節分の夜いとり豆ふらとすと
ふ焼ふしとらふ、焼ふしの義、埃嚢抄ふ、多火事と名く
とをえをり、ふとふと焚ふ、蟲蟲の畏ると傳ふる意をあて

增山の井　そもづハ添水と書て、水辺ふふりけて、水のちから
と添て音と出る鹿をどく、畧かしとをもづハ別の物
ふれども、玄賓の山田守をもづと僧都ふよりて給
ふる故ふ鳥かどしの人形と心得て、古哥ふとうめるとて多
し、然りとも実ハ別の物ふ、

石川丈山覆瓿集　竹筒尺餘
上短く下脩し、結樟ふ駄方て、首と下流ふ矯ふ故ふ毛虎
石と戴く、旋轉俯仰我巨々の声と発揮ふて、遠心院云我巨巨
声韻凡ふらべ、

元是漆水考　鎌帛

物と立て、又それふ銀といふ物と
たて、管竪をきせて立ふるハ鹿の田とをまぬとをれ
と鎌帛といふ歌ふ我宿のをもしめ立るをもしふ色わぶふ

山田ふ鹿　**年山紀聞**　説々あるとど、山田ふ猪鹿の
のがらぬ、

鹿火屋

つく所ふ小き家と作りて、壁炎何
くとの嗅きものふ火とをもし、烟とをそ、鹿とやらハ
と心得べし、或ハ香火屋又置蚊火ふど、字とりて書る所
もあるふよりてまどふ人もあるど、用ハべらず又火の
字濁りてとして、顯昭ふ飼屋の説ふ迷べ、云

かせぎ

鹿の異名、

玉葉　山ふくしあるかせぎのけぶりきふ
世ふ遠ざかるほどでもちる、

赤染家集　朝ぼらけ
をとをとあくとをえつるハ
をぎのちうくたてるくり、

肩抜鹿

臣房卿哥　かど山
のをもづ下ふら

とけて肩あく鹿ハ妻こハ子をそ、日本紀に云復命中臣祖天兒屋根命忌部祖天太玉命内侍天香久山之真壮鹿之肩面取天香久山之波波加而令占矣、古事記の説ニもよおなし、神代ゆハ鹿の肩骨を焼てうらなハ

[illegible]かの木ハ和名抄ニ云櫻桃和名佐久加一名波佐久良　延喜式ニ云九年中御ト料波々加木皮ハ大和国有封の社ふ仰て採てこれを進らむ、

片鶉

夫婦相ぞ離れて居るといふ、

駈鶉

藻塩草

鷺猟

こゝとハ馬上ニて鷺を居て、うり立て鳥ふ合するといふ、

八月

菅大臣祭

十六日　雍州府志　京四条の南、綾の小路西洞院の東ふあり南北道ニ隔て是善公の宅地こゝその内北ふ菅神の祭あり是菅神降誕の地こゝ故ふ社を建てこれを祭る、神社啓蒙　或人云此所昔菅家の舘こゝ一夜飛梅の天神とゝハ是こゝ今ふ飛梅の跡この地ふ存る、又説ふ文子の宅ゝて菅神しゝめて任座の地こゝ洛の人阿米神と称る、例祭八月十六日、社辺の氏子是を祭る、神輿一基、童子素袍供奉、社僧ゝりふまゝ〳〵、

亀戸天神祭

廿四日〇江戸本所の本亀戸村ふの祭る所筑紫太宰府の神体ふ同し、寛永三丙寅年菅家の末裔大鳥居信祐建立る、祭礼八月廿四日本所牛の御前と隔年ニ當社の神室天國の剣ゝいふありこの外後水尾院の宸筆安樂寺の石碑、みちの文臺大閤秀吉公の文臺ゝ連歌師紹巴ふ与ふ、紅葉の時分有等神庫ふ蔵、祭の日奉幣神楽ふ行ふ、近来正祭ゝ、

貝割菜

菜の葉ニ出

苅萱

大和本草　稍草莖葉節穂皆葦の如くして小ニ宿根ゝり春苗を生ず葉ふ青白のこゝ筋多くゝ〳〵ゝて本末ふ通ず、四五月穂を生ず中華の書ニいまゝ見ず、葦茅の類ニ入ル　新撰字鏡　荒々ク岡辺ふ茂るかゝるやの上葉の露ハ川ゝこれ〳〵、衣笠内大臣〇萬葉集ふ苅萱と詠る、後世ハ一種の苅萱ふあらず、秋苅ゝりゝる萱とゝ、

萱川、萱草

まゝ、和訓栞ふ萱草とゝいふハ誤

萱の軒端

俗名抄　茅和名芒　萱和名加夜　大和本草ニ長短一種あり、短き者ゝかやゝ入

御金 萱草、萱草、軒端植物よりあらず、秋ともふるまうべき道理なり、ゆゑの名草ハ、秋の季大切なり、故に用ゐるなり

あきくさ **うくいせこ** 卿傘編集の時、事甚だ無数なるなり、て、如此了簡多し、屋根より皆て何十年まるものの、秋季植物ハ用ひがたし、宜しからざる式なり、しかるに蕉門の徒ハ、ことを用ふべからず

桂の花 木犀

南方草木状 江南の桂ハ、九月花をひらく

本草綱目 菌桂、嶲桂の二種あり、菌桂ハ果、枝の葉の如くして尖り狹く、光沢あり、三縫の文あり、鮑魚色其花ハ黄あり、白花ハ嶲桂ハ其果ハ鮑魚あり、枇杷の葉の如くして粗密なる者、俗呼て木犀、熱頌

熏陸十日薰 ○木犀の花、香気高く人を醉ハしむ

和漢三才圖会 多く越前より出る、以て染家必用の物なり、按ずるに倭の薑草竹の葉に似て、芒の類なり、江湖大浦の辺、山中最も多し

老鴉瓜 玉章 ○時珍曰、王瓜一名土瓜、其根土氣と作し、其實瓜に似るゆゑ、故に土瓜

と名く、王の字、何の義といふことをしらず、瓜雹子に似て熟するとき、ハ色赤し、鴉喜てこれを食ふ故に俗に赤雹老鴉瓜と名く、三月苗を生し、其蔓鬚多し、其葉四くして馬の蹄のごとく、六七月五出の小き黄花をひらき簇をなすごとく結ぶ、累々として、熟するときハ紅黄の二色あり、**大和本草** 其実まるく長し、玉章と云、王瓜の実ハ文をもつるに似たり、人家にうゑ故に玉章といふ、

籬豆 本草に考ずるに、人家の籬垣の側に三月種と下す、其実生じて延蔓して籬を覆ふ故に沿籬豆と名く、又和俗破墻豆といふ、此豆一粒を植ハ豆八升を得ること、破墻と八升と音近し、故なるべし、

芥菜 時珍曰芥數種あり、皆八九月に種と下す、

月令 仲秋月鴻雁来賓、○時珍曰雁の状、鵝に似て亦蒼白の三色あり、今人白くして小なるものを以て雁とす、大なるものを鴻と野鴨とも雁ハ四德あり、飛ときに序あり、前ハ鳴て後ハ和ふ、其禮也、寒きときハ北より南の衡陽に止る、熱きときハ南より雁門に帰る、其信也、偶と失ひて再

び配ぐも其節也夜群宿して一奴逃走す[illegible]
嘶て繒繳を設く其智ある捕る者こゝに奏し媒
て以其類と誘へ是一愚也南ふきる時春慶て食ふ
べからも北ふむ〻ふ時肥故よろこと取べし白雁 鴻
鳥 海雁 たのむの雁 代りる雁 二季鳥 以上頭字の
部ふわりて注を○もら雁ぐらふ一種あり目ふち黄
ゝて其外ハ雁の如し○ 雁の古 漢書 文帝漢の
新方雁ハ頸長関東あり 雁武字ハ子卿
杜陵の人武帝の時節と持て匈奴ふ使を單于こと本
さんと欲し武と色大吉の[illegible]直漢武と求し匈奴記
て言此死もと常惠漢の使者ふ教ていひ天マ上林
中ふ射て雁と得ゝ足ふ帛書と係ぐ武其[illegible]ふ
と是ふ由て還ることと得ゝ 古今 秋風ふ[illegible]
きこゝもふるたゝ玉つきをうけてきゝらん 友則 嘴野落
者ふ荷兮う文や 雁字 山谷詩三云雁字一行書絳霄〻談林
天川雁 其角 雁陣 本朝無題詩 雁陣数行
微月冷虹橋一道遠天晴
茂 和漢三才圖会 所謂 雁金
明 雁金 和漢三才圖会 万葉集ふ多く此三字と用ふ然ども文雁

鳴者今者来鳴沼と詠ぐるこゝハ自ら雁の名こなるふ
ふ似ゝるも遂ゝ雁金の二字と用ひて本意と失ふ云云
雁字 山谷詩三云雁字一行書絳霄〻談林 檀
流発句 河蘭院の文字ゝ横ゝふ天つ雁
鳥 和漢三才圖会 好て檀樹ふ棲む故俗呼て檀鳥
とらふ又懸巣鳥と名く形鳩ゝり小さく頭背腹
共ふ灰赤色眼の辺ふ白色あり翮灰黒其小羽ふ青黄
の斑あり啄二寸許稜ありて黒色亦黒し能鳴て諸
鳥の声と[illegible]又人の言と[illegible]す商家祭文
元旦ふ炙て食ふ以て借て取の義也 河鹿 雁 書
歳時記 蛙ゝ好ゝて山川ふあり夏ふ至り
ゝ鳴哥ふかゝつとのゝよゝて[illegible]ゝ傳
ふ西行ふ哥ありとの人ものハ臆説ふて考ゝる所
あゝその声鹿ふ似ゝるこゝ俗呼ふ河鹿 鰍
同書云正字ハ黄頰魚杜父魚ふ[illegible]ゝ魚
ゝり最ふ此魚を誤ゝて清鹿と称も誤ゝり 泉
蛙 [illegible] 加賀近江 [illegible] 城ふ多し[illegible]
名もゝり形も石も大同小異ゝ石伏 石モチ

又川オコヒ伏見ノ[illegible]ハ[illegible]
この祭も猶あり近ごろ山海名産図会ニ書ふ委しく
論じとるいとふ畧記ま○青藍五雑門り先哲のため
ふ〜うハ蛙ふあるとと 嬢蔓 あやまりてきさらぎこと
鯖ふ 嬢葉 九月 桂の宮相撲 八日 拾芥抄 八除の
北西洞院の西九
月八日桂の宮相撲 今昔物語 天暦の御時ふ[illegible]り渡
ア〜僧長秀ともあんいふ元医師ふあんあり桂の宮
の前ふ大ある桂の木あり五ハ桂の宮ともいふ
長秀唐の桂心ふ[illegible]ハ[illegible]
町 ○神社 神田明神祭 二日 ○神社江戸湯
第宅詳ふ[illegible] 島ふあり祭ふ所
の神二座 神社啓蒙 大己貴尊鎮座ともに将門の社ハ
本殿と去ること百歩ばかりアり ○大己貴尊ハ人王四十五代聖
武天皇天平二年鎮座ハ将門の霊ハ六十二代朱雀帝天
慶三庚子年二月十四日将門滅亡ともその後怨霊ふ
祟あるふ依て延久のころ一遍上人三世真教坊将門の
霊と以て神田の神社ふ合せ祭の當社ふ[illegible]ハ今の神

田橋の邊ふあり此所いやしく芝崎村ハ今ハ至てく祭
礼の日神輿とまるらく此所ハ留めて奉幣ありて祭礼九
月十五日、麹町山王と隔年ハ神輿二基引山三十六本踊
屋台太神楽ホこと ハ従ふこの祭の練物ハ頼光大江
山入の形狀と模して三間余の鬼神の頭を造て臺ふ
のせて数人ことと荷ふ引山の外今ハ是ら神事ハ頃ふの
町内神田外神田大傳馬町濱町日本橋通り町前後
都合三十六町ハ神幸の町々ハ夜 [illegible]鋪 [illegible]種
の提灯ともして甚賑ハ神輿渡御の町ハ本社より鑓
倉町通り飯田町より田安御門ふ入 上覧ハ[illegible]
盤橋十軒店通り、厳達御門と過て本社([illegible]大社)
祭式山王祭ふ[illegible]ハ神事能あり
神主芝崎大隅守社[illegible]廿一日○摂州西成郡
家五人巫女ふあり 上難波祭 大阪[illegible]町ふ
ハ祭る神三座才一稲荷 [illegible]祭 [illegible]園 三
野仁徳 天 後三条院 延久三年勅請 [illegible]徳天皇 祭
[illegible]九月廿一日神事神湯ふあり[illegible]醸と醸と
互ふ相贈ハ神説ふ仁徳帝の社ハ元本[illegible]橋の東止

町の門ふ[illegible]人[illegible]居の桂川の御校の
[illegible]奏吉公の時上難波ふ迄も、
平野の宮の別し
ふる条ふ注も、かもらよもぎ 和名抄 蓬 名波 云 加波良佐 岐 菊の異名
天和本草 頃ふ和名抄ふかからよもぎ
ふるぬと訓ず但野菊なるべし、かくみ草 名ふ
埤玉 めうとせをいつとくさまくのうとこ草 秋
とおり名歳ふ此菊ハ奥州新事の里ふあり、白緑無常
ふ新妻とふ物語ふあり、業平作是ハきくとふ
きて秋ふ入るくふ、彼物語ハ十月十五日ふ[illegible]
[illegible]時珍曰、其木文木ふ名づく[illegible]
椿 故よこなと椿ふ[illegible]信州玉山懸の者と住ふ中暮
按ずるふ羅願尓雅翼云椿ハ杉ふ似て杉ふ異ふ椿ハ
美ふきふ實ありて木ふ文采ありて其木桐ふ似て葉杉ふ似
ふり絶て長ふ難し、木牝牡ありふ牡ハ華きれハ實ふ
ふり裏のごとふ其枝長くして撥槌のごとふ枝ふ尖る
者ありふ尖らずるものあり、稜ふくして殼薄し黄白
色、其仁生ふて食ふべし、亦焙ふて収ふべし、樹数十

解ふ下らず 天和本草 其木層と焼ず
蚊退くカヤリの木ふリの字と畧せり、 **櫧の實** 時珍
曰三四月白花と開き、穂とふて栗の花のごとふ実
と結ぶ大サ擲の子の如し小苞あり、蒲の後苞さけて
子墜ふ

雞冠木

和漢三才圖会 本草綱目ふ案ずるふ楓ハ岐あふて三角とふて霜の後
ふ至て葉丹し愛をべし、雞冠木ふ亦楓の属ふ然し
楓の花ハ白色実大ふして鴨のごとふ、雞冠木の花
実と色ふ異ふ猶朝鮮の松の子大ふして常ふ異ふる
ガ如ふ雞冠木ハ數種あり、高き者二三丈葉尖ふて岐
あり、蝦蟇の手の如ふ、大低七八岐或ハ九岐ふ十二葉の
者ふ[illegible]と十二重とふ三四月嫩葉紅ふ[illegible]山ふ
映ず、五六月青葉ふ復て深秋其葉黄ふ落ず歳ふ連
ふるものハ五月小黄花とひらく狀飛蛾のごとふ稍頭ふ実
ふ結ぶ中の子牛房子のごとふ和州竜田、雍州高雄山
最多くふとあり、秋ふ至て葉丹く赫羅くふ天下ふ元
[illegible]実ふ元草木秋紅葉もる者多くあり、蝦手の
樹の葉勝くふ[illegible]ふ紅葉ふ[illegible]ハ即蝦手の

の業

樹紅葉

八雲抄 紅葉を詠ずる木、樹云

是樹紅葉なり、一説に実の赤きを樹

もぐとゝるはうなり、夫木 秋くれば山の木の川

葉のいろふかん雨生の樹ハ時ぐちあけり 為家

の紅葉 紅葉の川水よりるとゝ、枯草の露

又うきて流るゝともいふ、

枯野 枯草ハ冬なれども、

露とおくびてハ秋なり、

よ **九月** 宴祭 廿三日

神社啓蒙 伊勢 向の神社、山城國紀伊郡淀の駅小

橋の東河中にあり、祭る所の神一座、天逆向津姫尊

宝基文図に云

天照太神なり 石清水社家説 階辻幸の縁ふかりて、

伊勢向と号し、こゝに祠も、○一説に淀姫の社、祭る所

今三座、淀姫の神千観内供の夢神、天神以上三座、傳云

千観法師、肥前国佐賀郡、淀姫の神とこの地に勸請ス、

淀姫の明神ハ八幡宗苗の叔母、神功皇后の姉妹ト云、

紀事 淀大荒木の社、祭ること廿二日、或ハ淀水垂淀姫大明

神の祭廿三日と、何まつ是まつや、土人云淀祭と称する者

是なり、是淀の鎮守と、神輿一基、淀の堤路狭く、神輿

還幸の時行列と立ぐくしよりて跡を先へ振うとして

同じ堤を帰るなり、故に跡を先うゝハ此祭ゝ云ふ、

齢草 ちの部千代見草の条に出、

夜寒 傘 夜寒、秋くれ寒き夜

夜寒ゝ夜の寒き皆名之、

た **七月**

織女祭 摩牛 或書に云牛女の天

の雑書に出て、ゝゝと経史に尋るに未典據なしとあ

ゝ会ゝ、此流俗

らぬ、詩經に皖彼牽牛、跂彼織女と云ふ、故に以為

二星名あらして賢ふ、夏小正に言、七月初昏織女正

向東、十月織女正向北 五雑組 牛女の事齊諧に始り、

武丁の妃言に成て博物志に成る、槎に乗の浪説千

歳の下に婦人女子傳て口實ともすること可ふ、又人

黒士乃習て常語とも、天上の列病ゝて横に汚蠟

と被らゝむ、亦怪むべきの甚しきに子也、然ども

詩哥連俳の道、浪説と

とゝも、用ひべく有べらば、

薫姫 織女の異名 異名

分類 公事・根源に云

奠の机の上に火ともふ

短冊竹賣 七月

ゝもちゝら空焼物あり云 六日市中穀の

葉とうる、明夜詩奇と書て二星ふ供ず、或ハ短尺ふ撒の巣と用ひて詩奇と書て、今ハ民間の兒女、五色の紙と剪て短冊ふしたるふ古奇と書さられ葉ふ結ひ高く屋上ふ出すことも竹竿の五絲糸ふ換るかの、昨今市中短冊竹賣多し、又近来七夕踊 小町踊 還魂紙料 五色の短冊紙と賣ひ出す

正保の頃

の画巻ふ、七夕踊の圖と載せる、其詞書ふ云、ことし七月七日ハ中暑ゑ巧藝をして、人々なる今宵ハ七夕祭ふ出るもなまめかしくふ七ツハッたころ、ある小姫ども美しく出立太鼓と手毎ふ持つゝ、面白くうゝふ踊まハるゆゑ、これ是七夕とちぎりむる事、昔今ふ怠らずゝ

元禄七夕踊そ別ふあるふ、ひらぎ小女の人情ふ盆とまらう絵ゝ七夕とりとどる故の名ゆゑ、愚案問答ニ云享保十七年著七月七日七夕と祭る中暑面白く歌とうたひ、大内うゝ町うゝ小路くゝ友達のうゝへ踊とかけたり、ひうゝより小町とゆゝ、人毎ふ美人のゆゝふ思ひ名付けて、小町踊と名付くゝり元禄〇七夕踊と小町踊ともいひ、小街踊といへる説をわろし、題目踊 洛北修学寺村の老媼法華の題目と唱へ踊とあるを是と題目踊と云、松崎も同

高燈籠 用捨箱昔々物語新見翁著ふ昔八死去して其年ゆゝ七月高燈籠とゆゝかのとゝろる七回忌まてとつゝもあゝ立ゆゝハ六月晦日長さ五六軒の杉尤太上ふ三角のひらゝと結ひ彩の巣少て色四手ときゝて付、燈籠ハ辻番の行燈の形ふちひさく作上ひらき下まゆゝを屋根も板少てゝゝ玄関と臺所の間の廣さふ建て七月朔日より晦日まて、毎夜暮六ッより明六ッまてとまて一向宗ふハゝゝえまて、他宗ハゝれくゝのゝくのゝとし、衰ふゝもゝゝ

とゝゝ見享保十八年ふ記ゝゝまてしあれハ既ふ當時在家の高燈籠の絶るハ明ゝゝあゝとゝゝの頃まてゝゝゝゝゝ

ゝゝ下暑〇接蓑集 高燈籠 霊祭、霊棚、棚 ひるハものゝうゝと拄の那 千那

経 麻索麺麻柯の著 枝豆、枝豆、根芋、青蕎麥、粉米 瓜、茄子、此類聖灵を祭る意あゝゝ秋ゝゝべゝ青藍云むゝゝハ在家ふ佛檀と餞ゝ設けゝ聖灵とむゝ祭ゝ

七月十二月二度魂棚と餞ゝ設け、聖灵とむゝ祭ゝ

ゐりまつるふ邪宗門御改の砌我家い何宗まうとゝ
るあゝふ常ふ佛檀と設くることゝいふ事 四季物語
魂祭るこゝハ一年ま二度あるかゝらずきて此月の祭を
年のとりまつりとゝいやこゝいてこれゝうおもろ 徒然草
十二月晦日の夜のことをゝいふる条ま亡人の来る夜こて魂祭
るこゝさい此頃都ふハあきこゝとゝ稲をる
このあゝしこゝて哀あゝ 枕草紙 やゝう葉と云ふ之の晦
日ゝ物ゝとゝきめ紙てあゝ人の喰物るゝ云云 ○ 棚經
菩提寺の僧来ゝて俾前ふ誦經すゝるゝと棚經
とゝふ ○うの部 盂蘭盆会の条ゝ

大文字の火

せの部 施火

鷹の堺出

和漢三才圖会 四月羽

毛と易んゝまる時、韋繻と解き去て、鳥屋の内ふ放
つ日と逐て脱落して還新毛と生て七月中旬ま曰のゝし、
こゝ三と片鳥屋とゝふ二歳毛と易ると両鳥屋とゝふ三
歳と両片鵰とゝふ ○ 鷹ゝふ
今ゝくゝとゝやとゝ
うゝまゝ 定家

鷹の山別

或鷹書曰、鷹の山別ハ七月廿五日ゝ鷹の

巣と立父母ま別るゝとゝふ、 下学集 鷹ハ猛惡の鳥ゝ
子生じて巣ふあり、其子成長るゝきハ親と食ふの義
あり、父ゝ母と畏て居ま巣ゝより一尺杖と去て
子と養ふ、ゝ一尺量と呼て鷹秤とゝふ、

鷹打

九七八月巣と以て鷹と取ると呼て鳥屋待とゝふ、鷹
の雛巣と離て飛翔ゝて自食と求る時常ふ絶崖数
巖の喬樹と度る、其巖窟の辺ふ小茅と結びて居ゝ、
鷹の至ると窺て羅と樹間ま張、死鳥と以て餌ゝて
こゝと捕ふ此と 阿賀計 とゝふ、

鷹祭鳥

月令 鷹乃祭鳥處暑
或ハ網掛ま作る是と鷹打と云、

玉ゝのきゝ

大和本草 其実ハ梅雙ふ似ゝ
候七月
之中也、立花とこのむ人七月ゝ日
花瓶ま其葉と云ゝ其実とのこ
ゝて多く挾む、此時其実粗熟、

兼三秋物

龍田姫

風江入楚 竜田姫、こゝと姜ゝるふ春ハ佐保山
の神ゝう事おゝうゝさわ山の霞の色ふよせて春
とゝひる神とゝひ、秋ハ竜田山の神ゝう事おゝうゝて、紅
葉と詠ずる故ま、秋とゝむる神とゝふゝ又其ま神の名ゝ

玉兎 つの部月の響と いへる条に註せ、**立待月** 新撰六帖 我門と とのこさぞたちまちの月もらるもらん 衣笠内大臣○十七日の月こ山の端にづる月と、立待もらひてすつ心くに、

鷹の羽芒 白き穂あつて鷹の尾に似とり、**撙技** 是酬 技歟 関東の俗こと撙技といふ、酒樽の中に入置て渋と技の謂あり、**田の色** 改慎 說文曰 稻二月始て生じ八月熟を云云ちつる時八七月八青黄半熟もる時ふり八故ふと田の色と云、**田の庵** 御傘 田を守る時ごり作りて居る庵 八秋ふ ふるん 後撰 秋の田のうとはの庵のとま とあらこ我衣手ハ露ちぬもつ、

八月

田の實の節、特 枯れ節 その部八朔の条に出づ、**端正月** 昌黎月詩 三秋端正月今宵出東溟 事文類聚 前輩中秋の月と名づけて端正の月とも、○季吟云端正の月八圓満ちるを必ずし、

竹の春 竹譜 竹八八月と以春とも こもと小春とのふ熟去んと欲し寒来んと欲も故ふ 荀譜 竹八八月 小春とふ、**檀特花** 呉響集 客又曰、檀特花と こもも赤芭蕉の類ふや、答て曰是赤芭蕉の別種 ふらん、和漢三才圖会 高サ三四尺葉芭蕉ふ似てふく、甚柔ふ ふ、又意技ふ似て大く甚硬ふ ふ、長サ尺ふ 餘ふ、潤さ三四寸、冬枯ふ春生ず、七月莖ふ抽んで花と開く、深赤色、形穂最も愛まべ、子と結ふ圓く 黒色甚硬く用て念珠と作る、木西南外國の草、性最 寒を畏る、**龍舌草** 多識篇 龍舌草 今按多豆乃之多 本草 水中ふ生ず、葉八面前ふ比、 水中ふ花と生ず花白く菱のごとく ふ ふ、大きく、蕊ふ ふ、 もあり本草水草の類ふ載之西土の方言ふこうとも と云、水かとけく葉枯ふ、又水藥と云、葵の葉ふも似 ふり、花ふ三出ふり、八月ふさく、實ハ三角ふり細し、**煙草花** 花鏡 烟花一名淡把姑初て海外ふ出ず後種 と漳泉ふ傳へ今地ふ隨て ふ ふり、木春不老

ふ似て、葉、菜より大あり、紫白の細花とひらく、和漢三才
畠会八九月茎の頭ふ穂を垂とぐ〻小白花と開く、赤
色と帯ふ碧紫苑の花ふ似たり、又かの部王瓜
子と結ぶ内ふ細子あり黄褐色、王章の条ふ注ス

蓼の花、蓼の穂 和漢三才畠会三月繁
茂し、秋ふ至て穂とろ子、細
花とひらく、紅白色数品あり、花穂と種蓼と云、種蓼の
子実と結ぶ、俗ふ云ふこと穂蓼と云、
そ〻ぎ〻のハ採収て是と搗の下ふ鈍ふ或ハ火爐の上ふ
鈍て水氣と去て、乾き過して褐色とする時、種子とと
出し蓄へ、種茄子 時珍曰茄中ふ瓤あり、瓤の中ふ子
あり、諸茄老ふ至て皆黄あり、

茸狩 木の子取 尓雅菌ハ形蓋ふ似たり、木菌土菌
石菌あり、○茸狩や鼻の先ふ三のかゝと其角

大根蒔 和漢三才畠会蘿蔔大抵八月
種と下し、彼岸ふ苗と出を、

なのむし
九雁 伊勢物語そうのことのしの雁もひとぶ〻ふ君
うかゝとあぞとるとあくれる八雲御抄基俊ハ類

狩として東人鄙家相とるふ鹿狩事ゝ俊頼ハ田
面の雁ゝとよゝ諸抄雁を用ふ田の雁の事あり、太刀

魚 時珍曰鰤魚江湖の中ふ生ず、魚の形物と剤裂幾
刀の如し、故ふ鱪魚鮊魚の名あり、常ふ三月ゝ出て
始て出づ、狀狹して長し、薄くして削るる木片のごとし、
亦長く薄くして尖る刀の形の如し、細鱗白色吻の上
ふ二の硬き鬚あり、腮の下ふ長き鬚あり、麥芒の如し、
腹の下ふ硬き角刺あり、快利刀のごとし、腹後尾ふ近く
して短き鬚あり、肉中ふ細き刺多し 大和本草本草綱目ふ載る鰤魚ふ相似て同じからず、

九月

高きふ登る きの部菊酒 醍醐祭 九日○城
の条ふ出つ、宇
治郡小野の南、深雪山醍醐寺ふあり、紀事九月晋
醍醐天神祭、能あり、又昨日夜ふ入て、清滝權現の社前
ふ於て能三番ありゝと夜宮能とハ○神楽三基才
一長尾天神才二清滝權現第三勝間明神、以上三社ゝ
當寺縁起三云、祭る所清滝權現ハ沙迦羅龍王の才一女
ゝ、長尾天神ハ延喜帝の御願ふよりて、御願寺とする

故ふ勸請ゑり、勝間明神ハ神縁社記詳ならず、糸切歯
例祭九月廿三日ふ記を誤りゝ廿三日ハ同所笠取祭ゑり、
當寺の伽藍ハ山上山下ふ分りて上醍醐下
醍醐といふ土人長尾天神と以て本居と崇ひ、

宝の市

すの部住吉相撲 廿日、洛東建仁寺の門
金の条ふ出づ

旅夷祭

前ふあり、今九月廿
日ことを祭ふ相傳ふ建仁寺の千光國師栄西帰朱の
日、船中暴風の難あり、こまゝ蛭子の像波濤ふ随て漂
ふかのあり、栄西ことを収りてことを祭る、風やゝ波静り
て恙なきことを得ゝ、栄西寺ふ帰ゝて社とゝの公託夷
の官員とゝ、今ふ至りて西海ふ赴く人、此社ふ詣て風波の
難あらんことを祈る、故ふ旅夷と称ゑ、祭礼の日宮川町
辺の居民、遨物造物ふを出ゑ、

大般若

神輿一基 持鉾 菊の異名あり、
黄大般若万重
ゝて花菓凡六百菓、故ふ大般若六百巻
ゝ名づく、白色の者又ゆゑ、

たもれ實

天和本草 方土ふよりダ〻ともダモとも云、漢名未詳、
桂の類ゝ三種あり、一種ハ白タブと云、葉ハ桂樹ふ似て香

熟もく枝し冬ふ赤き實あり、ツヅノミとゝふ鳥好んで食ふ、
其實の大さ木槵子ゝ如ゝ小ゝ肉と去ゝバ其内ふ四ぎ
實一ツあり、一種クスタブと云、其葉白タブふ似ゝり、最よく
桂の葉ふ似ゝり、桂葉ゝクスタブの葉ハそゝもぢ本より
ゝる、凡他木ハ其葉のもぢ中ふ一條ゝり、桂葉ハ三條ゝ
ゝ、木艸和名抄以ゝクスタブの葉も桂葉と同ゝ三條
あり、白タブゝ中のゝてもぢより又枝もぢ處々ゝ分れ、
クスタブの實ハ冬熟ゝて黑し、ゝゝも肉と去ゝバ其内ふ
實あり、クスタブの葉の形ハ桂と同じ、味も桂ふ似て香
氣やゝ強ゝ白タブより香あり、味辛ゝ、木理クス
の木ふ似ゝり良材ゝ、白タブ、クスタブとゝふ大木ゝ中略
白タブクスタブの實ゝ油とも火ふ焼ハよくも油ゝ化ぜ
ゝ、とゝふ肉と去中の實の油とゝりて燭
燭ふ作る、○荏桐とダモと訓ぜ、誤ゝり、

橙

秋の部ゝ
載ゝ

黄熟ゝとゝ、正月の部ふ載ゝ、
嘉祝ふ用ゝる故、季〻ゝ二月の部ふ度、

荔支

時珍曰錦荔枝本名苦瓜、一名癩葡萄實実
及び莖葉相似ゝ故以て名と得ゝ立月実と下ゝ

八月

苗と生じ、蔓と引き葉巻鬚並ひ葡萄の如くなりて小く、
六月小黄花をひらく、五瓣挽の形の如く、瓜と結ぶ長者
四五寸短者二三寸青色皮の上ふ菲疎毳及び茘枝殼
の形の如く熟するときハ黄色、自ら裂け内ふ紅の瓤あり
て子を裹む、瓤ハ味甘くして食ふべし、形扁にして瓜子の
如し、亦菲疎あり、南人青皮を以て肉及び塩醬を煮て
蘸ふ元、苦く渋

連雀

和漢三才図会 今唐ふわ
つ、形雀の大さのごとし頭背
胸赤色、翅黑し、黄白の四文あり、羽尾の端畧紅、其尾短
くして黑し、頂の上ふ毛冠あり、眼頷の辺ハ黑く常ふ
林ふ棲むふ群をなす、形美きを以て人ふ愛し、樊中ふ
畜ふ、或ハ尾を抜き舞ふ、ごとし、畧孔雀の形勢ふ似たり、
但し声好からず、比伊比伊と鳴ふ

九月

例幣 九

ごとし、蓋練鵲と字同音ふて物異ふ、
月朔日より十一日ふ至て伊勢例幣の諸家門前ふ注連
を引、門外ふ標木を建て僧尼及び輕重服の輩門内へ
入べからずとの字を書るもこれと前斎とい、十一日の朝幣
使発足、公事根源 例幣とハ伊勢大神宮へ御幣を奉
らせの、毎年のごとくハ例幣といひ、続日本紀 孝徳
天皇天平始て伊勢大神宮へ幣帛を奉ると詔して
今より以後中臣朝臣と差して他姓の人と用ることを得
ざるとの命ありの、依て大中臣藤波家 祭主をうけてこれを掌
ふむ、最上所と神祇官代とをなす、

秋

兼三秋物爽氣 連三の新式

漢和の篇ふ云、爽ハ秋のごとくやけしとなり、増韻
爽ハ清快なり、やうハ即ち清く快きの義、紫松清詩
爽氣深出、

袖の露

袖の時雨ふ同じ、袖の滝
千林赤、
つ瀬ハ涙ふ袖の露ハ涙ふ恨る
ぬる、

添水

かの部案山子の条ふ出、

八月

獻胙 部狩

注、

蕎麥の花

時珍曰、蕎麥一名荍麥、荍弱く翹然として長く易し、收り易し、麥ふ
を、磨て麥のごとくもの故ふ蕎といひ、荍ふ麥と名と同じ
うもるゝ、立秋前後種と下し、八九月收り刈る、性畏霜
と変る、苗の高さ一二尺、赤莖綠葉、葉鳥羽狀の如く小
白花をひらく、繁密繁々然として實と結ぶ、累々として

羊蹄の實の如ト三

九月

蕪我菊 黄菊とい、蕪

のゝ老る時黒色、

我とい名の説あまゝどたゝ

る池辺ふさてるそゞ菊のもげ

よこ人もらを○もゞ

いろのてこらさい色のてりこ

増山の井 猶誓古 **糸衣** ホふ出しこう、

この部衣打袖の霜こいつる条ふ注も、

つ 七月

机洗ひ 硯あらひ 児童七月六日ふ机硯とあらふこと、

北野の神事ふあらふべし北野

の社ふおいて六日ふ松凡の硯ふ梶の巣と添を供を、兒

童の手跡と学ぶもの、專ら北野を崇信ふ故ふ机硯と

洗ひ清め、北野の神ふ梶の巣おゞし手向るあるべし、

又二星ふ手向るものを書為ものこ前説ふ

迎舟、妻おし舟、妻送舟 万葉 ひこぢの

つまむかへぶね

ぎ出ら〳〵、天のうハらふきり立ハ 新勅 天の川ら

らのあらふひこぼしのつまむかへぶね今やこぐらん 新六帖

ひさゝゝとの天の川門ハ明ふ久りつまあとりぶもやい

びらん 續猿蓑 舟ふりの雲きぐらゐほ〳〵の影 東湖

辻相撲 公事ふあらぞ、ぢりとふとあるなの八壁

禁裏御神楽ふ付て民間ふあること里神楽

といふがごゝ、神社ふふあるる常の相撲ふれ **衝突入**

どゝ禁裡の相撲ふあらひて秋こもるあり、

十六日 滑稽雑談 昔八諸国ふて佐と入とて、家々秘蔵せ

る器物或八其家の嫁娘妾妻まで常ふ愛きこと思ふ

ものを、客殿居間ふ限らぞ深く入て恣ふ見〳〵道頃

まで勢州山田ふ行りしやるい世人山田のつと入といハ傳ふ、

むゝ〳〵ハ諸国ふありしこあり、総て家財の類と玄つハ、

貪欲の道あるやるいこと戒悔のこあふ世〳〵今

世八絶てふ **鳳仙花** 大和 **爪紅** 本草 女児鳳仙花と酢漿草の茎

きこあり、

と、むこ合て爪ふ染ハ、

紅色こあるる云云 故ふ名く、

兼三秋物 **露** 露けき

露の玉

今章句 露ハ陰液こ結て露こあり結べて霜こあり、

○増山の井ふ出る波の露ハふこゞの露の説も○

白露、袖の露、上露、以上頭字の部ふ注ス、

露の身　露の身とハ露のごとき

頭野集　句　露の身ハ泥の

月　物理論　月ハ水の精　朝ふ大ふあり月ふ新盈あり、

やうたのるこのおひ荷今

說文　月ハ日の照ま処より生ず故ふ又哉生魄といふ日ふ當る時ハ日の蔽ふ処より生ス故ふ又哉生魄といふ日ふ當る時ハ光つ盈ツ日ふ就ることハ明盡○桂男、きこらえ男、月次、新月、弦月、三日月、王兎、銀兎、玄兎、在明、哉生明、既望、既生魄、いさよひ、哉生魄、暉素、金波、夕月、夜曉月夜、夕月日、朝月日、立待月、居待月、臥待月、ねまち月、廿日、夜中、更待月、常娥、真如の月、心の月、胸の月、盃の影、まるまるし、朔日ごろの月、ねまちの月、以上各頭字の部ふ

月の霜、月の雪　杜甫、仲秋詩　満月飛明鏡、

わつちて註ス、

帰心折太刀、轉蓬行地遠、攀桂仰天高、水路疑月霜雪林棲見狐毛、此時聽玉兎直欲数秋毫、

月の桂の花紅葉　桂男　酉陽雜俎　月中ふ桂あり、高さ五百丈、下ふ一人あり、常ふ斧もて斫る、斫る跡創ふふ隨ひ合て其人姓ハ吳名ハ剛仙と学ふ、過ありて謫せらる、樹と成らるり、桂男ハ吳剛と云ふ、ハ雲御抄　月の桂ハ光とりふ、古今　久しきの月の桂も秋ふあわいりぬるをもてしるらん　忠岑　久しの日月　西南ふ桂の花の注ぐし時　羽笠、

月の桂の子　蕉詩注　杭州の天竺寺八月十五夜常ふ桂子ありて落つ、本草綱經　江東の諸處多く衢路の間ふて桂の子と捨ひ得ることを破るバ辛香ふ古老相傳ふ是月中より下る　御傘　桂ハこの三五の秋と詩ふ侍もて実とハ秋ふ定めきこゆ、

月の

山說譬喻經　黒白の二鼠あり、互ふ樹の根を噛ふ乃至樹根ハ命ふ喩へ黒白の二鼠ハ晝夜ふ

奥儀抄　無常の喩ふ入虎ふ逐ふ野中のけふ入ん

をして岸の草とひく底とこんバ毒蛇口と開きてのまん

ず又黒白の二鼠、のそるくことの草の根と食ふせん

もべるくて毒蛇の為ふ害せらるくこと是虎ハ平生造

悪の罪業黒白の鼠ハ月日の過るこ、毒蛇と地獄ふ

月

くとくとくと是と月の鼠とひく、樵炭經の文ある、

の劍 三日月の形と刀劍の形とに似たるより、

月の都

日宣殿 太平廣記

羅公遠傳云中秋の夜時に玄宗宮中にて月と號ふ公遠奏して曰陛下臣に從ひ月中に遊んや宮中に桂樹

聚空に向ひ擲つて化して大橋となる其色銀の如し帝に請て同く登る約まること行ること數十里精光目を奪ひ寒気人を侵す遂に大城闕に至る公遠曰此月宮也仙女數百皆素練寬裳して廣庭に舞ふと帝問て曰此何の曲ぞ曰霓裳羽衣の曲と云玄宗密に其声調を記して回る顧るに其橋歩に隨ひて滅ぬ

月の兎

玉兎 五經通義 月中に兎と蟾とあり

蟾、月の兎

八何ぞや月は陰の精蟾は陽の兎と並び明の陰陽に係る○杜甫詩云擣藥兎長生○白居易詩云照地幾許人斷腸金蟾玉兎遠不知○蟾は月中三足の蟾ことと玉蟾といふ、

月の蝕

天經或問 星月皆日の光を借日は月天の上にあり月は日天の下にあり朔日月行て日天の下に在て日の光と掩ふ人地面の上に在てこれを視るときは其月の日と掩ふとなる故に人其光を蔽ふ故に月光亡ぶが如し然も定に常と失ふ故に人其光を蔽ふ故に月に至る一向八十度ありて日月望む中間に正對するとき地球障碍をなして日光月地影の上にあり日地球の下にあるとき故に月食を蝕と日蝕といふ月蝕は朔より望に至る一向八十

月讀

拾穗抄 月讀男、月讀月夜見皆月の名男

日本紀に云月は男神故に男といふ

月の出潮

性理大全 余襄公家道云潮の漲は海に增減をなすは蓋月の高ぶる所に則水從て

ことに隨ふ日月は右に轉り天は左に轉る一日一周して西極に臨む故に月卯酉に臨むとき水東西に滿ち月子午に臨むとき潮南北に平なり潮竭き此盈て從業絶ぬ皆月に繫る

月の秋

傘

夜ぶく花の春にして

月の宿

御傘 露水あらはれ結植物に滿るに同じ

事に居所あり、

月とあるじ

御傘 人倫にあらざれば月をとる宿の月とあるじは人倫なり、

の友 御傘 人倫に俱し旬体ふるつ、ぐ朔日頃の月
べし月と友人倫ふあらむ、源氏浮舟の巻 ついくちごろの夕月夜云云 炭俵集 細く
とついくちごろの宵の月 利牛 ○月のちぐめとつくちち
ごろこいひ月のをりをつごろ
ごろとの八一日三十日ふるぎらも、月の舟 月を

月のこぐみ 満月と つくり、蔦 蔦紅葉 時珍曰蔦松蔦ふら柏の上ふ寄生
方蘿ハ是松の上ふ浮蔓をこ○地錦 天和本草 葉八衣の
紋ふ付るツタふ似て冬ニ月も葉ふちそ、皆本草ふいでず
とし和俗壁生草といふ秋ハ紅あり、又常のツタハ是ふ似
さう冬ハ葉ふ付 和漢三才畫会 烏蘞苺 俗云豆大 本綱ふ
墻壍の間ふ多し藤柔ふて蔓あり一枝一鬢ふ五葉、
葉長くりて光つ、疎齒あり、面青く背淡し白蘞の葉
のごとし故ふ烏蘞と名つく七八月莖と結び蔓をそ
青白色花の大さ粟のごとし黄色四出實と結ふ龍葵
の子の如し生ハ苦く熟ハ甘し 和漢三才畫会 ハ紫ハ内ふ細子あり云云
夏大和本草ふ曰ハ夏蔦ハ秋ふ至て葉深紅繁ハ

甘藷 和漢三才畫会 仏掌薯 薯蕷の葉ふ比
根の狀仏手柑ふ似て肥り大く攫瘦者の如し故
ふ名づく鎮江府志ふ所謂佛掌薯云云
粒芋 其莖ふ紫の理あり子 白栃 茨栃と以て杖と連
ふく四ぐしして味美し
ね曝し乾し或ハ糸ふ繋て晒し乾す 初蕎麥稽
稲藁と用て包宿しそよく霜を生ず豫州西条の産
甘美ハ備州ふ次く濃州及び 妻梨 是ハ小
尾州の産ハ長さ三四寸ぞ軒のつま
ふと

八月

つ、 絲雀 その部繪行器 敦賀祭 甘
氣比大明神ハ越前敦賀郡ふあり祭神仲哀天皇 の条ふ出り
記 氣比の神宮ハ宇佐同体ハ八幡ハ應神天皇の垂跡氣
比ハ仲哀天皇の鎮座ハ例祭八月十日○今月二日ふ
ア十日まで近国廿里四方の諸商人放下師在言師等
来て集て二日神輿洗あり敦賀紙屋町とハ所ハ人
例年紙細工の家臺燈籠と出し京の祇園囃と模

も三日神事四日と後宴と称し、町々の氏子東番西番と引山と出し、地車をし町中を引廻る、山の上ハ一丈ばかりの松と立、四方錦繡の幔幕、水引赤洛の祇園祭の山の如し、上ハ武者人形を飾る、山の數或ハ五ツ或ハ六ツ、祭礼當日ハ三基と出る、天神の森と云ふ所、御旅所にして神輿遊行、鶴ヶ岡八幡祭 音相州鎌倉ハ有名の一名ハ雲井ヶ峯、上の宮三座、中ハ應神東ハ神功、西ハ妃大神、姉神下の宮四座、仁德天皇東ハ久礼宇礼の二神、西ハ妹比咩、後冷泉帝の御宇、伊豫守源頼義朝臣、安部貞任を伐時、丹祈の旨ありて、康平六年八月石清水の神を相州鎌倉郡今の下若宮の地ハ勸請、永保元年二月成就、義家朝臣修覆を加ハ、治承四年十月右大將頼朝卿、小林の郷ヨ迁ーるハ、今の雀ヶ岡なり、毎年八月十五日放生会並ニ祭礼奉幣流鏑馬角力ハ有、

司召 教隆卿記 司召ハ秋の除目なり、京官除目と号し、春の除目ハ縣召と号し、各拜任の輩ことと召、春ハ大政官の廳秋ハ外記の廳ハ於てことと召、御司召と称し、○司召 定考 同儀なり、稽この部定考

の条とも見合せ考し、

月見

名月 今宵の月 々々の月 芋名月 望の月 十五夜 三五の夜 月華

事文類聚 歐陽詹翫月詩序云月之為翫久則繁霜大寒、夏則蒸雲大熱、雲蔽月霜侵人蔽與侵俱害翫秋之於時後夏先冬八月於秋季始孟終十五之於夜又月之中譬於天道寒暑均取月數則譬宅四況埃塵不流大空悠々蟬娟徘徊博華上浮昇東林入西林肌膚與之蹤冷神氣與之清冷

○名月 湖東問答 去来云三五十五夜ハ月也て名月と云ふ、そのゝちいづれの月もらぞ名月といふ故あることをきゝぬ然ども今日名月の詩哥と作らんハおぼつかなし故實ハ限るべからず、尤故實ハよろしく佳なるべし、定明の字と用ることハ和漢とりハ三五の清光と賞し来る故、明と名と通ひ来ることもつて通用すべし、○今宵の月、今日の月、以上十五夜の月ハ限りていふことなれ共、今宵と賞するところ、旬中ハいづれぞ名月ハ、今ふつゝあるべきなり、ひやせんゝふの月 智月 ○芋名月 續花衰

御湯殿記 名月御祝三方ハ芋ばかり高盛て 蔓時

拾遺 浪華の俗十五夜と芋名月といひ十三夜と栗名月
といふ○三五の夜、白樂天詩、三五夜中新月色○月華
五雜組 人々八月望月華あり或ハ夜半、或ハ微雨
後或ハ八月の末あらぬ、秋後の望ともふことあり、或ハ
いふその五采鮮明旁照數十丈、金線の如きもの百餘道、
或ハ但紅雲ことと冊こ繞るのみ、臨川吳比部摛謙少ケリし
時一度ことと見るその景象鮮妍千態、月華露
万媚真ふ人間いまだこれと見ざる所の奇こ、

草

時珍曰鴨跖草花と碧蟬花とハ三四月苗を生ず、
莖葉ありて葉竹ふ似ること嫩き時食ふべし、四五月
花をひらく、蛾の形の如し、兩葉翅のごとし、碧色愛すべし、
巧匠其花と採て汁と取て畫色と作す、青碧ありて鮮の
如し、倭名抄 鴨跖草 和名都岐久佐 仙覺抄 鴨跖草、月草と称
す、月草ハ露草こ、万の花ハ朝日影ふとを咲と、此花ハ月影
ふ咲けバ、月草と云こ、

土菌

和漢三才畫会 土中ふ生ず、

月夜茸

大毒ハ

格物總論 燕春社ふ來り、秋社ふ去る故ふ是と社燕といふ、

鶺鴒歸る

和漢三才畫会 百舌、反舌、鶺鴒、馬鳥俗ニ云真豆久見
狀鶺鴒のごとくして灰黑色、京師除夜毎ふこれを炙て
食ふと祝例とす、

九月

津村祭

廿七日○津村の御天社
八、摂津西成郡大
坂津村ふあり、祭神鐵倉權五郎景政の靈とい、摂陽
郡談 昔津村何某專ら武勇と励ミ、諸国と巡行して
軍術奥旨と極め、相模の国ふ至りて一夕景政の社ふ
詣て神殿ふ通夜す、時ふ神渠ふ武勇を感ず、託して
云摂津の國難波の勝地ふ祝ひ祭ル、我將ふ法こ擁護せ
ん、答云何と以てか證とせん、曰枕上ふ神幣あらん、明旦こ
ものこと、バけ〳〵て神幣あり、みづからこと負ひ、津
村ふ帰りて、義祠と造り神幣と納てこと祭る、御天
の宮これ、元禄のころ御天の大明神と贈号あり、舞年九
月二十七日、神祭、神湯の式あり、津村の土人本居神とも

椿の實

和漢三才畫会 海石榴その實円く無景花
ふ似て、老て枯るとき殼四ツふ裂け中ふ子
海松子のごとく皮と剥仁と取搾て
油と取、但千瓣の者ハ實と結ぶ、露時雨、露

霜、露寒 古今 ものさびしうさと申せしやはなの木の下露ハ西ふまきまとり」暮秋の露のさうんあるとつゞき時雨とふ露霜、露寒ハ露の気の凝んとそ云あるべし、

七月 願

の糸 公事根源 乞巧とつゝとことかろこゝより事れとゝのくて、庭上ふとゝとおきてさをのゝしふ五色の糸これり、七夕祭とゝとのふまり香花ゝとゝ供具とけて、一事を祈るふ、三年のうちふ必叶ふとつて此ゆゑふ乞巧と申そゝ 朗詠 憶得少年長乞巧竹竿頭上願糸多、白居易

念佛踊 洛北川合村一乗寺村ふ念仏踊あり、念仏と唱へとゝとゝる故ふ此称あり、

兼三秋物 祢

まち月 新六帖 秋の夜のひとうねまちの月うひふ身と吹とゝ庭の松風 衣笠内大臣 八

重垣 ゝ〜まちの月ゝ十九日の月ゝ、一説ふ子待ゝ廿日の月ゝ、

八月 蘐

蘐草 和漢三才図会 俗ニ云蘐草、朽木及び老樹の根上ゝ生ゞ、九十月盛ふ出、一根座とゝ〜数十叢生ゞ、繊円く泡頭鈎ふ似て、長さ一二寸、莖細く柔軟ゝ、繊の内外灰白色凡て灰白色ゝ者と呼て嵐色ゝ此物浅嵐色ゝ、故ふ嵐草ゝ称ゝ、

七月 七日

御節供 日本紀 持統天皇五年七月七日、公卿と宴し、朝服と賜ふ、 紀事 今日武家並地下の良賤、各白帷子と着夢と修ゝ家ゝ索麪と喫又互ふ相贈ゝ、

七箇池 百箇池 事林廣記 漢官七夕ふ百子の池ふ臨ゝ五綵を以て相繞ゝこと相情愛ゝ、八〇七箇の池と八星と祭ゝふ、七ッのたらひふ水と入て、鏡とつけて俗〜の影とうつすとゝ八百箇の池ハ天の川とも〜ふ〜ゝ姫とハ棚機とゝふ又百のゝこらひふ水をゝ〜〜ゝ

刀豆 時珍曰、莢の形と以て名とゝ〜〜ゝ、命ゝ〜〜ゝ、案ゝ〜ふ限成式酉陽雜俎ふ云、莢浪ふ挾剣豆あり、莢横ふ斜ふ〜て人の剣と挾めるゞ如〜、即此豆あり、三月種と下もゝ蔓生し引て一二丈、葉紅豆の葉の如くゝ〜て稍長大、五六月紫花とひら〜、蛾の形のゞ〜、莢と結ゝ長き者尺ふ迫し

微卑爽ふ似扁して剣脊三稜宛然たり、**棗の實** 時珍曰按ずるに、陸佃埤雅に云大なる棗といひ小なるを棘といふ、[大和本草]夏芽を生ず故ふ多つめといふ〇花の形春のふの部棗の花を見つ条ふ註も、

兼三秋物

梨子 時珍曰梨樹の高さ三四尺大なる葉光膩あり、細き葉ありて三月白花を開く雪の如し〇天殺紅瓶子梨、観音寺梨、妻梨、松尾梨、水梨、四梨、空閑梨、鹿の梨、さくの浦梨、山梨ホの種類多し各頭字の部ふ見のちて注も、

鳴子、鳴竿 [和漢三才圖会]榎の樹より生ず大なる者傘すと作て猿と追ふと〇秋の田畑ふ多る鳥獣を驚ス具ス

朝咽秘抄 棹の先ふ鳴子とつけて、片山里ふ栗といふ物

八月

長き夜 夜の短き至りハ夏至ふ過ぎず、夜の長きいたりハ冬至ふ過ず、然れども秋の夜と以て長夜ともる所以ハ秋分昼夜等しく、初て夜の長きとなゞめ、夏の短夜ふ對して秋と長夜とをるの、

名の木散 鹿文曰按ずるふ、枫擅柞ホのごとき、櫨ちる柞ちるといふべきと略して名の木ちるといふるふらん然るに未練の俳士ハ、まるせて発句ふもるハよろしからず、名の字ふよせて假用ふるハいかゞし、千梅も此事如何のよしなるべし、

滑煤莖 [和漢三才圖会]榎の樹ふ生ず大なる者傘すの上甚滑其莖煤黒色奈女ハ滑ゝ須ハ焦色ふ成ハ木ハ莖ふ暑ゝ、

中稲 [和漢三才圖会]九月九月前収ると中稲とす、

中拔大根 [和漢三才圖会]八月ふ種と下し、彼岸の中ふ苗と生ず猶長くして鼠の尾の如きと中拔大根と云霜の後肥太る、

菜 種蒔 注ふ不及、

中汲酒 半清半濁の称あり、

九月

鳴瀧祭 福王子祭 鎮守の社洛西仁和寺の西北鳴瀧廿八日 [諸神記]王城守護三十番神右白虎八神 高雄の鳴瀧川の辺ふ見ると封ぜ西朱雀より西洞院ふ至て九町の擁護神 [擁州府志]福王子の宮八西山鳴瀧ふあり、是此辺の地主の神ふて仁和寺の鎮守ふて、西社とかふ土人本居神ふて同日ふ合せ祭る [紀事]鳴瀧

福王子祭九月二十八日、神輿一基、鉾五本、神殿の御所の庭ふ入る。○福王子の宮祭る所、聖子皇后、皇后八、孝武帝の孫女ふして、吏部尚書仲野親王の女、光孝帝立て皇后とする、宇多帝と生る人、此辺の地主神と崇る事り仁和寺の鎮守ふまし、

滑稽雑談 俗ふ五月五日洗ひ人是一年中の諸社の祭祀の終ふて、又當月の外ふ神祭ちき故、毛吹草ふ鳴滝祭廿八日と記す、近来の俳書外ふ福王子祭と並べ載せり、同社の祭と謬て再び出る、

和漢三才圖会 俗名奈良、俗ふ古奈良樹の高さ丈ばかり、花實瓣、柞の輩のごとし、秋月紅葉する時人ことに賞す、

大和本草 瓣と大奈良といへり、葉栗の如し、秋冬枯て落ず、四五月花ひらく、栗の花ふ似たり、實八雄の如く大し、其苞半つゝむ、又小椶小木多し、材木とすべ、南園栗多し、

南天の實 蘋頌曰南燭、株高三五尺、葉苦棟のごとし、冬ふ入て紅子と生ず、穗をなす、人家多く庭除の間ふ植、俗ふ南天燭とよぶ、○夏のふの部南天花の条ふ

ら

七月

蘭 宗奭曰、葉麥門冬のごとくして濶し、且軟多く、長さ二三尺、四時常ふ青し、花黄緑色、中間瓣上ふ紫の點あり、春芳しき者と春蘭とす、色深し、秋芳しき者と秋蘭とす、色淡し、開く時満室尽く香し、他花と又別し、山谷曰一幹一花ふして香餘り、うるものを蘭、幹数花ふして香ふ及ざるものを蕙とす、

大和本草 是世俗ふ花と玩賞する蘭ふ、真蘭ふあらず、今の蘭八本草ふこれと出さず、蘭草集解正誤ふ載す、

七月迎へ火 送り火 七月十三日黄昏ふ及びて、都鄙とも聖灵を迎る、の義あり、此時門前ふかゝり、必麻柯と焚て灵を迎へ、火とよぶ、十六日又灵と行ふ灵を送る火とよぶ、

報恩経 七月十四日卯時来り、次の日十六日午時ふ及ぶ、

五雑組 人最も中元と重ず、家々猪酒冥衣の具を設け、先人の号位を列ね祭て灵と祭る、女家則父母の遥服、袍笏の類と具に皆紙ふ為る者、これを紗箱とよぶ、父母の家ふ送る、女死すれば、壻亦代りて送る、莆中ふ至るとき八則清晨陣設て、

嚴之子孫冠服と具し揮讓盤折して神と導き以入る祭畢て復送つてこゝを出ることゝ云、

迎鐘 紀事 年ふ依て田蝗害ともろの部六道

蚊の条ふ出、虫送 時民人鐘鼓を撃野外ふ送る

これと虫送とゝ云、凡旱歳ふ五穀の枯萎ひと焼ると

茄の根の枯ると舞 瓜の蔓の枯ると上るこゝ、

蝗の条うえ〜〜ゝるべし、木槿 時珍曰此花朝ふ開き暮ふ落故ふ日及と名

豆民間の詞〜〇いの部

づく槿とゝひ舞とゝ猶僅栄一瞬の義なり〇其木本の

の如く其葉末尖りて揮歯ゝ其花ふて艶之或ハ

白く或ハ粉紅単葉千葉

室の早ゝせ 古今六帖 津の国の

の者あり五月始てひらく、

むろの早ゝせいでぞゝとしをつもるかな

此ふの大木集ふハきの国の室の早ゝせとして入り、紀伊

国ふ牟婁郡あるべし、大木のゝとふまゝとゝべしゝと年華

郡の早ゝせとゝるゝもて古説ふゝくゝるハゝゝよ杜撰

なるべし、

兼三秋物

虫、虫籠 爾雅 足ある虫

とゝひ足あきとゝ

とゝひ、疏云此文ふ對むるのゝ敢て言ハ足あきも虫と云、

雍州府志 下賀茂の社司の婦人松虫鈴虫を養ふ籠

と作る其式纖細竹と刳て竈と造る内ふ一ツの小筒を安

き土と盛て苔と敷き露草少しゝうと種侯俗ふ所謂

露草ハ鴨跖草ゝり、紫白の糸と以て藤花の形と作り、

籠の上より下ふ垂る其躰觀るふ堪ゝり秋ふ至て虫と

入檻の下ふ揭或ハ簾外ふ掛く昼ハこゝと見て

目と悦しめ夜ハこゝと聽て耳と娯しむ、

虫合 虫の声のうゝとゝ

合せこゝ遊ふこゝふ、

胸の霧 萩の乱ちり 胸のうちの曇らで思ひの晴やらぬこゝとゝのへ、

胸の月 清きゝるべし、猶深意も侍るゝ、

八月 花 花紫ゝて

その部ふ出、

紫苑 和漢三才圖会 楊の木の上ふ生ず形状復草ふ異なる

椋葺 和漢三才圖会 椋樹ふ棲故ふ俗

ことなし、

椋鳥 漢名未詳

呼て椋鳥とゝ

背灰黒色、背の下黒白層ゝ眉淡黄頷の以下腹ふ至

て俱ふ白し、翮の上灰黒色の斑あり、翅の本微白し羽黒

白交ぜり嘴黄色鳧の辺微黒と帯、脚脛黄色の声鶏ふ似て喧く好んで群とゐまた、又小椋鳥あり、状相似こ小さ、

九月

撰虫

公事根源 是ハあゝ殿上の道遊として殿上人とも遊びて嵯峨野おくへひらひて、

木蘭子

蘇恭曰豪桑此樹葉木槿ふ似て薄し、細き花黄ふして槐ふ似て稍長大こ子殼酸漿ふ似て其中ふ実あり、熟せる豌豆の如く円く黒くして堅硬し、数珠とまろふ堪くる者是ふり、五六月花収むへし、南人以て黄と染、其こと鮮明あり、

椋の實

時珍曰無患子樹甚廣大枝葉こふ楮の如し、特ふ其葉對生して、五六月白花を開き実を結ぶ大さ彈丸の如し、状銀杏及び苦楝子の如し、生ハ青く熟すれバ黄ばむ、ときハ油煙のごとくなる、黄ばむときハ文皺あり、黄ばむときハ黄老るときハ黑ばむ、

形の如し中畧実中一の核堅くして仁ともる者堅く黑くして珠の如し、

剥栗

搗栗の類ふり、

七月

烏鵲の橋

してかの部ふ注を、

盂蘭盆

會

日本紀 齊明天皇三年七月始て盂蘭盆こ設け同五年勅して盂蘭盆会こ諸国ふ下し講ぜしむ、

氏要覧 盂蘭盆ハ是釈氏の孝こ思こ報い苦こ救ふの要こり目蓮の母こまろふこ以て始こり、梵語ふハ盂蘭

事文類聚 盂蘭盆経云目蓮比丘その母の餓鬼中ふ生ぐるこ見て、即鉢こ以て飯こ盛り、往てその母ふ飼も、食いまこ口ふ入らば化して火炭こなる、終ふ食ふここ得ず、目蓮大ふ叫びて馳還り、此ハ倒懸こいふ、盆ハ此方の器こ事文類聚 盂蘭盆経三佛ふ白す、佛の曰汝ゞ母罪重し、汝一人の力ふよこまる所ふあらず、當ふ十方衆僧の威神力こ、七月十五日ふ至て、當ふ七代の父母、現在の父母厄難の中ふあらの為ふ百味五菓こ具へて以て盆中ふ著て十方の大德こ供養もべし、仏衆僧ふ勅して皆施主のこるふ七代の父母こ祝願し、禅定の意こ行ふしめまつりて後食こ受ものこのこ目蓮の母一劫餓鬼の苦こ脱もることこ得ゞり、目蓮仏ふ白す、永く来世の仏弟子孝順こ行ふ者、盂蘭会こ奉じ、もつもることこ得せしむべし可あらんや、仏言く大善し、故ふ後代の人これふ因て廣く華飾こなる、木こ刻

の竹を割飴錫剪綵花果の形をなし、工巧の妙を極るに至る。

鬱金の花 時珍曰鬱金二種あり。鬱金香是花を用ゐ根を用る者は其苗薑の如くに其根大小指頭のごとし。外黄内赤く人以水に浸し色を染む。又微香氣あり。又曰四月の始め苗を生ず。葉黄に似て花白く質紅なり。末秋に莖心を出して實なし。嶺南の者には實あり。小豆に似て啄ふに堪ず。

馬追 [すゞくりせミ] 江東の俗スイトといふ。其声スウイといふがごとし。いなごに似て小なり。色純青し。尻に剣あり。又ひげ長しあり。雌雄の異あり。中元の時夜盛に鳴。其響紡車を捲がごとし。関東の俗言に馬追といふ。

兼三秋物

上露 [嘉元御百首] 凡このよく野らの草の上露は落て下葉にまとむすびたり　頬覚

鶉 [和漢三才図会] 按むるに處々の原野に多くこれあり。甲州信州下野最多し。畿内の産又勝れり。黄赤に白斑の彪あり。珍き彪のごときは人甚これを賞す。其声知地快といふがごとし。数品あり。嘩々快と上とまて毎に早旦日午夕暮に鳴。凡春二三月始て鳴。若

種に至て声を止む。六月又更に声を発し、中秋に至て声を止む。人是を養ふ。其雌は小く足軽く嗉々を呼て阿以布といふ。○片鶉、斑鶉、

鶉鷹 鶉を取る鷹なり。各頭字の部にわかちて註を

鶉衣 荀子曰、子夏之衣懸結として鶉のごとし。[御傘] 只俳人の短き着物といふ。然ると秋の季なりやといへる。生類に二句去之。○一説に衣の裾の破れて鶉の毛に似たるといふなり。

鶉の床 [御傘] 新式に鶉の床とは、夜分にあらざる物の處に鶉の床とむかり出せり。此道理をよく吟味するに、余の鳥とかはりて空を翔らず。昼も草のうちにふしてかくれ居る。ゆゑに鶉ゐるを夜分にあらずとして、床といふとも夜分に定むべからずとぞ云々。

鰻

簗 [和漢三才図会] 鰻鱺此物冬春は泥穴に蟄し、五月に至て游ぎ出ッ。此時味勝て子を生ぜず。繊くして長サ三四寸。性滑にて利く泥中を潜る故捕がたし。江州勢田、城州宇治名を得たり。[紀事] 秋月鰻鱺流に従ひて下る。是を落鰻鱺といふ。簗を以てこれを捕る。流に従て簗の中に落入故に捕へ易くして魚店に

多くこれを賣る、

八月　宇佐宮祭ふ

十五日○豐前宇佐郡鎮座ふ

にゐり、欽明天皇三十一年、豐前國「厩」の峯菱形の池の上の民家の児ふ託して曰我い是第十六主譽田天皇廣幡八幡く我を護國靈驗威力自在王菩薩と名く、迹を諸州ふ神明な垂る今顕ふ此地ふ在まこのくそこれを奏ま勅して祠をうつ八方ふ八色の幡ど立てふ鼓ふ託宣して八幡と号く○社說ふ當社祢宜奏して云大神の託ふ宣く我元量劫よりこのくく三有ふ化生して善行方便ど修し諸の衆生と濟度を我名を大自在王菩薩とやせくく帝叡聞ありてこれと許しくまふ

公事根源 八幡ハ垂跡の号、後ハ豐前國宇佐ふ鎮ゐ座ふ聖武天皇東大寺建立の後巡礼ふ依て彼寺ふ勸請申さんきさんど勅使ふ宇佐ふ参まゐり○宇佐宮祭ふ放生会ハ勅會し放生会ふ此地を始ゐ

山城風土記 鬼道とハ輕島明の宮の御宇天皇の廊子、宇道の稚郎子桐原の日桁の宮をつくり宮室

とくくゐ宇道とふよりて御名と宇道とのハ

年浪草

三除奇云鬼道の稚郎子崩御の心を新勅撰田目ふ人のなくこそ露ばかり世と宇治山の秋の花園ふとて思ふ宇治の花園ハ桐原の日桁の宮のふ花園く故ふ慈鎮和尚と稚郎子崩御のこゝろをよまゐてハ千梅春耕とゐふ頼通卿の花園と記せハ稚郎子の崩御のこゝろを詠る哥ふ臣下の花園をゐ合せて詠る例ふし殊更慈鎮ハ宇治の関白頼通公ゐ五代後法性寺無実公の子ゐその先祖の花園とゐ

薄紅葉

薄色のもみぢとゐく

和漢三才圖会 梅嫌木 宇末詳 葉味、美り微ふき鋸齒あり野梅の葉ふ似て小く冬ふ繁ふ初ハ青色十月葉落て子紅ふ熟て枝幹ふ添て多く美く一種白き者あり異として珍ゐ然ども赤き者ふ及ばず、

漆の花

輕倍井日本樹高二三丈餘皮白し葉椿ふ似て花と槐ふ似てうこの子ハ午李子ふ似て赤心黄く六七月刻て滋汁と取ふ

茴香の實

和漢三才圖会倭名久礼乃於毛　本綱茴香ハ宿根より深冬ふ苗を生じ叢となる、高さ三四尺、肥さる莖、葉糸の如し、五六月花開く、蛇状の花のごとくして色黄ハ實を結ぶ大さ麥粒のごし、輕くして細き稜あり、俗呼て大茴香とも、今惟茎夏より出る者と以て第二とす、他處より出る小き者ハ小茴香と称る者ハ八角茴香と称る者即懐香也、和多くこれを種て用ふ高さ三四尺肥さる莖粉青色、細き葉浅緑糸のごとく、葉頂夏小花をひらく淡黄色、子を結ぶ形紐の麥ふ似て小く、筋稜あり、中の子ハ皮と同色ふして、飛散る処ふ苗を生ず

鶏卵　すくもせり

一切の國史草史和名抄ふ此名師ふ尋ぬ侍るふ、粟の異名あるかのをえぐ草花肆ふ尋るふ、或絵ありといふさもつのごきふ也、海雁　大和本草海ゥ在雁ふ比をもいふ微小あり、色灰色の如し、味及び足黑し其頸ふ環の如き白色ゆゑ、題名ふ名づく、九月

太秦の牛祭

十五日　紀事　山城国太秦の廣隆寺、常盤村の南山の内村西北にあり、桂の宮院内ふ伽藍神あり、大辟の神社と号す、祭る所の神秦の始皇帝なり、元亨釈書　聖德太子九つの伽藍を造る、四天寺、法隆寺、元興寺、中宮寺、橘寺、蜂岡寺、廣隆寺の別号、池後寺、葛城寺、日向寺　紀事　上宮王院の庭ふおいて牛祭と修す、寺僧各集会す、相傳ふ慈覚大師帰朝の日、順風と摩多羅神ふ祈る、叡山の後此神と叡山の麓ふ勸請す、赤山太秦もまた此社あり、故ふ今宵寺中の神事も、摩多羅神と祭る者、寺中の行者紙衣を着、牛ふ乗て上宮王院の前ふ出、祭文を讀誦す、是悉く懺悔の詞なり、ゆゑ〳〵ハ寺僧ふくることとつとむ、もろもろの戯謔ふ近きと以て近世行者ふてこれを修せず、法令擧て問ふ角力ふくこと寺説ふこの会ハ大念仏会と称す十日の暁開闢十三日の暁ふ至ての結願也　下略

亜州橘　大和本草

温州橘其兼蜜橘ふ似て薄く小し甘美肥蜜橘ふ似て大きも亦同し、漆搔　漆樹の注

部漆の花の条ふ[illegible]ふ悉く鋸と以て挽目と消、其挽目より脂と発て夏則生漆汁と、奥羽及び下野和州尤多し、中國ふも所々あり、其脂と撥取諸國皆六七月ことゞく、九月ふ出せるハ違あり、

裏枯 御傘 草巣の外色づきてうる〳〵事、うらがれるゝ、植物ふ二句、草の名草の字ハ[illegible]も植物ふ三句し、連ふ裏枯過て秋草の句ふ[illegible]こゝふ字ふ[illegible]せざれゝ俳ふハ今一句有べし、云云○青蓋云木の梢の枯るゝともうらかれとゝろうる者あるとゝ[illegible]し、御傘の文体ふて草ふ限れるゝことを[illegible]べし、

梅紅巣 梅の木の葉の紅葉せしあり、

うゝ寒 秋の寒き

ふ

ね いの部ふ[illegible]

の 七月

残る蚊、残る蛍、残る蠅 貞享式 残るとゝふ字ハ其季より此季ふ残らゞ、残るといへる道理あり、中略 譬ハ重陽ふ残るゝと、残る蛍ハ何ふ残るべきや、残るの字ハ総て其季の次ふ取りて、此論と残るの字の例と

[illegible]ゝ○青蔵云年浪草 俳諧歳時記 ふ残る蠅と通俗志ふ[illegible]ふて六月の部ふ出しとゝ[illegible]通俗志ハ雅流の書ふして蕉門の式ふ[illegible]も、故ふ今改て秋季とも、ざんき

残暑 秋暑 山谷詩西風撓不来、

残暑推不去、○猶ほて来て[illegible]る秋のあつさうれ 支考

後の数人 春の部ふ注ス後の字ふ[illegible]字ふ[illegible]も、秋季ふ連さらで秋さるべ[illegible]

句と秋季の[illegible]ひゝ後の字ふ及ぶ

八月

野口念仏 十五日 播州加古郡教信寺ふ[illegible]と野口念仏とふ清和天皇の御宇教信とふ者あり、姓氏詳ふ[illegible]、或ハ[illegible]ふ南都興福寺の住僧永西坊の才子ふ[illegible]加古の駅舎の北草庵と結び、常ふ西ふ向ひて称名念仏を、世仁愛ふて旅人の荷と助け労と救ふ貞観八年八月十五日完薬の郷ふ[illegible]、盗賊のゝ[illegible]ふ殺さるゝ、首ハ教信ふ庵ふ贈つゝ、骸ハ其地ふ葬る、毎年八月十五日僧徒多く教信ふ集つて仏事念仏をつ、勅書の畏ふ云播州勝尾寺ふ僧あり、勝如と名く、八月望の夜一僧来りて

門と敲く即迎へ入る、客僧い、吾ハ播州加古の教信、念仏の功力ふりて今宵極楽ふ往生そうし、尊僧ハ必聖王の今宵往生をごきく、といひとりて去る時ふ空中音楽きこえ明年八月十五日の夜果して死せる、

後彼岸 春秋の彼岸ハ、昼夜等分ふして長短ふし、仏道ハ中道と崇ふ、その時節まことふ中道の辰、故ふ仏事を修ふ、提謂経ふ浄土三昧経ふハ王子ふ善と修まるこ、こ、ろえそうふ、八王子ハ彼岸ふ、八王子とハ立春、春分立夏、夏至、立秋、秋分、立冬、冬至、是也、天神の諸神、陰陽交代そう時、この日梵天帝釈、鎮臣三十二人、司命、司録、閻魔大王、八王使者、悉く出て四方と巡り見、人民の善悪を按へ録そとのふ、故ふ善事を修まごきと、

善道 大師観経釈念仏して西方往生の願行とまそふハ冬夏の両時と取ご、春秋の二節とする、仲春一月仲秋八月両時ハ正東より日出て真西ふ没る、弥陀仏の国真西ふの没所ふ、故ふ弥陀の在所と衆生ふ指示して往生ととげそむる、

後の出替 紀事 雲崎類要ニ云、秦の人本家婢を得て一子を生ひ妻ことと悪し、乞て隣家ふ與ふ、郷家大ふ富貴ふり、本家貧し、後二月二日を以て取帰と、后復本家富隣ふ貧し、和俗二月二日と家僕の交代の節とする、元此ふ本くう、後二月二日八月二日ハ、

野分 月令 仲秋月旨風至ル注ニ曰風ハ疾風也、倭名抄 暴風漢の語抄云ハ夜知又乃和木乃加世

野山の色 御今 ふのくまる、秋ふ、植物ふ二句ふ中暑又枯野も色の字そへ、

野菊 野原ふ自然ハ秋ふ、枯野ともふハ冬ふり、と生ぜる菊と云ふ、花葉とも菊ふ似て小ふ、偽紫の花多し、稀ふ黄花ふりとそ、是上古より本邦ふ生ふる菊ふ毒ふり、食ふべからずと云ふ、今人家ふ植て翫ぶものハ唐土ふり来る上古ハ野菊の分ふし、

鴉 和漢三才図会 按ずるふ、俗ニ云野雉ふ頭頸灰白色、觜の端黑く、其背ふ黄赤紫の紋文あり、翼深黑褐白、脚掌蒼黑ふして后の趾及蹼ふ、

九月後子雛 滑稽貧雑談 和国の女兒雛遊とふ、古きふ物語ふも出ふり、上巳の節ふ拠ふ、今又九月九日ふ賞する女兒多し、源氏物語ふハ常ふも

雛のそべをとゝそなるとハ重陽ふかてあそぶ左もあるべき
う、俳諸是と名づけて後の雛祭ゝと後とい上巳ふ對
して謂

後の月

志の部十三の
夜の条に注へ

野の宮ゝ別

『禁川の御
後』山城国葛野郡小倉山の下椿原おいのゝへ伊勢ゝ
齋宮始此所ふ栖ゝあふよりて伊勢太神宮と勸
請ゝ此所嵯峨野ゝ故ふ野の宮と称ゝ延喜式九齋
宮の親王定ゝ畢ゝて宮城の内便ゝよゝき所と上して、
初齋院とし後禊ゝて乃入ゝ明年七月ふ至ゝて此院
ふ齋ゝ更ふ城外の浄野とトし野の宮と造ゝ八月
吉日とトして河ふ臨ゝて後禊ゝして即ゝ野の宮ふ入云
○野の宮の別と八齋宮爰ふ籠らせのひて二年めの九
月伊勢へ奉ゝ宮ゝ時ゝ天子へ御暇ゝふ奉内しふゝ
此時天子御手づゝ由豆の爪櫛と齋宮の御頭へさし
ゝふとゝ云ゝと別の櫛と申ゝて是ふよりて伊勢齋
宮ふ移ゝ給ふゝ故ふ野の宮の別と申ゝ（この爪櫛ハ素盞鳥尊稲姫
ふうつけゝ因縁と以て齋宮ふうつけゝ又別の御櫛由豆の爪櫛ともいふ）
皇六年天照御神と豊鋤入姫の命ふ詣ゝて大和国笠

縫の邑ふ祭ゝ（同書豆六）垂仁天皇廿五年三月天照
太神と豊鋤入姫命ふ離ゝて倭姫の命ふ詣ゝ（同書）
才景行天皇二十年二月五百野の皇女とゝ以て天照太
神とまつりゝ（云云）三代ゝくのゝくゝまる故ふ代々皇
女と伊勢へ奉ゝ宮仕せふふゝ天皇即位の後親王の内
處女とえらゝ太神宮の御給仕と定のふゝんとト定らふ
内親王ゝきゝをハ諸王の姫君をい定ゝる例ゝりのつゝま
ゝ定め奉ゝ二年めの八月より翌年の九月迄野の宮ふ
居ゝ此間三度の神事三度の後ゝりゝて土御門院承
元二年四十一代の齋宮後鳥羽院の皇女素子内親王の後
此事断絶ゝ○九齋宮祭行ハ九月十七日ゝ其前
日桂川ふおゝて後禊と修ゝ桂川の御後といふ

桂川ハ山城國

残菊

菅家文章黄花之邊重陽世
葛野郡ゝ俗謂之残菊○重陽以後の菊
とゝ残菊の宴八十月藏王ふ載
五日ゝ冬の部ゝ残草菊の異名ゝ接ゝ万花ふ
おくゝ残る故の

野山の錦

くの部草の紅葉
の名ゝ

との部ふ

く

七月

化生 五雜組 歳時記云七夕ふ俗蟬と以て嬰兒と作り、水中ふ浮へ以て婦人子ふ宜しきの祥とす、と化生とは、王建詩云水柏銀盤弄化生、是こ今の人泥塑嬰児或ハ銀範と以てもてる者化生と

苦丹 苦丹ふあるこ、とをもりて七夕の戯あるこ、ろ、と龍膽とは誤

草花 草花肆ふあるの菓蘭ふ

觀音艸 觀音艸ふ龍膽の条ふ注へ、似て少く狹く短し、石菖ふ似てものきあ〳〵、六七月莖を抽で小花とあらは〳〵穗とあるも淡紫其蕾さき愛まべ〳〵然るふ大和本草ふハ、觀音草無花無穗とい、り、京師の俗中元の日此莖を以て蓮の飯と縛ふ觀音草の名義ふあるこ、

常山花 和漢三才圖会根と常山と名け、葉と蜀漆と名く和名久佐木處々ふあり、其葉甚ど臭し高さ丈許葉梓樹の葉ふ似て團く尖アり、畧皺て澤あらも六月細花を開く、白紅雜攢る、

常山の虫 同上蟲ハ此木株の中ふあり、蝎〳〵と蝕ふ六七月株と破てこれを取用て痔の藥ふ入る或ハ丸ふして小兒ふ食しむ丸ふ取の法虫ふあるる木ハ株ふ必小き穴あり、管と以て水こ中ふ入るるハ、虫首と穴より出も、輙木を剪両端と縛りこ、と探り渭ふ

粟奴 和漢三才圖会粟の苗ふ穗とふ出る時、黑き煤と生る者類の奴麥の類の如し

鑣蟲 和漢三才圖会書虫俗字正字詳ふ〳〵て按ふ此虫莎雞のこゝひ、翅青く腹黄色、前脚長く疾走アり跳る、毎ふ穴ふ出入まる故ふ獲ゞ〳〵し、秋鳴声馬の轡の音ふ似こり、因て名づく、

蛁蟟 時珍曰秋月鳴て青紫ある者蟪蛄とも、

兼三

秋物

降り月 滑稽雜談師説ふ八月ハ十六七夜の既望ゞ〳〵る月とい、ふ、然ども居待月の頃より、廿二夜迄の月次第ふ堀こ生ゞ〳〵ると望ゞ〳〵ともゞ〳〵り月ともいふ〳〵藻塩草の傾くの義も捨べらも、

葛、同根を堀 真葛ヶ原 和漢三才圖会真葛 其葉韌薄く楮の葉ふ似て面青く背白し、風至ればひら〳〵飜ふ恰も掌と反もゞ〳〵し、凄凄〳〵て声とふも、故ふ哥人葛の

葉の裏見て称し人の恨ふあらん、[大和本草]根を冬月或ハ春いとぐち苗を生ぜざるときほうて用ふ長きこと数尺乾し用ふ葛根是也云、古式八月の季ニ採て不審、○真葛の真ハわむる辞、真葛が原ハ京師知恩院山門の南ふあり[とも]ども只葛の生ずる原といふなるべし、

花壇 [貞享式]今按ずるふ花壇を花畠も決して秋ふ定むべきこと、

草の花、草の実 諸草のさくひ春夏ふ花を開く者あれども秋多きゆへ故無名草花と秋とを、実もまた然て、[古今]みどりふる ひとつ草とぞ春ハ見し秋いろ〳〵の花ふぞなりける、

栗 いもくの部 蓮芋

芋 の条ふるべし、

観音寺梨 近江國芦浦観音寺より出ず微赤く甘し口中ふ消るがごとし、

九万疋 鱈一名九万疋 [とい]ふ魚の部 鱈の条ふ

八月

桑名祭 十八日、春日大明神の社勢州桑名の城下ふあり、祭る神四座別当仏眼院説ふ云経津主命ハ神護景雲元年下総香取の宮より勧請ず又武甕槌命ハ正應二年八月十八日常陸國鹿島の宮より勧請ず天児屋根命姫大神ハ永正二年八月十八日伊賀の名張より勧請ず毎年八月十八日を以て祭辰とす也ず、応永仁の月日とスルを修ずといふ、○先十七日、社前の南北ふ車二輌ず飾夜ふ入て試ふあり翌十八日祭礼のとき、件の車を南北へ引渡し音楽を奏ず明和十年の春回禄以前ハ、両社六座〳〵北三崎の神社三坐南春日の神座三坐ハ往古ハ春日鎮坐の日を以て祭る回禄後祭礼延引ず、三崎大明神ハ土地の神ハ鎮座の年月詳ふらず 凝洲寄 鳥洲寄 泡の洲寄合せて三寄といふ又七月七日の神事あり氏子貞弁川ふ於て石を取て来て両社ふ献ずこれを石取の神事といふ此日雛遠物を出ず○此八月祭を天武天皇の祭礼と記せず書あり日本紀ふ天武天皇元年九月朔車駕還伊勢國桑名宿ずとあり云、今駅中ふ神社あり[とも]誤ず記ず、

苦参引 時珍曰苦ハ味を以て名く参ハ功を以て名く、[和漢三才図会]其花莖の梢ふ穂とあり七八月開く莖根葉とともふ薬用ず故ふ根を連根を採る、

樂堀

秋野山ふ出て藥草とする故、虞美人草大和

冷寒なと句ふうて秋なるべし、

本草 名花譜云花四瓣色艶墨葉ふ類〳〵こふ園史云呉俗呼て虞美人草〳〵十六云、是ハ四九月花ひら〳〵者〉

花彙 美人蕉紅蕉花 此芭蕉の一種 類說 褒斜山谷の中ふ虞美人草ありり形鶏冠のごとく大ふして花ふ〳〵葉皆相對て或ハ虞美人の曲を唱ふれハ兩葉撫掌〳〵〳〵頗る節拍ふかなるが如し、○鷺水が新式ふ口決あり〳〵とらく もの何〳〵の草をつくるべし、

栗茸 和漢三才圖会 山原ふ生ず、高サ過ぎ、纖四五分四〳〵卷正白色、剥くる栗の肉のごとし、故ふ栗茸と云、

下篠 をの部落鮎の条ふ注を、

九月菜

黄の袋 きの部菊酒の条ふ注を、

栗の節供 きの部菊の節供の条ふ併せ出を、

九日小袖 菊襲 清嚴正徹記 九月衣類菊襲面白裏紫〳〵〳〵○地下良賤合縹色の小袖と著し、互ふ相賀を、是を九日小袖と云、

鞍馬祭 九日 諸神記 鞍馬寺由岐の社

天慶年中勸請を、神社啓蒙 鞍の社ハ山城國愛宕郡鞍馬山ふあり、祭る所の神一座大己貴命○此社ハ天子不豫世上騒動の時、鞍と此神前ふ懸く故ふ由木と号ふ蓋大己貴命少彦名ともふ疾病を療し、天下を治るの神ともて五條天神及當社ふ鞍とうるの遺法なり或說ふ祭る神素盞烏尊ともて例祭九月九日〳〵八日の夜氏子の男女供物と旅所ふ獻を、當日神輿本社ふ入、

勸學子會 十五日 三月九月十五日 一年両度行ふ 三月の条見合をべし、八事根源 勸學院ふの大学の南ふ此院を立らるしハ南曹ふて申めく參綱大臣達ともて子孫親族の学問をなくふ建立云

呉服祭 あの部穴織祭の条ふ併せ注

胡桃 庖厨本草 此木ふ〳〵ふ似て最も大ふ、其実核四〳〵大く色淡く皮厚く硬くして破ら〳〵、仁脂多く味最も美し、

槇櫃の實 蘇頌曰槇櫃の木葉花実酷く木瓜ふ類を、木瓜ふ比もんバ大ふして黄色ときとなるふ惟蒂の間とるふ重蒂乳のごとくのあり、此則槇櫃

大和本草 花ハ林檎又海棠ニ似テ九月ニ開ク、實ハ秋熟ス、俗ニ九月母トイフハ名義未詳、木ハ蜜柑ヨリ長ク早ク実ル、

栗

事類合璧 九月霜降ニ乃チ熟ス、其苞おのづから裂テ墜者久シク藏ムベシ、苞裂ル者腐易シ、○落栗、毬栗、燒栗、掘栗、栄栗、剥栗、打栗、出落栗、三度栗、山栗、雑栗、搗栗、各頭字の部ニ分ケテ注ス、

熊栗架と擂

特珍曰 熊石巖

枯木ニ在テ山中の人ニ多ク熊館ヲ設ク、性ヨク木ニ上リ好テ栗ヲ食ハ故ニ樂鑁ヲ捎ニ至テ枝ヲ折テ並ベ鋪テ居所ト設ク、是ヲ熊の架トイハ、熊館の類ナリ、

茱萸

和漢三才圖会 胡頽子 大抵三種アリ、其葉ト實少シ異ナリ、一種春月ニ當テ苗ヲ種ル時實熟ス、大サ小棗ノ如キ者ヲ茱萸代胡頽子ト名ク、一種五月実熟ス、大サ棗ノ如ク莖長クシテ下ツ垂ル、一種九月実熟ス、小ク其大サ櫻の子の如クシテ簇リ結ブ、

草牡丹

大和本草 葉ハ牡丹ニ似タリ、單の白花ヲヒラク、實牡丹ニ似タリ、宿根ヨリ生ズ、又實ヲトラズシテ生ズ、是又牡丹芍藥の類ナリ、

草の主

百首 菊の異名 堀川の旬ハ八月ニ菊の花ヲ愛ス、草の主ナリ、

草の紅葉、草の色

草木の紅葉を錦ニ比ス、

草の錦

野山の錦 草木の紅葉を錦ニ比ス、

新続題林 織ル錦 秋の野ニ多ク咲ル花の千種ハ邦忠、

崩魚簗

下ノ簗の破壊スルヲ春の部上リ魚簗の条ニ注ス、

暮の秋

暮テ行秋トイフ、秋の暮ニ混ズベシ、

九月

盡

九月の晦日ヲイフ、

や

七月

柳散

晉史 蒲柳の質秋ニ望テ先ヅ零ス、

八幡安居の頭

十二日 紀事 九安居の頭ハ大経営ニ故ニ三年以前ニ其人ト指点シ、先前年の十二月朔日ヨリ翌年の十二月十五日ニ至テ八幡山下の卿家安居の頭ト動シ、御家村里中の長トイフ、その土地の中ニ在テ姓氏ある者ヨリ又十二月八日今日石清水安居頭人の宅ニ於テ、

達所小綱の神人長吏の補任と授けることを指部こゝに又十二月九日頭人の宅ハ御家衆を饗應し能拍子ありしことを古那志といハ是小習礼の執行なり又十二月十三日頭人夫婦杉山不動堂の前ゆて垢離を修もこゝとこ精進入と云ハ又十二月十三日頭人浄衣を著し七所の社ハ奉り奉幣ゆり頭人の婦も又こゝとハ従ハ並ハ御家烏帽子浄衣を著し奉供をその行粧甚だ古風なり故生川ハ橋二つあり一ハ安居橋と名く是安居當人の渡る橋ハ當ハ不浄の人を禁もそ頭人こゝとを渡ハバ今日山上相知る所の社僧の坊ハ止宿して精進潔斎もこゝ(この間西塔桂の里ハ女子孫夜又白布を以て頭髪をつゝみ素こゝて桂鉢を捧ゞ是を桂帽子と称もそ今京の童謡ハいく桂帽子是〳〵十月十五日安居頭人夫婦社参本社の前ハ大なる松一本建く白布二疋とその上下の枝ハうけ人とゝて飯ハ猿のまゝ〇そ〇その松ハ登せそのうけ布の枝を伐捧て頭屋ハ帰ゞ後代修頭の袋ともし

糯米 【本朝食鑑】今製もる焼米ハ青稲といて稗穂と去り炒り過ゝてこゝと春き糯米こゝ

此と焼米と称もそ甚佳味〇勢州荘野の市上ゆて焼米と造る青麥艸と以て俵子と作ゝこゝと畢ゝて四方に送る、

藥師草 弟切草と

の部こゝる〇べし

益母草 めの部こゝ

炙花 【日くゝ世ゝ】 微紅〇児童其花をとり唾ゆて莖付方と上ゆゝて手足或ハ頬ハ貼ゝハ疱ゝ炙のし依て名とも〇是和産〇其蔓葉女青ゝ似て七月葉の間ハ筒状の花をひらく五瓣ゆて少しく瞿麥の形あり

やんま との部蜻蛉の条ハ出ゝ

兼三秋物

薯蕷 【和漢三才高会】和名夜万都伊毛、俗ニ夜万乃伊毛、今云長甚〇其根の長さ尺ゝ〇ゝ周ゝ二三寸、灰黄色肉白し煮て食ハ〇〇 【救荒本草】薯蕷溪の辺ハ高ゝ出し時時瓜水ハ感〇て鰻ハ変ゝ半変ゝ者ゝ人性多〇〇此者暮蕷ゝ〇ゝ薯蕷ゝ〇ゝ又山藥ゝ〇ゝ初め唐の太宗諱ゝ蕷ゝ〇ゝ因て避て薯蕷ゝ改ゝ又宋の英宗の諱ゝ暮ゝ〇ゝ因て山藥ゝ改ゝ

焼帛

てその余りと焼て田ふ立るゝ其髪とりぎて鹿のまゝ
そゝと焼

八月

八幡祭　放生會　八月十五日堵国

放ち鳥　此をけりとゝ

どゝと、男山の神吏と以て京師の人八幡祭或ハ放生会ゝ
社頭美豆の南八九町ふあり京と去ること四里余男山石清
水と号、或ハ雄徳山鳩の峯と称て、欽明天皇三十一年冬
肥後國菱形の池の辺、民家の兒三才の時、神託して云、我
ハ是人皇十六代譽田天皇也と是ふよりて豊前國ふ鎮
座して八幡太神と称ゝ、傳へふ貞観元年秋七月八幡太神
鳩の峯ふ移る、しゝめ釈の行教南都大安寺ふ居る、
僧、姓ハ武内大臣の裔)曾て貞観の初め宇佐の神祠ふ
詣づ、一夏九旬、昼ハ大乗經と誦ゝ夜ハ密咒と誦ゝ夕夢中
ふ太神告て云、師王城ふ帰らゞ我も又随ひ行、王城ふ居
て當ふ皇祚を守るべしと、行教やうやく山城國山崎ふ
至るその夜太神又夢中ふ告て云、師我居る所を見よ、
覚て云ふとゝ、ハ東南男山鳩の峯ふ光と現ゝ行教と
ゝと奏して宮殿と成る、○正殿三座中ハ八幡宮應神東ハ
氣長足姫尊神功西ハ比咩大神主依姫後崇峻天皇源の姓
と諸皇子ふ賜ふ時、八幡宮と氏神と、此社と以本朝才二
の宗廟ゝ尊ゝ、毎年二月十日初卯の日神楽ゝ、卿神
楽ふ准ぜらる、八月十五日放生会あり、養老四年九月征夷
の事ゝ、大隅日向の両國逆乱ゝ、宇佐の宮ふ祈
請ゝ、その祢宜辛嶋勝婆豆米の神車と乗て
かの國と征し畝と討て利あり、大神詔して曰、合戦の間多
く殺生ゝ、宜く放生会と修ゝべしと、諸国の放生会
ふ始る、○紀事今晩神と輦中ふ迎し奉り、神幸を
促ゝ左右の馬寮卿馬三疋と幸ゝ、召使、官業外記史左
右兵衛の府ふ参議上卿左右兵衛府上臈前駆ふ舘屋
殿ふ参ゝ向ハ神輿猪の鼻と下ゝ、病院頓宮ふ至りて行
列行幸ふ准ぜ、この式後三条院延久二年ゝ始る當社の祭式甚ゝ繁多、故ふ略ゝ

八束穂

豊年の稲の穂のゝ

山雀

和漢三才圖会大きさ雲鳥ふ似て頭黄白ふ赤色と
るゝのゝ長きごとゝふ、背灰赤色背胸尾ゝ
帯ふ眼額の辺ふ黒き條あり、
ふ黒く腹淡赤く性慧巧ゝ囀る好て胡桃と食ハ

紙撚の輪と作て蕾中ふ設くる時ハ飛て其論と潛る
別ふ箱と蕾の隅ふ安て宿處とす〇此鳥藝とくハ
山雀ふ藝とき〜へて故ち鳥乙由

敗荷

注ニ不及ハ

九月

中巳午日 周防国吉鏑郡仁壁の神社、九月中巳午日
祭礼と行ふこれと山口祭といハ山口の古名ハ仁壁の庄故
ふ仁壁の神社と号ス祭る神住吉三神と以く本社ハ
合世祭る神二神味鉅高彦命下照姫の命各一社以上王
殿三社をづく〜仁壁の神社と号して又織機大明神とも
又稲宮とも称も衣食のことを主りるふ神なるふりて
此号あり祭礼のもづく織機の神夏あり次の日神幸
神輿三座本社の西神幸の地ふ出し奉る流鏑馬ハり、
皆国主ふりことと執行ちらる有司ふりて国主の拝礼
あり又六月御田の祭ハり人鎮守の年月詳ならず人王十
一代垂仁天皇の御宇勅幣

八幡花の頭

廿日紀 東

と奉らるその傳記失散も、
山城国八幡山の社僧九月廿日花の頭と修も先六月
より撰ちめて花薹と造ることと地盤剥とふふ我
俗板と割と序とふふ又剥とふふ是板と剥て薹と製るの
義ふり花の頭とハ社僧の弟子髪と剃衆僧の列ふ加るの
ときと社僧と饗もふ彩箋と以て草花と製し薹と神
前の廻廊ふ飾り酒宴の興と催も故ふ花の頭と称も、

山路草

菊の異名ふ〇十名ふ山路のきく谷
の柄のくちゐるのちも猶やはらん 前内大
臣賞

焼栗

焼くる栗ふ、

山粧ふ

国遊録 秋山明淨 破
繼 わして粧ひつ紅し、

芭蕉

芭蕉翁移芭蕉詞ニ云唯この藥ふ遊
びて凡両ふ破も安きを愛もるのことを

漸寒〜

次第ふ寒きとふふこと

七月

ふて秋の末の寒をとを云、

槙賣

ろの部
六道巷

の条

曼珠沙華

天和本草 金燈花、鐵色箭とも云、
月令廣義ニ曰冬春葉茂り夏月
ふ出、
花と生して葉死る花葉相衛らずと云く此花下品〜其葉
石蒜ふ似ふり一類ふ此花と國俗曼珠沙華と云翻譯名
義ニ曰曼珠沙ハ此ふ柔軟又赤華とふふ酉陽雜俎曰金
燈草俗人家ふ植ることと種ることと悪ふ一名無義草と云、

花ゐるときハ葉なし、葉ゐる時ハ花なし、○俳書ふを曼珠沙華、石蒜同物とをといふごとく、篤信翁の説ふ従ひ、石蒜ハ花の部ふと

松虫 和漢三才畠会 蟋蟀の類、褐色ふて長き髭、腹黄く、野草及び松杉の籬ふ在り、夜羽を振て鳴声、知呂林、古呂林といふごとく、甚だ優美なり、松虫鈴虫、昼ハ得がたし、夜燈火を照す時ハ光りを慕ひて来る、捕へて籠中ふ畜ふ、○今俗ふリンくと鳴ぶ鈴虫とりふハ、ちろし、是松虫なり、鈴虫ハ、チンチロリと鳴といふ、ちろり、

兼三秋物 **真夜中月** 廿三夜ふ、子の刻ふ出て午の刻ふ入、

十寸穂の芒 典名抄 穂の長さ一尺ばかりなるをいふ、彼ますかがみと、万葉ふ十寸鏡と書るゆへなり、

真蘇宇の芒 同上 真の蘇枋なり、

麻芦穂の芒 同上 真麻の心なり、是俊頼朝臣の哥ふよみて侍る、ますかの糸をくりかけてと侍る、糸ふどの乱れるゆへなり、

たゝえぶと人とおもわゆるゆゑ、俊頼○まそかの芒とハ穂の赤きをいふ、ますかゝ、まそかゝ、もどりつるハ、ゝれ語の轉じ、ゝるゆてかをハ赤赫の意なるとゝ記まゝ、そして各別種ふ注せるハ誤なるよ、

松尾梨 清水濱臣の考ふ、まろとまゝ形、観音寺梨ふ似て雪のごく紫少く甘し、奥州會津の中、松尾の産ふ、今洛の人家所々ふ接得て、頂妙寺拝と一双とをといふ、

圓梨 青梨の種類ふて大きく、皮薄く色青くして甘美、

八月

待宵 八月十四日夜孫明後詩云銀河無声露暗垂、玉蟾初上欲四時情樽素瑟宜先賞明夜陰晴未可知○待宵とハ翌の夜の晴曇りはかりがけ、ハ先今宵月を賞するゝ待とい翌の夜の月と待義なるへし、

三潮草 **松茸** 和漢三才畠会 松蕈ハ山城の北山の産最佳、赤松の陰所秋の雨湿の為ふ醸さるゝて生ず、初め落葉を戴きて見ごとく、漸く長ぎる者、三寸頭四く柄あり、鼓の槌の如く、其大なる者尺ふ近し、日を経て傘と発く、外の色黄白紫を帯び、

細く深く刻こあり其柄太き者柔ふして味良し八九月の交盛ろうゆるを、舞蕈 同上 湿處或ハ朽木ふ生ず、纖柄あり一株片々と叢生を、間引菜 炎炎華の如くして上黒く元白く味脆く甘し

貝割菜 摘菜 和漢三才圖会 九蕪菁蘿蔔の類、大抵小菜八月種を下し彼岸中ふ苗を生ず其繁茂を抜て者食ふ摘菜 間引菜是ゝ云ふ又曰苗を生じ地を出ること一二寸漸く茁て三葉あるを蔬とす是を貝割菜と号

椎子鳥

和漢三才圖会 正字未詳狀大さ雀のごとし全体灰黒胸腹淡赤し羽灰黒色ふして黒き彪あり尾の下両端ふ白き者二つ其嘴短くして赤黒く脚黒く頂灰黒頭より胸ふ至て淡赤ふして白き圈あり千葉菊花の紋の如し、豆鳥 豆甘美 いの部桑鳥 豆廻 の条をこゝへ照らすと大ほこれり、

九月

豆名月

八月十五日の月と芋名月といふふ對して十三夜の月と豆名月といふ、

外市

すの部住吉相撲会の条ふ出ッ

鞠花

菊の異名ゝ 藏王ふ云ふ菊の字本鞠ふ作る、鞠ふ從ふ鞠ハ音キク訓ニリ又鞠の如き形とふ表白緑色 うくゝ世と 此種蕃邦より渡て此訓ハ則蠻語ふて今京師ふ多し、梨子の如く風味も梨子ふ似て少しからしふ世いとゝとりハ菓子ハ豆引 和漢三才圖会 赤俗作穀角穀こと云ふ砂糖と和して製しこれを菓と菓とりハ菓と藿とりふ蕙と其とりふ本綱ふ菓ある穀の總名皆赤とりハ大豆ふ黒白黄褐青斑の數色あり大抵夏至十日以前種を下し七月花をひらき九月莢を結ぶ、

正木の蔓

真潤羽 云まさきぐさ

ぶ、ぐらハかと常磐あるかづゝをまぐらふべしちろんバいとつゝ八神社ふよりて用ひもれしハさまゝ有るべき中ふ蘊ゝ鬘ゝ せゝハ一種有りて古今集ふ深山ふもあらんふるゝ外山ふるゆきのうゝいろづきぬるみしハまぐて常磐ある草木も冬のゝ下めふて去年の古葉色づき落るかれあるゞ山の岩木もぐふゆゝるゝそうづゝ其葉八南天燭ふ似て黒ゝあるゞ冬のそじめふえもいそぎゝぐるゞり是ぐ山行時ひとら目ゝ

榲桲

藏器曰樹林檎の如く花

つきてくゆるとハ右のごくハよみつゝ云〇真淵翁の說ふよるときハ定家蔓よ似くり俳諧ふ秋季と定めるハ古哥ふ色づくしとゝ

冬青の實 和漢三才圖会 冬青其葉冬もまゝく正青く光澤あり四長ゆて尖らず輭なる鋸葉あり夏小白花とひらき秋実と結ふ生ハ青く熟ハ紅ゐおのつゝ裂て中ふ白子あり枝とさゝて活易し藩籬といふ堪ろ

ゆてハちゝ 大和本草 櫧の一種ゝ葉ハ櫧ふ似て厚く大ゝ色深青面ふ光沢あり屋材ゝ器を作り舟の櫓ともそ其用櫧と同じ一類別種ゝ実ハ櫧より大ゝ

檀 和漢三才圖会 其実楝ともゝ民用と助ゝ〇実を以て秋ともの子ハ如くふて小く蘖りあゝ生ハ青く熟ハ紫赤し裂て内紅子三ツ四ツ粒あり其葉秋ふ至て紅あり

松の實 もの部松子の条ふ注も

け 七月 今朝ハ秋立秋と いふ、

牽牛 もの部二星の条ふ出、

夏解、夏書納 夏ハ四月十六日ハ七月十六日解夏と夏解とゝ夏九旬の間仏の化益の為ふ聖經及び名号題目と書寫し夏終るの後夏と堂塔伽藍ふ納め三界万霊ふ回向を夏と夏書納とゝ在家も亦此ふ效ふ

夏解草 釈氏要覽 僧尼解夏の日綵と以て節と束ねて檀越ふ遺るゝ是と夏解草とゝふ今この草と詳ふもとゝふ己ふ五分法身の座とも故ふ吉祥草と名づく 漳州府志 四時一色泉石の中ふ生ず山村の人瓶ふ挿て先ず祀る陰字ふ宜しゝと葱翠ゆて凋まず家ふ吉事ゆれば必ずゝ花開く故ふ吉祥草と名づく 字彙 節ハ伊及反音印草の名ゝ 大和本草 夏解草ハ麥門冬の大なるものゝ

兼三秋物 玄兎月の異名ゝ〇謝莊月賦云引玄兎帝臺〇つの部月の兎の条ふよそしるべし

月宮殿 つの部月の都の条ふ出、

雞頭花 時珍曰雞冠花の形と以て名ふ命ず春苗と生ず夏ふ入て高き者五六尺短き者繞ふ數寸ず六七月梢の間ふ花とひらく紅白黄の三色あり中ふ花最冬ふ耐ゝ霜〇

後始てけいも焦る、黄獨 鎮江府志 莖も蔓も花も實も山藥ふ類も、葉大かつて中四く根ハ芋ノ如くうつて鬚あり、味微苦し○俗ふ何首烏王といふ者是、枳椇 正字 白石李子 蓋枳椇ハ実の名のこ、その実大さ大豆の如し、こと喰へバ少しく梨の味あり、小兒疱瘡鼻穴閉ざるもの、これとを以て其鼻穴を穿つ、

八月

けふの月 つの部月見の条ふべし、毛見 紀事 土民年の貢と納ふ凡秋米収納もろの法晩秋ふ縣史先て田地の立毛の善悪を巡撿して是を毛見といふ、草を毛といふ故ふ稲未メ穫 嚴粟子蒔 月令廣義八月十五夜嚴さる亦立毛といふ、粟子を種まバ花盛ふして繁し、

七月

舟形の火せの部施火燒の条ふ出ッ 古枝草 萩の異名 藏王 宮城野や露も色ある古枝草こと しの秋も花ハ 藤袴 和漢三才圖会 高さ二三尺葉さきさろり西行女郎花の葉ハ似て切又ハ、

六七月細き白花を開く今云藤袴是こ 俗名抄 蘭和名 本草云布知波加萬新撰万葉集別用藤袴二字 大和本草 真蘭和名藤袴又アラ、ギーとい、古哥ふらふとよめり、八雲御抄ふ蘭を ふちむらまとりふと書ふ葉ハ麻ふ似て両岐あり、香よし、乾て弥香し是真蘭こ野ふあり秋紫白の花を咲く若葉ハ中ぶきて食べし其芳香美味凡菜ふまさる、詩經楚詞ふ詠ず蘭是こ 和訓栞 花の色ときこ藤こ称し其辨の甫とあせるをもて袴と称せり、○袴ふ似たるゆゑ 哥俳諧とふ同し 古今 何人うきてぬぎうけし藤袴 秋ぎとふ野べとふれます 曠野 藤袴 それ窮窟みめうちえ蕓 筆津出 蟋蟀の異名こ 異名分類 古き筆の化てとふ とりふでつゝ秋も今いと浅茅生ふ こ 八雲御抄 子待 卧待 廿日月ふ入 兼三秋物 卧待月 卧待廿日月とい題ふて ふ 桂明抄 永德の頃為重卿廿日月とい題ふて ふ ふつの月の卧待ふ猶宵の間ハ出て出き卧待月ハ八雲ふ廿日月と遊さもとりてとと望月ふ入りて廿日月ふ詠んハ不審ふくゆども月の百首ふ八十九日の月こ○一説ふ卧待

月八十九夜の月を更待月といふ、又寝待月ともいふ、

更まち月 藻塩草 日の月あり、

筆柳 形小さく長し、

蒲萄柳 袋柳 本朝食鑑俗蒲萄柳と称す或は袋柳といふ味佳なりといへども用ひざるもの、

八月

匏 実の条を注ぐ、

木芙蓉 出る者を色と草芙蓉といふ荷の花是也陸に出る者を色と木芙蓉といふ時珍曰此花艷〻荷の花の如し故に芙蓉木蓮の名あり八九月始めて開く故拒霜と名く中暑冬凋夏茂て秋の半始て花を著く花牡丹芍薬に類し紅白黄千葉の者あり最も寒に耐て落ざ實を結ばず、

蒲萄 時珍曰春月萌芽を生じ葉頗る括樓の葉に似て五の尖りあり鬚を生じ蔓延數十丈を引三月小花を開き穗を成て黄白色実連り着く星の如し七八月熟す紫白の二色有、

蒲萄酒 時珍曰蒲萄酒を造るべし法酔を酺飲すれば陶然として醉ふ、

袋洗 山海名産図会 伊丹にて新酒成就の後猪名川の流に故に此の名あり、袋を濯ぎ其のころと待て近郷の賤民この洗瀝ども貧乏味薄き醴の如し是又他に異なり賤の女や袋洗ひの水の汁鬼貫○青藍云鬼貫の先吟も

二季子鳥 雁の異名 藏玉 また秋季にて子細なくして古里とて二季子鳥と〻ふ

ふる〻に行つる〻ん 忠岑

九月 公事根源是八諸国の田の損亡する堪田の申文 九月七日或八五日

不堪田奏 涙 所々の目録として奉るとふつきこ租税と三分二を免じふとありこあるふ諸国より坪付帳を奉れば大臣庫ふつきてちぐあ申て諸国ふ施行あり作るふ堪ざる田をいふころ

二夜の月 志の部十三 夜の条を注ぐ

福王寺祭 部

田と申ふり、

鳴滝祭の柔らぐし 和漢三才図会 其樹柚ふ似て刺あり

佛手柑 青色筋理顕然として畧多羅の葉ふ似て七らぐ 大和本草 昔本邦ふこまるし近世来る、

緑豆引 大和本草 緑豆一年の内ふ二度実る故ふ八重生と云ふ八〇苅收るを引といふ、

佛甲草 大和本草

京都及び諸州ハ一夏草といひ、又根ありて草と云、根鬚多く、葉ハ細長くして茎と折て上ハ狹くなり、能生ス[滑稽雑談]或説ハこの葉の形指の爪ハ似ること仏甲草とも仏指甲の名あり、此草の葉生ひ出て石地ハある形蓮花の如く故ハ岩蓮花とのハ驚信ハ非〕

○岩蓮花ハ[illegible]ハ仏甲草〕雑物ハ

冬と待、冬と隣 注不及

二 七月

小町踊 たの部七

夕踊の条下ハ出、

御霊ヶ御出

十八日御霊の社ハ上ハ京都の北西ハ下ハ京極大炊御門の北ハ[雍州府志]此社始ハ近衛通新町ハ上御霊ハ京極の西出雲寺の北ハ上下御霊の社、毎年七月十八日御出、八月十八日祭礼あり、神輿二基、御霊ハ所ハ崇道天王伊予親王吉備の聖天藤原夫人廣継藤原夫人橘逸勢文屋宮田丸火雷神〕世ハ火雷神と謂て菅家の霊とする者ハ誤〕傳云御霊ハ所の内四所ハ祖武天皇の御時ことと勧請を下の四所ハ仁明天皇の御字ことと勧請も〇上出雲寺と上御霊の神宮寺と下ハ出雲寺と下の御霊の神宮寺とハ傳教大師の草創、て今西寺とのハ絶ること、寛文年中慈眼大師の遺誡ハよりて久遠壽院の准后山城国宇治郡山科の郷ハ於て出雲寺と再興ハ[illegible]ハ毘沙門天と安置しハ御霊の社あり是古と存ることの遺意なり、上御霊の御旅所ハ京極通り中御霊ハあり、下御霊の御旅所ハ年々この所ハ定めなこと年神事頭屋の家内ハ安置、御旅所ハ在その間と以て御旅と称す、

おいつる使

すの部相撲に

小鷹狩

[滑稽雑談]初鳥狩小鷹狩、

の条ハ出、

少しろ[illegible]ハ[illegible]と、万葉新点ハ[illegible]ハ差別ハ小鷹と秋くするハ鶉雲雀その外秋の小鳥狩ハ大鷹ハ冬ことこと鶴雁鴨の類と狩〕[すくうせ]凡て鷹ハ冬ハ小鷹の分ハ秋〕その種類多し、刺羽といふハ小隼〕朝鮮より来る雀鷂雀賊、つこの雄〕兄鷂鷂このりの雌〕鶻ちち〕巣このりことハ秋巣ハ取といふ〕凡て鷹ハたゞ捻名ハ別ハ大ハ鶻ハ小

紅梅草

仙翁花〕せ

たゞ捻名〕

浮薔薇

一名沢の部ことべし

梧梗

[つくうせゴ] 葉ハ葵の形ふ似て滑あるところ那岐ふ似ふ
夏の末より秋碧花をひらく花こまゐぎと云〻水草ぞ
是と水葵とはいえこる輩多し水葵ハ蓉〻
花黄あり人〇腥し小ふぎの上の鼈の腸芭蕉 **竈馬**

[酉陽雜俎] 竈馬 狀促織の如し俗ふいふ竈ふ馬あれば食ふ
足の兆 [大和本草] 蟋蟀ふ似てひげ足ふくせい高く頭尾
さがりてもるどと〻竈のあくうふ穴居を筑紫の方言ふ
井ヒゴ〇海士ふ家ふ鰕ふ多〻るいくこれ 芭蕉 [兼]

三秋物

心の月 [萩の枝折] 心の月
とハ清き心とらむ〻 **氷の輪** 月と
見立
て云 [東坡詩] 氷輪横海濶 **氷の鏡** 同〻 **牛蒡引** 注まか
よむ〻

胡盧拵 一名豆拵即乾拵 **樹練拵** 形鳥の卵の
如し摂津丹
波ふ多し所謂鷄の子拵 狀、京師 **御所拵** 大和の
御所村
ふて御所拵と以木棟拵といふ、
ふて出る樹淡 **紅瓶子梨** 瓶子の形ふて
赤く其肉白、の上品ふる物 **空閑**

梨 肥前の產微赤色極めて
大ふり其味川梨ふ亞 **小瀑江鮒** [和漢三才圖会] 鯽小き
者と江鮒と名く或ハ名吉或ハ伊勢鯉或ハ口ヨ又伊奈洲
走小瀑江鮒といふ中 暑八九月稍長じ大さ六七寸江海の
交ふあり此時泥味ふく脂多くして愈甘美色
黑と咸〻て瀑し洗ふ如し故ふ小瀑江鮒といふ

八月 **小望月** 四日の月といふ **今宵の月** 月の部月見の条ふいつく **駒**

牽駒迎 望月の駒 [江次才] 本八八月十五日ふり朱
きう原の駒 雀院御国忌ふ依て十六日ふ改
め用ふ云〻頭書云信濃勅旨の牧ど五ヶ所延喜式ふ載る
所の一〻天皇南殿ふ出御ありて御馬と分ち取りて御
ちきとぬい建礼門の前の大庭ふ於てこまを牽分〻〻
書ふ云上野九牧延喜式ふ廿八日ト云〻七日甲延久の初ふ
十七日甲髮穂坂の牧廿三日信濃望月の牧廿三武藏勅旨
の牧又十五日信濃勅旨の牧廿八日上野九牧以上十日 延
喜式にこれとりこの外兼平官府十三日武藏秩父の牧廿
八日同小野の牧の御馬ものと貢公事根源 公卿以下次第

ふ御馬を給る、馬の差縄をとりて御前ふまでこゝ拜を、取殘しこる馬とハ引分の使ゝて、次將と以て院東宮ゝまいるべき所々へまわらせるハ、

新集 秋の田の穂坂の駒と引出て とこゝ迄こる世のうへも有りり 御村上御製 金葉 東路とは るゝふ出るもち月の駒ふるよりひゝ坂の関 仲正 拾遺 相坂の関の岩ゝこ踏あらゝ中ゝちいでゝるきりゝらの駒 遺

後撰 一の戸や衣やゝうゝ駒むゝへ土素見合べ

御靈祭ふ

十八日 八所の御靈祭ハ所の名と月の部御靈の御出といふ条注也

紀事 午後ふ神輿二基中の御靈の離宮と出こゝ幸の鉾八本、九鉾と床上ふ建て棒二本四人と以てこゝと持人と幸の鉾こゝふ神宝の内特ふこゝと尊敬ゝ又勢力の人鉾と帯の間ふ立、両手を以てこゝと捧げ行こゝと祭鉾とこゝふ又一人笠の先ふ道祖神の假面とうけて神輿ふ先ゝつ此仮面の鼻長大ゝ俗こゝと王の鼻といふ別當及び氏子供奉御旅所より西のゝこ今出川下烏丸と歴て長者町より室町と過り本社ふ入上御靈の社八京極通筋道橋の乾二町余ふあり、下御靈の神輿も同時ふ拜殿と立ッ鉾五本別當氏子供奉、上御靈の行列の如し神幸の路次京極と出横才町の西より東洞院の西と歴て出水ふ行、室町と下り二条と過り、油の小路の下立賣と上り東へ行、京極より本社ふ入、下御靈の社八京極通大炊御門東北の方ふあり、例祭八月十八日ふあり、

定考 十一日 名目抄 定考逸

ふ讃例ゝ

八事根源 是ハむゝ六位以下の加階とゝ八、かの藝能行跡格勤とゝらゝて栄爵と給ひゝるゝ、上官の東の廳ふつきて事と行ふ次ふ朝所ふついて三献の儀式あり、次ふ安穏の座ふつゝ又三献あり、神頭の花と上卿以下の冠ふきゝて大臣八白菊、納言八黄菊、参議八龍膽、其外八皆時の花とゝて造花ふあらぬ大ゝこと二月の列見ふ同じ、式兵の両省より、諸司の輩の言と選成ゝて列見といひゝて書あゝめて奏ゝゝと凝階の奏といふ、此人々を擇出して定めらゝを定考といふ、

衣うつ

きの部祐の条下ふ出、

金

つふぎ

剛草

和漢三才圖会 山野處々ふあり、高さ三又莖枝花葉並ふ萩ふ似て小く、七月花と開き莢とゝふ、豆の莢のゝとし、中の実黒く其根甚ゝ強し故ふ菊人牛馬と繋ぐべし、俗呼て駒繋といふ、○陶弘景曰

狼茅、其根獸の齒牙のごとし故ふ諸名あり、**革黄草** 和漢三才蒔会 山の麓ふ木の葉と戴生を、狀松茸ふ似て織の外黑く、粒々の皺あり、晒し乾せバ正黑ゐして染革のごとし、裏黄赤にして毛糸の如きものあり、柄ふ鱗甲あり、味微苦し、**五十雀** 志の部四十雀の条ふ注を、**小雀** 正字未詳 和漢三才蒔会 俗ふ云古加良、狀山雀ふ似て小し、故ふ俗呼でふ雀といふ山林ふ多し、頭黑く頰白くして四き紋の如し、背腹白く翅尾黑し、其声滑ふして多く囀る捷輕ゐして上下こえだ〳〵ふ同し、其条ふ注し〳〵あり、

九月

御灯 三月

御香宮祭 九日 神社啓蒙 山城国伏見京町の東ゐ

祭神一座狹神功皇后、○古老云鎮座年紀分明ふらず、昔より垂跡此地ふ坐ス、秀吉城を築くの日、東の丘ふ移し奉るといふ、今の社地、○一書ニ云この地紀伊郡ふ属ス、例祭九月九日、朝日を御出とらふ、十日神事能あり、はじめ祭る所の神九座、神輿も又九基あり、土人本居神と

も今ハ神輿一基造り山二基遠物ふを出ス、○當社ハ延喜式ふ載する所の御諸の神社是なり、鎮坐年月未考ス、書ふ貞觀二年勸請のよし記せり、

後日の菊 紀事 九月十五或ハ十日禁裏ふ殘菊の宴あ

御難の餅 士言 文永八年九月十二日蓮上人相州鎌倉龍の口ふ於て尼難あり、白刃の下僅ふ一命を全うス、今日宗門の徒餐を作りて像前ふ供ずるを御難の餅といふ、

小倉祭 十五日 豊前国到津の社八企救郡今村の庄到津村ふあり、祭る神、中ハ應神天皇、左ハ神功皇后、右ハ玉依姫ニ草創年月詳ふらず、後鳥羽院文治四年、宇佐八幡をこの地ふ勸請しその神秋と分て四時の祭祀を備ふ、尓して宇佐太祝の子族世々祝史とあるその後清末駿河守といふ人到津の城ふ居して常ふ奉祝ス、天正の季九國乱して神社灰燼ちり、祝史の家族も四方ふ流離して到る所をしらず、ふ於て里民一宇の祠を立て僅ふ古跡を存ス、慶長年中細川矣宇佐の社を造営し又到津の社をもふ、宝暦庚辰の年ふ笠原矣更ふ祠壇謁殿を立て祭事のを益旧

きふ加ふ、九月十四日晡後神輿仮殿ゑ遊ぶ、流鏑馬あり、夜ゑ入禊を修し舞楽を奏し、神湯の祝あり、廿日十五日國主家臣をして幣を奉らしめ又流鏑馬あり、晡後本社ふ還御、一説ふ小倉祭或ハ巨掠ゑ作る、山城國宇治の近辺ゑ例祭九月十五日といつり、ちなもとども増山の井その外の書々、豊前の小倉と記をるなし、

木幡祭

廿日、神社、山城国宇治郡木幡ふあり、【雍州府志】祭る所の神正哉吾勝速日天忍骨尊ゑ、是地神第二の神ふして父ハ素戔嗚尊ゑ、後ふ天照太神取て御子ゑふ、この神下土ふ降てゑるゑ故ふ山陵ゑくしてこの天と祭て木幡の神社と号を○例祭九月廿四日今廿日神輿ゑ基内一基田中明神ゑ田中の社ハ同所地主の神ゑ祭る神詳ならず、或説ふ柳大明神是木幡の神ゑ、

金草 菊の異名ゑ【藻塩草】名ゑ東のめぐのゑ草ゑれもゑるきの數ふ法ゑ、

金菊 花濃黄ゑ

蒟蒻の花 時珍曰春苗と生ず、五月ゑ至て長一二尺宿根より自苗生ず、根の大さ芋魁のごし○蘇頌曰莖斑ゆく花紫し、木の實 菓物秋多し故ふ名とす、

柑子 【和漢三才図会】

ゑ木の實とゑ、秋ゑ、

按ずるふ柑子ハ柑類の總名ゑ、【増山の井】

ゑり、今云柑子ハ橘の属ゑり、

衣打袖の霜 【増山の井】再校九月本

月の部ふ衣打袖の霜と別条の如く認め出しゑり、青藍按ずるふ衣打きぬゑのごとくハ八月の部ふ出せるゑ再ひ九月の部ふ衣打とのゑ出せる理あり、全く衣打者の誤ふ

たく霜とゑふ時ハ九月の季とゑるゑ故ふ別条ふ知く書せるハ書写の誤ゑ、【字環】元禄十年【枝葉集】元禄十六年ふ衣打袖の霜と一条ふ認めゑる證ゑをるふ足ずゑ、ゑ深くも考へずして【獨整古】ゆと別条のごく認め又【糸衣】ふそ衣打とゑふ文字さ、省きて出せる皆誤ゑ、【濱の真砂】掛衣の条云露霜と袖ふ重て打ともゑり云

七月 閻魔王

【要覧】閻羅王此ふハ遮とゑふ謂く遮りて悪ゑ造らざるゑ也、

【俱舎論】閻羅王ハ地獄の主鬼官の總司ゑふ【飜譯名義集】殘聲或ハ琰魔羅ゑふ此ふ静息と訳す造悪の者不善素と静息ずるとゑす故ふ或ハ遮とゑふ○七月十日と大

齋日とのひて善事と修し奴僕ふこと暇
とこらせて閻魔堂へ詣でもむるあり

紫葛 和漢三才圖会 紫葛の葉蒲萄ふ似て実と結ぶ又一種野蒲萄あり、

槐の花 三安石譯云槐黄由ふ其美と懐く故ふ三公ふ位ふ、○藕須曰槐木極めて大なる者あり、按ずるふ尓雅云槐數種あり、葉大なり黑きあり、

懐槐と名づく、晝合し夜開くものを宇宮槐と名づく、葉細ふして青緑ふ色めるを槐と云、四月五月黄花をひらく、六月七月実と結 和漢三才圖会 其花未開時果粒の如し、其実莢ふ連珠ふ、中ふ黑子あり、○槐の花木草ふ四五月開花ふ、然ふ増山の井毛吹草

狼尾 等秋ふ生ずるふ穂のうへ、むむ〳〵ふ長ふ出も、

草 時珍曰狼尾其穂の象形ふ秀てふ〳〵ふ、凝然ふ

ふ田ふあり故ふ守田ふ羽の称あり、堅葉穂粒と

ふ粟の如し、

開宝本草 蘭草の葉馬蘭

色紫黑毛あり、

燕尾香 ふ似ふ故ふ蘭草と名く

其葉岐あり、俗ふ燕尾香と呼、

兼三秋物 犬子草 時珍曰穂の象狗尾

故ふ俗狗尾と名ふ、原野垣墻ふ多く生ず、苗葉粟ふ似て穂も又粟ふ似ふ、色黄白ふして実あり、和漢三才圖会 小児ふもとと用て蛙と釣て戯る、こくうせと、ふのこ

草おのれと種のあるものをおもふるとハ誰ふ云阿波国鳴門例ふらず鳴動して止ず、和泉式部此哥と詠て此むこ附の處肉起て鹿とふもものふ所謂著蓋物欤、

圓座物 形丸ふして肥用く軟

青芋 蘇恭曰子多し細長くして毒多し

八月 繪行器 緑雀 八朔 紀事 京俗八月朔日家々の乳母その保養所の女子ふ行器一双と贈る、その行器の中ふ生物ふ赤小豆と点ずしこうし此蕨の花と盛、藤の花ハ白糸餅ふ赤餅の形戻る白糸ふ似ふ故ふ白糸と称ふ深更ふ名く称赤山豆と称ふ、そあらとふハ物ふ点ずるとつくるとの白糸ふ赤小豆と点ずる是あるべきの義とふて深更と名くふ今白童の戯ふ松笠と以て雉子と作ふ或ハ烏賊の甲と以て鷄雀と作ふ或ハ糸繭と以て金灯籠虫の実と括ふ瓢の形とふ又桃仁と刻て松虫と制作ふ是ふの

類ことと玩び或ハ互ふ相贈るこれと賴合とりくゝ○鶏雲
と雉子鷸鳥の類と同じく又蕓坟仁と枝ぶら折て行器と
なふ相贈る京師の俗
これ今日嘉祝の物なり

蕈

和漢三才画会 榎の根上ふ叢生す纖二寸笠黑
色裏白し細き刻あり微香ありて味ひ美なり

九月

榎の實

大和本草 榎木草ふ楸の類なり
今按ずるふ楸の類ふあらず榎を
葉桑ふ似て筋多し冬ふ落葉す実ハ胡椒の
大き秋熟して黄ゑ味甘し小児好で食ふ

七

月兼三秋物 天井守

この部番椒の照
条下ふ出さん

月次

拾遺 水の面ふてる月ハ今宵ぞ
秋の最中なりける 源順○てる月と月次ふ
けてよ

八月

天中節

八朔 拾芥抄 八月朔日の日
の出より以前天中節
赤口白虎隨節減と書て門戸ふ押 陰陽秘法むし大
国の石天中樓よりおいて事あり其人素懷と遂ずるふ

忽ち火神とあらわして天中樓を焼く時ふ后咒して曰八月六至
隨節減云く傳へいふ凶惡の日ゝ陰陽家天中の札と以て良
賤の門戸ふ貼す

天狗茸

大毒あり故ふ
木啄
鳥ゝ

てらつゝき

きの部

天王寺一乘会

十四日 摂州大坂四天王寺
一乘会九月十四日

或ハ十五日六時堂ふおいてこれを修す此堂傳教大師草
創ゝ且本尊薬師如来日光月光の三尊大師手造なり
とかゝり寺説ふ云九月十五日未刻衆僧三綱堂の司楽人
沙汰人堂仕公人出仕を先ッ時刻と三綱及ひ一和尚ふ告て
出仕の鐘一番二番と撞諸役人太子堂へ出仕を太子の
像ふ鳳輦ふうつすその式二月十五日の如し迴廊の下より
六時堂へ渡御あり法事の次第振鉢阿弥陀経傳供万
歳楽延喜楽陵王納曽利悉く終て酉の刻還御

天滿流鏑馬

廿五日 摂州西成郡天滿ふあり祭る所
の神北野ふ同じく九月十五日流鏑
馬あり社家ことと勤ひ鳥居の辺より
天滿橋ふ引て馬と馳て的と射る

出落栗

紀夏
土俗

誤ありしが古へ不孝の子あり、此栗を以又ふ投てこと傷る、因てこゝ栗とふ和俗又と称してゝゝとふ○一説此栗自ら毬と脱して地ふ落ち鼓ふ出落栗とふ、

あ

七月

秋の初風

秋の初ゝとの秋の来ゝとろふ〻むべし、

秋さらゝ

秋の来し夏之、

秋さらゝ姫

朝顔、

顔姫

棚機七姫の内し異名類等ゝと注釈見えぎ、

秋去衣

八雲御抄 秋去衣とハ棚機の布之御傘棚機の具之云 万葉拾穂抄 只秋の衣あゝ秋さりハ秋の来るとゝふ事ゝ、

天の川

銀河 銀漢 雲漢 字彙 天河、箕斗二星の間ふあり、其星河 河漢 長きと天ふ竟を、揚泉物理論 漢水の精ゝ氣発して升り、精華上ふ浮ふ究轉して流る名づけゝ天河とゝふ一ふ雲漢と云衆星とふ出ッ、

飛鳥井の鞠

梶の鞠 紀事 棚機ふ飛鳥井家並ふ難波家蹴鞠の会恒例之上加茂松露拂並ニ枝鞠上足ふの義あり、堂上及び地下の門人多く集る、 滑稽雑談 揣の鞠の事を毎年七日飛鳥井家

もて行ゝ式ゝ鞠の露拂ふ當家門弟の上足の者坪の内へ持参る是二星ゝ手向る心ゝ、

荒鷹

鷹の離巳ふ巣と離れ自ら食ふ時羅と以て捕ふ是と網掛しゝ人又あら鷹とゝふ新ふ捕ゝ人ふ馴ざると荒鷹と

愛宕石火

廿四日 紀事 伊丹池田の愛宕火と月廿三日より廿四日至る云々 摂陽群談 摂津豊島郡池田村ふあり愛宕山八古三の小所謂五月山ゝとゝ山上ふ愛宕権現の社あり毎年七月廿四日の夜種々の灯竈ふ火を点して愛宕石火と名く大坂北の町ゝ山の如し又愛宕の神社有馬郡道場河原新町口ふあり祭る所火産霊尊毎年七月廿四日祭礼あり世俗ゝと愛宕石火と称ス

扇置

太平新録詩 人皆棄秋扇

朝茶の湯

貞享式 風炉を夏ゝ冬ゝ炉ゝ木地の炉縁と春とかせれ朝茶の湯ハ朝顔の例と假て秋の用ゝ茶人の家ふ尋ぬべし○朝茶の湯ハ日中の暑ゝ故と

青藥

との部第切草の条ふ見るべし、

牽牛花

和訓栞 朝顔の異名朝ゝふ花さく

して名く **あらくぎ** 藤袴の条ふ注を、**ありのひふ** 蘭とりくさの部 桔梗とりのこしき **青瓢簞** ひの部瓢簞の条ふ注を、**栗穂** 和漢 三才図会 種類凡て數十青赤黄白黑の色あり早中晩あり皇粟采實、晩粟ハ皮厚く米少し○稌、狼尾草 粟奴各頭字の部 **秋津虫** この部ふるべし、**秋の蝶、秋の蚊、秋の蛍、秋の蠅、秋の蟬** 注釈ふ及ぶまで中ふを秋の蟬ハ蟬の部ふ秋のてふハおとろくるさゑふ **兼三秋物**

朝月夜、朝の月 黒双紙 朝の月八十七日より二十八日まであり、**暁月夜** 源氏初音巻 影もきよき **有明** 八雲御抄 十五日以後の由匡房往生傳 あり云々 青藍云空ふ有て明るといふる義なりとぞ、**秋月** 清光を賞ぜんとふて句作すべし

○ふ秋人の昼寝の種や秋の月 貞徳 **秋天** 上ゆくと下ゆく雲や秋の天 凡兆 **秋風** 楊貴妃物語 論 秋氣動、其風清、 **秋野** 続虚栗 秋の野やゝ至て百川、河ふ灌ぐ逕流之大雨ふ浜渚涯の間牛馬を辭ぜ 炭俵 熊谷の堤きれる秋の水 岱水 **秋水** 荘子 秋水時ふ歐陽永叔の秋声の賦あり人畜之 続猿蓑 **秋の七草** 万葉 風国 松の葉や細きふも仰ま秋の声 秋野ふ咲有花乎指折可伎數者七種花 萩之花乎花葛花瞿麦之花姫部志又藤袴朝貌之花○是を秋の七種と称ま、撫子の一種ハ連俳ニ押ふしてハ夏とも、然ればこも此かのいく久しく盛つて冬迄も有りのゐるふ霜ふ枯て結ぶハ冬ふもあるべし 源氏葵の巻 草枯の籬ふ残るなでしこを秋のくさふぞ○霜の後撫子咲る 秋の山 四機活法秋色詩 秋山如畫更分明、 **秋** 物哀ある余情ふ作るべし○秋の夜を打ぐらぐらとあり丸み 芭蕉 **ありあけ**

さうまぎてこちらくる梨とをきこゆきこ人のもとふ
やるとそこ「あきうしつゆもぐろうある梨あれど千代ありめ
と人はいまうり○梨ならへと
忌てありのこといふるもぐし、

八月

安濃津祭

社說曰伊勢國安濃郡津城の南ふ八幡宮鎮座、往古
の二神殿中ふ寄坐も相傳へ建武中足利高氏卿、一国毎ふ八幡一社を
置んと欲し、伊勢と以て始とも、乃チ宮殿と千歳山の上ふ
造り、石清水の神を勸請し、源家の興隆と祈る、旧記ふいふ
永正年中當国兵乱ふよりて、神殿荒廢、僧願海募りて
こ国中と化して再興を、時ふ享祿二年、又數十年の後顔
発して僅ふ存も、實永壬申年城主田獵して、ふ至りて、
ふ祠と林樹の間ふ見る、左右何れの神ありともいる者ふし、村
老とめりてこと問ふ言らく、足利將軍の建る所なり、即
心願と発して土木とあつめ、正殿拜殿神庫、華表を造る、寛
永十二年初めて祭儀と行ふる、同廿一年垂水藤浮の二村三
百石の地とつけて昌泉院と以て別當とも、今寒松院と云、
いまいく八山上よりて千歳山八幡宮と称せり、今の地ふ遷し
てより、安濃津の城と守と以て安濃津八幡宮と号も、乃チ

一志郡垂水村ふ屬も、藍津の城の街坊、
八奄藝安濃一志の三郡ふ跨りてとらく、

秋の宮

東宮を
恭皆宮
といひ后宮と

鯰卷

の条ふ出、

藍の花

葉蓼ふ似て七八月洲
秋の宮とらく、
紅花と
ひらく、

蘆の花

說文曰其花風ふ遇て吹揚れ空ある
のごと、地ふ聚まれば絮ひとし、

茜

堀

時珍曰此草東方ふ在て少し、西方の多ふもつも、則
西草と以て茜とも、十二月苗と生ず、蔓延ること數尺
方莖ありて中空し筋あり、外ふ細毛あり、數節節
毎ふ五葉、面青し背緑り、七八月花とひらき実と結ぶ、和
漢三才會会　茜ハ赤根ふ以絳を染べ、

通草

蘇頌曰通草
の実長さ三
し、近世蘇方木と以て茜ふ代ふ、
四寸核黑く、瓤白し、こもと食へば甘美、南人謂て燕覆子
ともも、或ハ鳥覆子と名く、七月と過てこもと来る○時珍
曰通草ハ莖ふ細き孔あり、

栗引

取收と
両頭ふ皆通ず故ふ名く、
引と云、

溢蚊

滑瞽
雜談
八月の溢も蚊肉と割と云
世話ふ、近来秋ふ許用も、

鶺子鳥

和漢三才會会
名阿止里此鳥常

ふ山林ふ棲不時ふ群飛〻〻寺院の叢林ふ出る事ひり、百千群と成て天と蔽ふ状ち雀ふ似て大く背ち頭頸灰蒼ふ〻〻柳色の斑あり、頷黄赤ふ〻〻背白ふ〻〻胸碧赤と帶ふ黑き斑あり、日本紀天武天皇七年鶺鴒島ふ〻〻敏ひて西南より東北ふ飛べ、

江鮭 鱯 鱣 草魚 鯇 鯨 和名阿米 こくう 琵琶湖の名産ふ、大きなる者三尺ふ過ざるものあり、儼鰯魚のごと、江鮭とハ則江湖の鮭ふ、河鰯魚よりハ脂多し、湖水ふての佳品ふ、秋八月雨水河ふより、湖中ふ流れ入るとき多く川より上る、築と構へ或ハ大なる攬網とこれと取る、

新走 新酒の尤早きを云、

秋の暮 湖東問答 去来著 問云春の暮ふ對して暮秋と心得る作者多しとなり、尤秋の暮ハ秋の夕間暮なり春の暮ハ暮春の事ふ侍るゆゑ答云春の暮ハ暮春ふ又一片ふ限るべからず一句の趣ひよりとしふべきと文字の数もてくるき句あれバ畧して秋の暮とらふべ、近ころ下五文字ふ秋の夕とよくる句まあり、秋のゆゑんといそねバそこぐ見べ作者心得べ、

九月

温酒 御光明寺殿下御抄 九月九日ハ寒温のさゝひ身肉ひゝるゝ時ふ此温酒を飲ぐ病を得ずそこふより酒と温め用ふるよし、世諺明答ふと引ゝり、

栗田口祭 十五日 増山の井百川橋の東八大天王の祭ふ祇園牛頭天王娑竭羅龍王の女頗梨女とめとりてこうとゝるる八王子まり、これ暦ふいつる八将神ふ、

穴織祭 十七日 摂州豊嶋郡池田村民家の北ふる山上ふあり、摂陽羣談 穴織呉服の両社其間僅十町ばかり、日本紀 應神天皇十四年春二月、百済王縫衣の二女を貢ぐ真毛津といふ、同三十七年春二月戊午朔阿知の使主都加の使主と呉ふつかわして、縫工女を求めむ阿知の使主ふ高麗国ふ至りて更ふ道路とまどを道と知る者と高麗ふ乞ふ高麗王乃子久礼波久礼志二人と副て導者とせ、こゝとふ入りて呉ふ通ずること得ざり呉の王工女兄媛弟媛吳織穴織と号ふ、同四十一年春二月午朔阿知の使主ふ呉より筑紫ふ至るの時、胷形大神工女を乞ふ故ふ兄媛を以て胷形大明神ふ奉る今筑紫ふ坐る御使君の祖ふ既ふてその二女と率て摂津国ふ至

る武庫ふ来りて天皇崩ぜゆくふ及びも大鷦鷯の尊仁徳
ふ献るこの二人ホの後今呉の衣縫蜘屋の衣縫是なり○
仁徳天皇七十六年戊子九月十七日ふ縫媛二人も去めひ
てつくふこゝと祝ひ祭り縫蜘の神となる毎年九月十七日
十八日に穴織呉織両社の祭礼なり、和衣荒布の神供備
てゝこゝと神衣祭と称ふ、社家の説ふい應神天皇春二月、
縫媛と呉ふ求むといへり、秋の花 ことゝ書のこゝとふるき物ふあり、
秋の花 いづ不審、言の休ふるべきの
よ〜藻塩草ふいへり、秋〜久の花 菊の異名とゝ、異名
草ふいへり、分類 藻塩草ふ「ひとぎふ
を南ぐるさゝむ」枯るまで、野ふ残ってゝ秋〜くの花、
是吉き物ふあり、或説ふ菊と秋〜くとよむとゝ今按
ずるふ埃嚢抄三五聖一國師重陽の佛事の時、ひき草
の花と北の籬ふ植てノントくくと南の山と見るとゝあを
しゝとゝ是ハ古文前集ふ陶淵明ゝ採菊東籬下
悠然見南山とゝ詩ふて、東と北〜採と植とも〜傳
寫の誤あるべ〜埃嚢抄ふあるふ藻塩草 あづきひく
の秋〜くの花も誤ってふく秋草の花の、赤小豆引

大抵土用の中種とあ〜 蒔九月これを収む 芦の穂絮 孝子傳閔損の後母生處の子ふハ衣を
ふ綿絮を以し損ふハ芦花の絮を以て父ゝを出さんと
す、損ゞ曰母在せバ一子單あり母去らハ三子寒しと遂ふ
止む、烏拆 本草別録烏拆ゝて毒あり 多識論烏拆今按阿末保志 秋
の葉 御今 のあるあり、秋の霜 初霜ハ冬なり、朝寒 御今 朝寒
秋〜さむき朝寒きゝ、朝氣さむ〜ゝづれも冬〜、網代打 藻塩草網代ハ各
九日の前ふ打初て宇治の網代人供御ふ奉るゝ、秋過て、秋暮て、秋
ぞ隅る、秋ふ後る、秋より後、秋の別、
秋の名残、秋の限り、秋と惜、秋深き、
秋の湊 注ふ不及 七月 さゝがふ姫 棚機の異名七

蠶の内〻ちゝがふとハ蜘のことゝ

異名分類 開元遺事ニ、蜘蛛と以ことゝとふきゝ金盒の中ニ納め曉ニ至て開きて蜘蛛の糸の稀密あると視て以て巧の多少を得うとき云ふ長明四季物語ニ、姫蜘蛛とたゝてゆるゝもの、其つくもゝ或ハねゝびの糸ふいを引ぬると晶らゝて、私のねゝびゝるゝ

索

つゝとゝるとゝあるゝべゝ云ふ、これらふるゝしうあるゝし、

餅 先代田事記 七月七日織女とまつる又牽牛神あり、その祭供ふい索麪と以すゝ是糸織の象ニ表す、並ニ

粢麪と以をゝこれ鋤耕の象ニ表ゝ 十節記 昔高辛氏の女子七月七日ニ死ゝその霊鬼神とありて人ニ癘ゝ病ゝむ其存まる日麥餅と好めり、故ニその死ゝる日ニ至て索餅と以ゝとゝ祭る、後人ゝ的索餅をゝゝゝ癘疾と惠ゝ、

刺鯖 いの部生身魂の条ニ出ツ、

澤桔梗 天和本草 莖大ゝて葉ゝゝく、巻丹の葉ハ整ニ行るゝ如ゝ花ハ桔梗ニ似て淡碧色桔梗より小ゝ水辺ニ生ゝ秋花とひらく根まゝゝ桔梗のゝゝし又浮蕃の花ゝも沢桔梗と

五味子 本草 五味子皮肉甘く酸く核辛く苦く都て鹹き味ありて五味具る故ニ名く、春苗と生じ赤き蔓高水ニ引く、其長さ六七尺葉夫ア田く杏の葉ニ似ゝう三四月黄白花と開く、蓮花の状ニ類ゝ七月實ゝる莖の端ニ叢生ゝ、豌豆許の大さのゝゝし生ハ青く熟ゝ赤紅紫

いゝ同名異物ゝ、

さゝれ萩 葉の細ゝるゝを さゝれ萩とゝふ、

兼三秋物 哉生明

二日三日の月とゝふ哉ハ始ゝ前の月大ゝるゝきハ二日ニ明と生ゝ前の月小ゝるゝきゝゝ三日ニ明と生ゝ、

哉生魄 十六日の月とゝふ 尚書 望後月明死して魄と生ゝ、〇月の照ゝゝる所を魄とゝふ、

佐々良衣壮士 月の別名ゝ 萬葉 山乃葉乃佐々良衣壮士天原門渡光見良久之好藻、

盃の光、盃の影 御今 盃の光ゝ月ニよゝ秋ゝるゝし、面の月とゝふ

さゝやけき 秋の月とゝふ、

君遷子 ふの部蒲萄の条下ニ出ツ、

狹牡鹿 和名抄 牡鹿和名佐乎之加 和名正濫要略 顕宗天皇紀ニ牡鹿北ニ云左鳴子加和訓の

狭雄鹿とて狭ハ狭山狭野などゝていふ詞なり、○萬葉ふ小牡鹿と書るハちひさき鹿といふなり、

てふ猿酒 猿菓と取て山中樹木の虚或ハ嶽巖の四ふる所ふ貯へ置き、數日の後熟して酒の如く味甚甘美くこれと猿酒といふ、獵者往々見て竊し食もの、

八月

三日 泉州府志 泉州瑠璃常楽寺、天神の像ハ菅神太宰府ふ在せし日自ら作りたまふ七軀の像の内也とひつくふ、長徳二年或ハ延喜年中正月海濱ふ漂ひ来るより此所ふ安置ス、或ハつふ昔塩穴の郷湊村ふあり故ふ塩穴天神と称ス、中世北の荘ふうつりて勸請ス、文明二年菅原為長郷の記ニ云、和泉国毛須深井、草部、土師、向井、塩穴、高石ハ菅家の氏神、天の穂日の命以来の旧領なり、為長卿の真跡五条殿ふあり 今按るふ塩穴天神ハ天穂日命ふて後ふ菅丞相と合せ祭る、○例祭六月十三日と夏神楽と、八月三日と秋神楽、ことの日恭詣多し、神輿、堺七道濱ふ行て東島へ渡御、即日還幸、先板の諸

三五の夜

三日ちかきまて、今ハ三日ちかきまて、

つの部月見の条ふ出ツ、

西院祭 廿八日

春日の神社ハ洛西葛野郡ふあり、四条通西の上手四町計り云云 西院村の西平林村の中ふあり 山城志 按るふ西院の号中頃此所の西ふ斎院居ありて故ふ此辺の名として斎院と書しを後誤りて西院ふ作る歟、○例祭八月廿八日神輿二基あり、其一ツ住吉の神輿ハ住吉の社同村の西ふあり 紀事

拓榴

西院八幡祭とふハ未詳

、事類合璧 榴大くして盃の如し、赤色ふ黒き斑の點あり、皮中蜂の巣の如し、黄膜ありて子ハ人の歯の如し、淡紅色、亦潔白ありて雪の如き者あり、潘岳賦ニ云 榴ハ天下の奇樹、九州の名果、千房同蔕、千子一核の如し、飢ゑ渇ゑ癒し、醒ゑ解し、酔ゑ正し 史本草

牧傳 元魏安德王延宗李祖收と納て妃とす、後ふ帝李祖收ふ宮ふ幸ス、妃ハ母二の石榴と帝の前ふ差ひ、人其意を知らず、祖收云、子無多ければ欲ス、○今俗一毎神ふ祭る人、これふ備ふる榴と以てまるハ千子多子の義ふとるなり、其の形ハ夏のことの部ふ見べし

の花 本草 三七春藸と生し、夏高サ三四尺葉菊艾ふに似て厚く嶮山大あり、莖ふ赤き棱あり、夏秋黄花をひらく、蕊金糸の盤紐のごとし、愛すべし、氣香ばしく花乾くと紅い紫ごとし、苦黄絮のごとし、

烏鳳 和漢三才圖会

今云三光鳥近年多あり、紺碧色背の上ふ赤と帶、腹白く羽黑くして微赤く、項の毛乱起て鳳と冠あり、眼大ふして臉青く其尾長き者一尺半計中ごろ廻轉して其音清越日月星と言ふ如し、今三光鳥と称す、其雌雄ふ似て浅く尾短く、俗ふ性勇悍雛と育る時ゆゑ鳥鴉の来るときハ羽ごと振ひ鳴と拒む或ハ其眼と啄く其巣翰の如く、両端ふ口あり、表より入裏ふ出、尾の長きを以然なり、

鮎 ぢの部落 鮎の条ふ出、

九月

坐摩祭 廿三日

坐摩の傳記ハ夏のさの部、坐摩の御板の条ふ注ーしたれハ爰ふハ畧す、例祭九月廿三日、ことと相嘗八十島祭と号て、新嘗の神事なるふ、

逆髪祭 廿四日

社説三云江州滋賀郡琵琶湖の南、逢坂山關の清水大明神ハ延喜中四の皇子蟬丸の社、蟬丸双眼盲ゆゑ故ふ勅して延喜廿二年壬午春三月公卿大夫蟬丸と供奉して逢坂山ふ左遷し奉て、各涙雨を滴て帰京ま、残て留る人白川の邸則長基經古屋の美女師輔云ふ爰ふ於て姉の宮深く蟬丸をもてひ密ふ禁闕と出て相坂山ふ来て蟬丸と共ふ花月と清賞し、旅駅の山岩川陸を偏歩して雲鬢縺髪顛倒て國人御名を逆髪と号く、天慶九年廿四日逝去しぬ、故ふ毎年九月廿四日の祭祀今ふ至て怠ることなし、姉覺去の後蟬丸とともふ一社ふ合せ祭ると云ふ書藍云蟬丸と延喜才四の皇子及び盲人とゆゑハ女説なるハ、後撰集のゆくもの、るもとまるる哥の詞書ふ、ものきゝの人とゝとゝ有ゆゑ〳〵と諸書ふ論あり、さるしのるべし、水戸學士の一説ふ、唐の南朝元帝の諱ど延基とゆゑ、延基の三男樞祿の時より癡ゆゑ、其上瞽ゆゑハ遂ふ是と相関とゆゑ所ふ捨ゆゑふ此子の名と彈兒とつけ、ゆゑハ幼年より琵琶とゆく彈ぜり故ふのく付〳〵今此事ゆゑり日本の蟬丸の支と考ゆゑふ延喜と延基とキの音同じ、彈と蟬と字の形相似ゆゑ又相関と相坂の関も相似ゆゑ又延

喜の御子と捨ゑと彼是同意〉彈児の事ハ古史考巻の三十一ふ〻ゑ〻ゑ〻と云〉

俳諧歳時記 接ぎゑふ逆上ハ坂上の誤あるべし、寺門の説ニ云、江州相坂山関の明神二所一所ハ坂上ふあり、一所ハ坂下ふあり、と云く元坂上の社おごいけ、と誤りて種々の説と設けくるあり、又云三所とも ふ道祖神と祭りて以て関所の鎮守ともて、朱雀院の御宇蟬丸の霊と當社ふ合せ祭る、依て土俗蟬丸の社と称を下の社の前ふ井あり、関の清水と名く、清水明神と号、祭礼九月廿四日上下の社同日〉

神輿二基 云 この説穏あり、

皂角 時珍曰皂莢樹皂〉故ふ名くもの、

廣志ふ云ふと鷄栖子とらく〉樹の高さ大〉巣槐の葉の如し、瘦長して尖く枝の間ふ刺多し、夏細き黄花と開く実と結ぶ、三種あり、一種小ふして猪の牙のごとし、一種ハ長くして瘦薄く拈燥て粘もて其樹刺多くして上りかゝるもの多し、

櫻紅葉 櫻のもちゐ

同物

珊瑚 仙蓼 珊瑚仙蓼二名

園史 兼山茶の如く小〉夏白花と開く秋紅の実と結ぶ珊瑚の如く纍々たり、

大和本草 珊瑚葉ハ橘の如く及び莽州の如く刻ミ缺あり、莖長く節あり、寒と日と長る陰地ふ宜く、本草綱目雜草の部百両金ハ此と同物ふ、

和漢三才 仙霊草 字彙云、

栃栗 江東すき栗と呼て櫪栗云、

七月

北野御手水 六日 山城國葛野郡北野天満宮ふ御帝闕より北ふ〻くるを以て北野と名く、

紀事 七月六日 この慶もゞめ朝日寺の地〉北野社梅院御手洗と神前ふ供を、松風の硯ふ穀の葉と添てゝ供を、松梅院より幼年 北野煤拂 七日 或ハ故障あるときハこの義あり、

雍州府志 毎年七月七日北野社内外の庫ふある所の神宝と西の間及び幣殿会所ふ出しこれと曝もそ、その間ふ宮仕内外の陣の煤と拂ふ、

乞巧奠 名目抄 今の俗キツカウテイト云ハ不宜言也

乞巧奠ハ人々其業ふ巧みあらんことを願ふ意なり、

開元遺事 七夕ふ蜘蛛を以て金盒の中ふ納て蛛ふ開て蛛の絲の稀密を視巧の多少を得るとも、

乞巧針、乞巧瓜 荊楚歳時記 七

夕ふ婦人七孔ふ針と穿ち或ハ金銀鏹石と針とを瓜東を庭中ふ陳ね巧みをバふ蟷子あるて瓜の上ふ網ふる時ハ巧と得

九枝燈

漢武内傳七月七日帝宮掖の内と掃除し雲錦の帷と張九華の燈を燃き西王母降

公事根源

禁裏御燈籠

燈臺九本おの〳〵灯あり云云

滑稽雑談當世ふおいて禁裏へ御家門方より燈籠と献ぜらるる奇巧金銀を鏤り花鳥人形ふの美と尽せり是と南殿ふ懸らるるいつのころより始まるおや尋ぬべし十四日ふハ禁門を敲して賤の男女と庭上ふ入て是と拜せしむ

切子燈籠

和漢三才圖会一種岐里古燈篭聖異祭ふふこれと用ふ飾る所紙繒甚華美し

逆の峯入

紀叟七月の初大峯の修験道山伏の客僧大峯より京師ふ出て大なる法螺と吹き自ら金剛杖と拏戸々と遍歴して奇料と乞ふ或ハ前鬼木鉢或奈良硫黄ふの物を且那の家ふ贈る凡峯入の法ハ山汎熊野より大峯ふ入是と順の峯入らふ當山汎大峯より熊野ふ出是と逆の峯入といふ○春の部順の峯入の条がよりしるべし

○貞享式峯入の類も順逆とひて春と秋と断れど今の俳諧の省法ふおらバ秋季ふつれていとゝ春ふ秋と名ふ

木曽開地

秋〳〵春季ふつまてハ春とあひべし

ふよりて名る

清水千日詣

日ふ至りて京ふ酒ふ名あるべし

師清水觀音ふ諸人參詣を夜ふ入て參詣殊ふ多し今日の參詣平日の千度ふあたるとつふ江戸淺草の觀音と同日ふて參詣多し

經木流

十六日 摂州四天王寺ふ俗四万六千日といふ

東僧坊の前ふ亀井の水ハ白石巳手の水と号をむかし白川法皇の上東門院當寺ふ詣し時其水盤ふ亀の形あると見て白石玉手の水と以て亀井の水と詠ぜられ其号の起るところあり

新古今濁ることなき亀井の水とむもとひけて心のちりとゝぎつるかな○七月十六日世俗經書堂ふおいて經木の表ふ法名を記し此水と手向て霊魂を慰と振陽群談ふもこれを昔ハ月毎ふ六斎の日講堂ふおいて經と誦し參詣の戒名と名帳ふ記し回向せしらく和

泉式部春詣のとき、名と名簿ふもるるとて詠ぜる哥梓ら
こふるへしといはもそねどうてあきこ身の数ふいりぬる今の
經木にこの名

桔梗 時珍曰桔ハ結ぶ其草の根結實
薄の遺意也、 きちかう 和名抄 桔梗 和名阿里乃比布木 和漢三才圖会 山野及び人家ふ多くこれを
種ふ紫碧の者と桔梗の正色とす又白花あり紫白相
交る者あり、單葉あり八重あり、 古今 物名 秋ちかう野
ハありふるりもやうつ四のおけるくさ葉もいろふそうゆく友則

桔梗 大和本草 本草四十一巻寵馬の附録よのもと名
魅蜂又蠱とつく立秋の後夜鳴くイナゴふ似く
あり、角あり、頭ハ切るる如く尖るあり俗ふつづさも
ふくとつふ西土の方言クロッヾとつふ古哥ふきりぎくもや
のるハ是こ秋の末まで有く故ふ古哥こ霜夜ふよめり、○
今俗ふつふきりぎくもハ蛩雖し 家持集 きりぎくもつりさせ
こハ鳴ふ也どむらきぬ物こる我ハきくいまも○華つ虫ちぐ
ろむし、すげの庭鳥ホの異名あり、頭字の部ふおいて淺、

兼三秋物

銀兎 月とつふ、陰陽節云、 ぎんと 清露冷侵銀兎影 **既望** かの
さよひの条ふ併世詣ス、 既生魄 既ふ魄と主ぞる十七日の月
し、月の照ざる所と魄とつふ、 **暉**

素 文選註 月光し、 **金波** 前漢書 月光し、 **霧** 不推孫炎註天気
下り地ふ應せざる
と雪とつふ地気天ふ発して應せざると霧とつふ 和漢三才
圖 雪霧の二種雪霧の変ずる者、秋月盛んなりて其降
や朝と夕とふあり、甚ど多きこと紀ハ菜蔬草木凋こ枯ろ
こ霜雪より烈し 藻塩草 霧ハ春夏も詠ぜし秋ふ
限るべうもぞとつくどと連俳ふ霧とむりハ秋こハ雲御抄
の如く春山の霧ふまとうる鶯又夏霧とる万葉ふあり
とこ、俳諧とても春夏の季ふ結ぐ春夏ふわるる
べし、○朝霧夕霧別義ふ霧ハ山の部ふ注、 **霧**

の笆 霧の立へどてこ
とはぬきといふ、 **霧の海** 野原ふ下ちる霧
ごとくこも の海の渺々こそ海の
るといふ、 **霧の香** 御今 霧ふ白ひのあるものこ草
とつひて別ふさき物あるふいあらぞ、霧ふ物ふも嫌ふ霧の香
の香とふきこと詩ふを作るハ只秋霧のこと、 **霧立**

人

八雲御抄 あこと てくる人をいふ、

霧雨 霧の深き所ハ雨の降ずして、これをいふ、

木淡 樹ハ不熟して美き材を木淡といふ、

伽羅樹 一名透 微材形長く四く微失り肉中沈香の理の如くふして味脆く美し、

錦馬 鹿の異名なり、

八月

北野祭 四日

二十二社註式 一条院永延元年八月五日、祭礼をはじめて官幣あり、後冷泉帝永承元年八月四日ハ定らる、五日ハ母后の国忌ふりてゝ

拾芥抄 北野祭今ハ四日、元八五日先例大臣より始て納言参議より至て大頭と称ス、催一中あり、料米六十石、○祭神三座中ハ天満天神東ハ中将殿、皆三品吉祥女、菅家の北の方、都の西南吉祥院ハ住ひ、西南吉祥の御名なり、鷺水記曰、此祭甚美麗ふして神輿下ス貴の西御旅所ハ移し奉る、其間廿余町の地ハ蜀錦と敷き、供奉の輩綾羅の袂とつらゝ、管絃の声雲井ハひゞく

礒 四手打 綾巻 宇林 直衣打 ちゝろ打 小春と持

ようゝ富社の古記ハあり、

とゝふ古人衣と持ハ両女相対して一杵と執て、米と春ぐ如し、然るハ今易るハ卧杵と作る、對座してとゝと搗つ、

其便を取る 和名抄 唐韻云礒和名岐沼伊太 搗衣石ハ作砧 搗衣杵和名都知 ○綾巻衣と巻衣ハその緒と巻て打ハ ○四手打 八雲御抄 ちきりふ打ハ衣もて打ともよめり、

銀杏 實 ○ちゝろ打ハちゝろハ椎の名ハ椎もて打とゝふ、

時珍曰銀杏其巣鴨の掌ハ似ゝ因て鴨脚と名ク、宋の初始て貢ス改て銀杏と呼其形小杏ハ似て核の色白きハ因て今白果と名ク、

木の子取 たの部茸狩の条ハ出ス、

秋 き

啄木鳥 一名てらつき 時珍曰此鳥樹と剉裂て蟲と取食ふ故ハ名ク禽経三云ハ小ス る者雀の如く大なる者鴉の如し、面桃花の如く、啄足皆青色、爪剛く嘴利く錐のごとし、長さ数寸舌味ハ長し、其端ハ針刺ありて蟲を啄て得るとき八舌を以て鈎出しこれを食ふ○昔王造ハ天王寺を建し時、群鳥来て寺の軒を啄き損ス故ハ寺啄と名ク、守屋ハ怨矣鳥ゝ

菊戴鳥 和漢三才

晶会 状眼白鳥ハ似て背翅青緑色頂の上ハ黄毛花の如き者と戴く故ハ名ク、

九月

菊

花の宴

九日 青藍云、俳諧歳時記ふ周の穆王三月三日山にて、法花の秘文を釈尊より受て慈童ふ傳へ、慈童八百歳とゝもちゐ魏少年のごとし、魏の文帝の時名を彭祖と更て文帝ふ此術を授け奉る文帝この術を受て壽七十歳今の重陽の宴是ゝ此説安談の甚しきいへべし列仙傳ふ彭祖八帝顓頊の玄孫姓ハ錢名ハ鏗周ふ至て八百歳ありて衰老せず、穆王召して大夫とせんとす病と称して與らず、後遂ふ流沙の西ふ往彭祖の傳かくの如し慈童より事と以て附會まるゝれハ元野史小説の詩語より出ず菊花の宴ハ秦漢以来より既ふまり云論ひ〳〵り實まて妄談附會の甚しきいへべし〳〵もつくゝめ出べし

本朝文醉ふ現賜群臣菊花詩序云紀納言揖故事於漢武則赤黄掛宮人之夜尋舊跡於魏文亦黄花助彭祖云々又世諺問答ふと魏文の説と引たるハ古くより いいつたへる妄談まべし〳〵九風雅の道ハ事の虚實かゝ いつそ其趣のもつ〳〵きふ隨ひをさもくとゝ玉ひとよ〳〵 まゝ〳〵ハ附會の説といとゞとちふ捨べきふ もあ〳〵ひ〳〵ちの部重陽の宴倍うべし

菊箆

公事根源 御前

ふ菊箆とおく〳〵云 金文ちの部重陽の宴の条ふ云ふ

菊花の酒

高ふ登る 続朱甘の袋 付諸記 汝南の桓景費長房ふ隨ひて蓬萊ふ遊ぶ数年長房謂曰九月九日汝の家中災あらん急ふ去べし家人各絳袋と作つ茱萸と盛りて臂ふ繫て高きふ登て菊花の酒を飲べし此禍ひ除くべし景言の如くし舉家山ふ登る還て見るハ雞犬牛羊一時ふ暴死と長房ことを聞て曰此ことふ代るべし今世の人九日高きふ登て酒と飲婦人茱萸の嚢を帯蓋此ふ始る

菊の節句

栗の節句 菊酒と飲栗と

親厳朋友互ふ贈る故ふ菊の節句栗の節句と称

菊の着綿

御湯殿記 九日の夜ふ入て御殿の南階ふ小菊と多く植其菊ふ赤白其又の染わたを九ぬ菊花ふ作て枝々ふ付るゝ今日綿と菊ふ返ゝらるゝとい云々○青藍按ずるふ菊ふ着まるゝ云くハ菊の露をもふ移しとり面をぬぐひ老せぬ薬せ〳〵ぬ〳〵べし

後撰集 もゝとり ふまて侍る時九月八日伊勢ゞ家の菊ふもとを着ふつゝとりとハ又の向と

とりとてうもとて、伊勢數ちぐ君がよりへとのむ（つふなぐ
る病のつゆならめん、かくし 藤原雅正、露ぐるまをぐる宿
の菊ふ〜ぐ、花のひらくまやいくしまふるらん 紫式部日記 九日菊
ぬぎとて兵部のおもとのそきてこを殿のこゝのとりわきこと
ようこゝろのこゝい捨ぬ〜とのこゝまをせつるこゝあるこゝ、菊のつゆ
わるゆむうふ紬ふとて、花のひらすふ千代ハあらん○此外
源氏 枕の草紙などもこゝこゝ今禁中そうく菊
の綿をつゝうてたのゝるこゝいゝのちのこゝわるる菊し

襲 くの部九日小 菊花時珍曰陸佃埤雅云菊本
袖の条ふ注ス 蘊より作る蘊〜鞠ふ月令

云九月菊黄華あり華事此ふ至て鞠ふ畫く故ふこれを
蘊とのふ 和名抄 菊 和名加波良毛木 三云加波良於波木 和漢三才圖会本綱
よ菊九百種宿根より自生も其莖葉花の品々同ら以
千葉單葉心あるにより心なきあり黄白紅紫間色浅深大
小の別あり其莖株蔓紫赤青緑の殘のり其葉大小厚薄
尖柔の異あり又夏菊秋菊冬菊の分ありの○百夜草 星
見草 金草 ぐさこ草 千貫草 齢草 山路草 少女草 弟
草 草の主 殘草 弟花 花の兼 百菊 握々菊 醉楊菊 大

白大槃若 羽草 隠君子 女花 鞠花 秋の花 秋〜くの花 契
草 蘓我菊 承和の色 殘菊 野菊 ぐらよりぐ 各頭字の部
ふわちて注ス

閑月 古今著聞集 延喜十三年十月十三日
ぐるぐるべし 御記云仰侍臣令新菊花入三番
相撲勝負以甲時各方領花参入一番文自仙華二番自滝口次第進花
立庭中一番種花以咨洲形二番裁文取立御前左衛門督藤原朝臣
候御前傅作勝負十番勝方菓中 **菊の淵** 古今ぐ
鮮舞選進菊中各四本裁西方庭 宿の菊
ちらつめけふごふ幾世
つもりて淵〜ちるるし

金目貫 百菊の内ぐり黄、き
て万重ふてし

秋

牡丹 大和本草 秋牡丹外 農圃六書ふこと品 と嗅バ臭〜
云今試るふ然ア春分移し植九月中菊ふ先こ開く
紫菊ふ似ぐり初め深紅ゝて後浅紅ゝ中 碁 鞍馬貴布禰
摂州箕面又西州諸山ふ多ぐ本邦ふ昔ようある草ぐ〜
○京都の俗ぐ菊こ

貴船祭 九日 神社啓蒙 山城国愛宕郡鞍
馬の北一里むぐふ祭る所の神二座高龍の神是水徳
の神ゝて別雷の神宮ア二の壇社ぐ 神代巻 伊特諸尊

訶遇突智と斬て三段となる其一段八高龗となる、[二十二社註式]

貴船の社ハ船王命と高龗となる、[改暦雑事記]九月九日小兒咳逆疫して死亡もること多し仍て相者をして卜せしむ云貴船の神の祟なる所なりと云ふ於て弘仁二年[百六代淳和天皇]秋九月九日疫と追しむ、今貴船の神輿を撥して洛中を振るひの是この遺意なり○余してより以来毎年九月九日小兒相集まりて小さき神輿を作て、貴船祭と称して市中を振るひ廻ると、北山祭[廿日六所の社]

八洛北鹿苑寺の西南衣笠の岳の艮平林の中ふかく祭神詳らかなる、例祭九月廿七日[名勝志の説同し]北山天神祭九月廿六日、この祭殿ふ於て三番叟あり、正月廿七日六所明神ふ猿楽ハ[類聚国史]北山の苑寺ふ相隣る故ふ[類聚国史]北山の[松尾等持院鹿苑寺]等持院村祭と称す

神社ハ大北山村ふあり、天長五年八月天地震災わらんとす、丁丑ふ北山の神ふ祈る、[名勝志]北山ハ高槁の西北四五町ふ

ハ高槁ハ花野平野の間紙屋川の槁く洛陽より成変のこと北方ふ[高槁]ハ[名勝志]ハ村名ふ[高槁]ハ[名勝志]ハ村名ふ[高槁]ハ[名勝志]ハ村名ふ

とどまると、古より北山と称を疑らふ村名ふ

○毛吹草ふ北山祭廿五日と記諸説迷ふ異し、金柑

時珍曰金橘実と結ぶ秋冬ふ黄熟す、枳殼[本草啓蒙]枳ハ橘の如くして小く高さ五七尺葉橙の如く刺多し春白花を生ず[大和本草]枸橘ハ[本草啓蒙]枳名カラタチといふものなり其木もり多き故ふ人家植て籬とす

盗ふ備ふ昔より國俗誤て是を枳殼枳實と云ふ非なり、

寺千部

十五日より　明顕山祐天寺ハ江戸麹町ふあり、

廿五日まで　開山ハ祐天大僧正例年七月十五日より廿五日まで阿弥陀経千口修行この節参詣多し、

夕顔の實

○瓠、長きこと越瓜の如し、首尾一のごとし○懸瓠瓠の一頭ふして腹あり長き柄ふる者、○柄ふくして円大形ちの扁き者、○壺瓠の短き柄有て大腹ふる者、○蒲蘆壺の短き腰の者、○其形状各同じからずといへども、苗葉皮子性味ハ一ちう、右本草時珍ふ説し、○乾瓠ハ瓠畜と云生ずると日ふ[注]又塩とい〳〵ふりと

うけおきて日ふほまものは、

七月

祐天

兼三秋物

夕月夜

の大小ふたりて朔二日の夕より出現あり。事今明く十日あまりの頃までも、暮に出るわどの月と夕月夜に讀ふらしい。

弓張月 【釈名】弦ハ月半の名にて其形一勾曲して、一方ハ直くして弓の弦と張が如きなり。

夢野の鹿 摂津国風土記云、雄伴郡に夢野あり。父老傳云、昔刀我野に壮鹿ありて、その嫡と此野に居るその妻の北鹿渡路国野島に居る彼壮鹿屋野島に往て妻と相愛て既に壮鹿来りて嫡の所に宿る明旦壮鹿その嫡に語りて云、今夜吾背に雪ふりおけりと見きと、又もときき草生ずとき此夢何の祥ぞ、その嫡ときく夫の妻の所に向往べきを悪み乃詐て相ひて云、背の上に草生ずハ矢背の上に射るの祥又雪ふるハ白塩穴に塗の祥、汝深路に渡らば必船入に射られて海中に死ん、謹て復往事なかれ、その壮鹿感意に勝ず、復野島に渡る海中行船にあひて終に射殺る故此野と名づけて夢野と云ふ俗説に刀我野に立る真壮鹿夢相のまゝふ云云

【河社】契仲大人云、仁徳記に菟餓野の鹿の夢のことゝ思ひ合せ、そもそも夢野しるしなどいふ

秋 ゆめ

より夢野

加菱 ひの部菱取の条をみよ

九月 **柚** 【説文】柚ハ橙に似て酢し、柚の皮ハ苦く橙の皮ハ甘し、

柚味噌 【滑稽雑談】近世編笠柚味噌と云ものを作る、柚一箇と二片とを瓣核と去、熟湯に投て軽くあらしめ、取出し乾て置て、柚味噌に用る所の味噌と其汁に盛り包て編笠の形ふたつよく蒸して用ふ、抵園の茶店関東何某始て制するる所なり、

行秋 行秋のこの邪、乙由

十月 **益母草** 【くさ世】猪蘇俗目むぐらと云、蕊ハ胡麻に似て葉ハ麻のごとし、其葉両々相対して一層ハ東西、一層ハ南北とぐひふ十文字なり、七月紅紫の小花を開く、又微白の物あり、本草に花ハ四五月と記す、土地の違ひなるべし、

八月名月 【和漢三才図会】頭背翅尾黄つの部月見の条に出ず、

眼白鳥 青色にして鮮明、俗にいふ洛中萌黄色にして眼の睫に白圈あり、胸臆白くして物色に帯ず腹白し、性に群をなして、友と好て樊の中に在ても亦一樹

ふ集り相依て互ふ推を其中一雙飛出群を抜るときは、餘まと相推を又中より抜去初のごとく毎ふ抜きと好む

七月

鼠尾草　時珍曰鼠尾穂の形と以名ふ命○韓保昇曰鼠尾莖の端ふ夏四五穂を生ず、車前の如し、花赤白の種あり、

水懸草　増山の井説々にあり貞徳云水影草ハあるく七夕ふよめり、水懸草ハ稲の事あり又或説ふ云ふ聖昊ふ水むとる心あり、

三井

寺女詣　十五日　江州長等山崇福寺又蓮福寺地福院を大津の側よあり、園城寺又三井寺と称ず、園城寺ハ御園ふ隣るを以て名とす、三井寺ハ西巖ふ昊泉あり、天智、天武、持統三帝即位の時この井の水を掬て浴湯ふ献ず、因て御井といふ、後ふ改て三井ふ作る、是三皇の浴井龍華三會の義ゝ、この寺平日女人結界の山ゝ六七月十五日女人の参詣を許し登山せしむ、これを女詣とゝ、當山ハ智證大師四珍の開基ゝ、

妙法寺の火　せの部施火の条ふ出ず、

御狭山祭　穂屋　廿日　信多諏訪郡諏訪明神の祭ゝ、今在記上諏訪ハ建御方富命、下の諏訪八坂入姫命○或説ふ御射山の祭ふハ、薄ふて神殿を造る其外人の家も祭の程ハ皆薄ふて作る、又ゝこと云もまきのゝゝ日本紀才三野槌の神ふハ五百筒野蓼の八十玉籤と禄ゝむ、是ハ天照大神と天の岩戸より出し奉らんと世時のまぎゝ、ようて信多諏訪ゝさ山祭ふハ薄と以幣とす故ふこゝさ川信濃とゝふ、○此祭ふ遠笠懸と射て進らもゝ其於田村将軍の安倍高麻呂と伐んゝふ信濃國ふ至て此神ふ祈ゝ申されゝふ、握の巣の紋付し直垂著ゝる人湖の波上ふ馬を立らせて笠懸射ゝ神事ゝす

ゝいとの所謂あゝようて遏波ゝも記ゝて諏訪ゝもうゝと

縁起ふ出當社ハ桓武の御宇、田村将軍の建立ゝとゝ、この神ハをゝく田猟のゝと主どゝふゝ、○穂屋御狭山ふ作る穂屋あゝこの祭ハ貞徳説ふ八月ゝ藻塩草七月廿ゝゝ増山の井ふハ七月廿七日とも此説多しゝゝ狩むゝハ勅使と立らるゝ穂屋といふハ勅使尊敬のゝあ新ふ仮屋を設けらるゝ今もその余凡て穂屋と造るを、新式秘抄ふ云穂屋つくるハ諏訪祭のゝゝ、諏訪祭ハ

年ふ七十五度あり是その一ツ〳〵、みさ山祭ハ山城望取の辺所
〻とりふ説あるとど、名所方角抄寄枕秋の寐覚ホふハ信濃く
も〇猿蓑 雪ちる也穂屋 芭蕉 蓑荷の花 周礼 庶氏喜草と云て毒毒
のもくさの苅のそ〳〵芭蕉
と除く宗懍謂喜草ハ則蓑荷の花是く〇時珍曰雀豹
古今註云蓑荷其子花根の中ふ生ず花のまゝ敗れゝ時
食ふべし、冬ゝき
ときハ消爛ス、 兼三秋物 身ふ入 湛方生秋夜賦
氣入肌以凄凜
淩林蕭索 甲子紀行 のぞらし 三日月 新月 朏魄 纖月 文選
とゝろふ凡のまゆ身ふ芭蕉
月賦ニ出ル 礼記の注 月三日ふ〳〵て魄をふ生、向云朏ハ
盛明まり、魄ゝ〳〵て地と出て明生ス〇新月鎌月、王鈎
蛾眉磨鎌ホ三日月とい〻此外種々の譬喩詩多
ふ多し、〇何事のゝそ〳〵も似ず三日の月 芭蕉 水
あ〳〵 水梨形ち青梨 ゝ似ゝく 褐色、 蚯蚓鳴 歌女 釈名 土龍 地
ホの諸名あり〇時珍曰東方虬賦云其鳴ゝゝ長吟
故ふ哥女と名ゝ孟夏もゝて出、仲冬蟄結を雨ゝ

ときハ地ッ出、晴ゝときゝゝ夜鳴、或ハ〻〻結ぶゝときハ化〻て
百合とふる蟲蠱と穴とゝ〻〻〻〻て雌雄ゝゝふ、
蓑虫 鬼の子 和漢三才圖会 諸木の嫩葉漸く紅老葉
巻ゝあり中ふ小虫と生ず其虫枯葉ゝ食
ひとう糸と吐き、用て窠と作る長さすゝ〻〻〻〻
燃ゝゝる艾柱の如し 毎ふ枝ふ縋る其虫も又黒色 歌段
ありて首とゞる時々ふ首と出して嫩葉と食ふ其首と
動き、貌蓑着ゝる公羽ふ彷彿ゝり、 枕草紙 このむ〻こ
哀しゝふのゝみゝゝゝゝゝ似てこゝもおこゝ〻きこゝち
ゝあらんとて、親のいゝきゝゝゝゝゝゝゝ
ふゝゝゝんゝゝるゝゝゝゝゝゝゝゝ
音ゝゝゝりて八月ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
いふゝゝゝて鬼のゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
李吟云蓑虫とゞゝハ 八月三村祭 三村或ハ水
雖く鳴心あれど秋ゝ、 村ふ作ゝ東

州堺の庄塩穴の下条開口村にあり【住吉旧記】祭る神伊弉諾尊の御子に事勝食勝国長狹之後に生玉牛頭天王と合せ祭る乃ち住吉の外宮とす故に朝廷二十年に一度住吉の社造の替をなされしとき當社も此義あり社地ハ開口村木戸村原村の間にあり俗三村大明神と称し大寺祭とも云【泉州府志】社説云空海来山念仏寺聖武帝の御願に依て行基僧正開基する所也社領八十石○例祭八月一日二日にて三村祭又大寺祭といふ木戸村開口村原村の産沙神にして大念佛寺の鎮守とす

三津八幡祭 十五日 摂州西成郡大坂三津の寺町にあり三津とハ高津敷津難波津是也傳へいふ昔行基寺院を建て三津寺と号ス後神託によりて八幡を勧請す毎年八月十五日祭礼なり社説にいふ當社ハ清和天皇の御宇筑紫宇佐の神男山に遷座のとき西海より初て至りあふ洲中にその旧跡に祝ひ祭るといふ又一説に應神天皇行幸の地ともいふ又人○摂州難波堀江の人月と此所に賞し谷深更に及びて家に帰ることを月見と称す又難波の御祓と称す是八幡祭なり

水引の花 【和漢三才図会】水引草高さ二三尺葉楊櫨に似て皺あらず秋長穂を出し小き花つく紅色其茎円く繊く紙撚及び水引の如し故に名づく

水始涸 【月令】

九月 三度栗 【本朝食鑑】上野刕下野刕より山栗あり極て小なりて一年三度栗を収む故に三度栗と称す味佳ならず世に古の流ぶかりけり

水木 【和漢三才図会】美豆木高さ二三丈葉梅樺木の葉に似て皺厚く冬凋む花藤の花に似て黄色なり一種土佐の山中より出る者高さ一二丈葉粉團花の葉に似て小し正月黄花を開く攢簇て下り垂る子を結ぶ赤色呼で土佐美豆木といふ○実を賞して秋とす

蜜柑 【和漢三才図会】太知波奈と和名ハ橘類の総名也今単に太知波奈と称するものハ包橘也専果とし其皮を薬とす乃蜜柑也其実熟するときハ蜜の如し故に名づく【たちまち草】橘ハ淮をこゆれハ枳となるといふことあり其化て枳となるといふことをきかずといへども此国にても蜜柑九年母などいふものの其樹を移して出羽に植まうくれハ枳殻となるといへり

水の紅葉

川の紅葉ふ同し、
かの部こゝるべし、

七月 七夕

七月七日の夜をいふ、

星 牽牛 織女 犬飼星 河鼓 彦星 なかつかつの

月令廣義 焦林大手記云、天の河の西ふ星あり、煌々たり、微々参こ俱ふ出ッこゝ也と牽牛といふ、天の河の東ふ星あり、織女といふ、世ふ雙星とも

とゝ氏の下よりあり、こゝ也と織女ふ故ふ

名抄 尓雅注云、牽牛一名河鼓 和名比古保之 伊奴加比保之 織女 和名太奈八太

豆女 和訓義解 ヒコ星ヒコハ男子の美称織女の夫ふ故ふ

男星こゝ、二星の屋形 唐の天宝年中ふ宮中七夕ふ錦繍を以て結びて殿ふ

こゝろあり、

また高さ百丈数十人と容べし、花果酒炙を陳ね坐具を設け以て牛女の二星を祭る、○本朝式ふ少く異ふ七ッの棚ごとかき花を折瓜果を備へ、七種の舟 七種の舟ハ色々の宝を七色舟ふ積て手向空焼あごの事あり、

るをいふ、七夕ふハ

七の数を用ふ、新吉原燈籠 一日より 享保元 三十日迄 年江戸

吉原の遊女玉菊う追薦のこゝ、一年七月中の町の場屋

各燈籠を出す、是より例となりて毎年此事あり、その燈

籠綾羅を以て翁獣諸物を造り奇麗を競ふ、

この節男女群集をそれと燈籠見物とゝ、燈籠ふ和名玉

菊ゲ来る夜 聖霊棚 たの部夫祭の条ふ出ッ、

名義 不知作者

鹿鳴草

類名 和名分

抄鹿鳴草 和名之々故ふ此名あるべし、雲異本ふまちなを

波木 草とあり、教長集都ふも咲ふ、ども葉のごとく、名あるふ草ハ秋の

山、

石蒜

大和本草 老鴉蒜 ろくびくだれらふ四月或ハ九

里、 赤き花 ト品ふ此時葉もて花ふ故ふ

紫ふ捨子の花ふ、○彼岸花も

いふ曼珠沙華の条のごとし、

秋海棠

名花譜 秋海棠一名

斷腸花 嬌姿柔軟真ふ美人の粧ひ撓ごとく性陰ふ好む日

と見るふ即瘁く九月枝上の黒子ふ成め地上ふ撒けば明春枝

と発ち老根冬を過る者花発き更ふ茂る 大和本草 寛永

年中中華ふ初めて長崎ふ来る、それ以前ハ本邦ふ無し、色

海棠ふ似たり故ふ名づく 五五〇

秋海棠西瓜の色ふ咲ふ芳薫

椿

時珍曰椿一名漆

椿即ち樹ふ一軒

くる者故ふこれと榎ふ、他の樹熟するとき黄赤惟熟

とゝ、赤黒色搗碎き汁を浸すこと漆樹ふ倣ふ

諸物と漬べし、

澁取 和漢三才圖会 柿渋造る法 柿一斗故ふ漆の名なり、帯と玉水二升五合ふ和雑ふ搗こ補ふ盛り宿を經てこまと搾て渣も又水ふ和して二日と經てこれと搾る其用甚こ多し、

蓼二秋物

ちら露 李白詩 秋露如白玉 伊勢物語 ちらさまの何ぞと人のとひしとき露とこたへて消なましものを

新月 みの部三日月の条う注を、

ちまほ 月の異名なり、秘藏抄 朝敵物

の月 淮南子 羿不死の藥を西王母ふ請入、けいばくまこまを嫦娥こと竊んで以月ふ奔る 後天文志 嫦娥ハ羿の妻、不死の藥を竊んで月ふ奔るこれと蟾蜍と子、

常娥 嫦娥こと竊んで以月ふ奔る

真如 法華玄義 清淨真如ハ雲外の月のごとし、○衆生の真如仏性ハ常こ煩惱ふつゝまれても其体ハ少しも染ず汚まざる喻ハ月の雲ふ掩はるゝとも其体ハ清く明らかなるが如しこと真如の月とゆく真こハ不変の義如ハ不異の義、

篠芒 宗祇曰ものもきこえハ穂こいでゝみ薄といふ、

綴芒 繼ふ白しのぶくさ 真文あり

忍草 真淵云おのゝ草ハ和名抄の芒口の類ふ垣衣とあるものゝ古き築地朽たる物の端、古き軒端あるゝふ常ふ生る草と云、

とゝゆかくちハ山中ふ多くるものゝみて昔の類く後世の俗を山中ふ多くるひとつの草とさてろのけしてゝ根とつくゝそ軒ふくくるとこ云ハ古きをこゝろ得ぬかの偽名ゝ○今云忍州ハ本草ふいゝ石長生のゝめでひふべしとこ石長生ハ四時凋まゝ今俗の搗ふ掛るものハ冬拾るゝ○後撰集の廟前ふて 御廟年を經て忍ぶい何とおのゝ草 芭蕉

萱 ハ垣衣ふよ

新澁 七月の部澁取の条ふ出ツ、

鹿 格物論 鹿ハ性驚烈多し能良草を別ゝ他獸多くハ十二辰八卦ふ屬そ惟鹿然らず、一千年ふ一そ蒼鹿とある又百年ふて白鹿と化し又五百年ふて玄鹿とある鹿ふ麋あり麋あり麒あり 天紀本草 鹿の角ハ春生し夏長じ秋堅く冬脱 杜鹿ハ鳴き杜鹿ハ鳴くまゝ七月の末より八月の中ふかけふ九月末まゝそ鳴ゝ○うせぎ、紅葉鳥、ささそう、夢野の鹿、肩技鹿、まろる、各頭字の部ふとちて注を、但まゝるを鹿といつるハ誤あり、その部ふ注を

鹿笛 獵人鹿角の根及び胎

鹿の皮或ハ蝦蟆の皮を以笛を作り、吹て牡鹿の音を為る、牡鹿匍匐して来て見ル弥ふ雅て或ハ稲穂ふ入るか

つれ〻く草　女のたをるる足駄をて作る笛ゆゑ秋の鹿の好むもとよる、

鹿垣

此獸田圃ふ出て穀菽を食農人ゝと防んゝあふ垣と設く是を鹿垣と云、

鹿狩

白虎通　王者諸侯田狩する所以ハ何ぞや田の為ふ害と除く、

鶉

陳藏器拾遺　鶉ハ鶏の如く色青く背長汎塗の間ふ在て鶉〻速声をなして村民が云田鶉の化する所、○時珍曰今田野の間ふ小鳥あり いまゞ雨らざる時鳴く是なり

和名抄　鸇（楊氏抄云之木一云田鳥）

和漢三才圖会　按るふ俗ふ鳴字と用ハ蓋田鳥の二字を製をる欤、○ゆゝ鶉

多識論　杉雉（李斗志義）○時珍曰杉雉、接るふ臨海異名志云聞越ふ杉雉あり常ふ杉の樹の下ふ居頭上ふ長き黄色の冠あり煩青正色垂縷のごとし

鳴突網

職業盡　下総国荻原辺原中ふ鳴の坐り居く動じあるを、七八間隔て竿羅と持て鳴の正面ふ向ひ、ゆゝしと付ぬるゝ〻と週て最初ハ大輪ふ週て段々近寄まるふ小輪ふ巡りて、止々六七尺ふ間近くなり

てかの竿羅と投てとらゝ六七尺の所とあるふあるまゝ羅をとらふ自てとる手練の業く是を鳴突ハふ山城の鳥羽辺多しとき〻り

荒野　鳴突ハ

鳴の羽掻

和訓栞　鸇

萱津のあまのひまとゝ淵

羽をもこゝ音の高く聞ゆれいふ、其数もをゝ百羽ゝきゝも数掻とかゝ暁天ふ必くゝ少ゝ時ハ直ふ暁の事ゆをいとるゝ

鶏鳥の首經

古今　暁の鳴の羽ゝきも君ゝ夜ハ我を数ゝ

和訓栞　俗諺ゝその田沢ふ居時の閑黙をるをもてなり、

鱰

和漢三才圖会　正字未詳俗云志比良長崎の入呼て比以乎といふ按るふ鱰の状鯽ふ類して頭ふ尾鱗細ふ味もまゝ鰒ふ似て大なる者二三尺九万ゝ名く其多くゝ捕るゝと以ていふ越中鱰蒸と上ゝを中華の魚ゝて四五月唐船多く入朝の時来て群遊ゝ唐船帰る時、九州の鯛唐人肉食の腥き氣と慕ひ船ふ着て入唐ゝ夏月鱰日本ふ多く冬月鯛中華の湊ふ多し

大和本草　シイラ又名冬ヒキ

筑紫ゆて猫ゝラとゝ、味美ゝ

八月

白髭

開帳 五日 神祇正宗 近江打聞白髭大明神八幡田彦也社

談 比良明神と同体なり○昔ハ開帳あり元禄中より止む今ハ只内陣と開て宮殿を拝せしのみ

四月上の辰の日祭礼神輿渡御あり往古の神門石橋の遺ハ今水中二町むかう湖水の沖あるゝ縁起ふるき鳥居のありし所と鵜川とハ社頭より二十町むかふ河あり鵜川と号す此川の北を鵜川領とハ別當を白頭山延命寺福壽院と号毎年二月八講あり開帳八月晋ハ

忘賀八幡祭 十五日 淡海志 四十代天武天皇即位九年壬申近江國滋賀郡ふ舊跡八幡一の御前八幡大井八今の聖真子是なり唐光僧の形聖真子八阿弥陀八幡大井の分身なり○是山王七社の神なり淡海国滋賀郡坂本村ふあり見瀬村の神社ふあり今八山王祭の外神事なきまゝあり

秋社 月令廣義 暦書云立秋の後五戊の日を秋社と註ふ云社八后土なり民ことゝ祀りて以て農を祈る

死活杖祭 此祭八京都猪の熊三条の南禍速の神社ふあり 雍州府志 昔刑部省此辺ふあり獄と断じて以て死刑を行ふ故ふ刑死の人の為ふこの社を建て祭祀を修せり毎年八月神事あり之を死活杖の祭と云ふ○千本引接寺千生の地蔵ふあて毎春修する所の念佛會八元死刑人の為ふ修行せらるゝ始れりとゞ

四手打、もろろ打 きの部 條ふ注して

紫苑 鬼の部

蘊頃曰紫苑三月の内地ふ布て苗と生ず其葉二四相連て五月六月の内黄白紫花を開く墨子を綴て万逮菅草吾下紐ふ著有跡鬼乃志許草事仁思安利家里 家持○鬼醜女草 紫苑 袖中抄 鬼のもろと草とハ別の草の名ふあらず忘草ハ愁と忘るゝ草なれば意一き人と忘れん料ふ下紐ふつけうれと更ふうるゝ草なるゝ故ふ忘草と云名ハ其事ふあり人猶意しゆれハ鬼のもろと草とうらふくさろハ誠の鬼ふあらねどうらとゝ詞く日本紀第一ふ不順也山目汚穢之所をもろこしわろしと嫌ふ詞く山の字とゝあり 俊頼抄 昔人の親二子三人をもうり此もらあく孝行まるる親うをてのら數さ塚ふ詣て在り如く有る年ろ年ろ兄弟ろ

ゆきぬ其兄公ふつゝて私とろうるゝふ甚だ思ひるやう只は止む時ゝ忘草ハ思ひとゝ思ふ物ゝと塚みるもと植る兄ハ二つの程みるゝもれて行ど世ふ豆草と忘草といふともるゝ有り弟ハまゝ絶も詣てゐおる日親の塚ふ吉あり恐るべうるゝわれハ君ゝ親の塚と守る鬼神ゝ兄ハ忘草と植て公ふつゝ面つるゝ忘らんとの家と思ふゝ實ゝ其許ハ思ひ草と植てまゝ子ゝ怠ら王孝ゝ天帝ゝ孝ゝ給ひてゝれよりゝむるハ今ゝり盈あゝんゝと夢ふ告ゝゝまゝ子ゝゝ止ゝ弟不思議おゆひ婦ゝゝ盈あるゝゝ夢ふ見ゝふ違ゝ徳と得ゝゝゝゝこの紫花草ハ禱しきゝあゝゝ人ハ植てるゝき久數ゝゝもん人ハ植べゝゝさる草ゝ故ふゝゝの椎草とゝゝ鬼のゝゝゝゝゝと鬼の師ゝ草ゝゝゝ

和漢三才畠会 椎の木ゝ牛ゝ大ゝるもの二寸ゝゝり大小最生も、

松露 和漢三才畠会 麥蕈俗云

松露沙地松樹ある陰處ふ生ゝ、松の津液と秋濕と相感じて菌ゝふる織柄ゝく状ち零餘子ふ似て四ゝ大きし、外褐色内白ゝ柔ふ淡ゝ甘し香あり、

濕地茸 和漢三才畠会 原野濕地ふ生ゝ故ふ濕地茸と名ゝ状松茸ふ似て小ゝすゝゝふ曼ゝ織の内灰白色柔ゝ脆ゝ破ゝ易し九月盛ふ出ゝ又織の外黄色の者あり並ふ食ふべし

本朝食鑑 標茅蕈 標茅ゝ原茅ゝ多ゝ生ゝる地の名、下野国黒髪山の下ふ標茅ゝ原あり此則其處ゝり此茸草茅ゝ卑湿の地ゝ生ゝ故ふ名づく、

猪蕈 和漢三才畠会 茸茸ふ似て黒ゝ織脂潤ひ其裏ふ穴あり蜂の巣の如し毒ゝり、

代ゝる雁 夜止南ゝ中更毎ふ居ゝ變ゝゝと代ゝるゝゝ代ゝハ田ゝ

四十雀 五十雀 和漢三才畠会 小ゝゝ春の部黄代の条注あ雀ふ似て大也頭黒ゝ両頰白ゝして白き四紋黑ゝ圓頰ふ至て胸背灰青翅尾鬱黑ゝ灰白の斑ゝ腹白色ふして胸ゝり尾ふ至て黒雲の紋あり其声清響ゝて多ゝ轉ゝる四十ゝゝとゝゝ知し故ふゝゝゝゝ其老るゝゝ毛と換色ゝ異ゝて形も又大ゝ俗呼で五十雀ゝハ雌ハ腹の雲紋幽微ゝ

鶺鴒 鶺鴒状ち毋

雞ハ似て鶏の如し、胸の前ハ白き斑ありて真珠のごとし、背毛ハ紫赤の浪の文あり、○時珍曰鷓鴣飛ときハ必南へ翥る、晋南ハ懐南ならハ、江左ハ逐影ならハ、張華ハ注云飛ときハ必南へ向く、東西ハ回翔をいふ、ともに翅と聞くの殆り必先ハ南へ翥る其志し南と懐ひて北ハ徂と性霜露と畏ると早晩ハ出ることを希ふ、夜栖ハ木の葉を以て身を敬ハ、多く對し啼く、今俗其鳴を謂て行ハ得奇ならハ其性潔きを好む

和漢三才圖会 字彙云鷓鴣其色斑数月ハ蔭ハ正月の如きハ一さハ飛で止む、蓋未知然るやいなや、近年亦中華より来ることあり、最も珍しとす、狀雉の雌ハ似て頭ハ鶉の如し、

藻塩草 此鳥ハ裏ハ紅葉の散ると背中ハ負ハて雪霜の寒をふせぐ、故ハ奇ハも鳥の上毛の紅ねとよあり、

鴉

和漢三才圖会 今鴉青鴉一物ともるハ非ス、鴉ハ山林ハ在て原野ハ出ず、形雀ハ似て黄赤色、翅ハ黑き紋の斑あり、脚掌黑し、

本朝食鑑 新酒ハ凡新釀の白米一斗を用てこれを釀し、須加利酒を濾ハ槽ハ入て舟ハ入其酒の水半滴る復布嚢ハ入て壓しときハ酒おのづから滴て出づ、酒滴て尽て後汁と取滓と去ごれと新酒とのハ

○新走、中汲、醸醸、袋洗、各其頭字の部ハわるもて注ス

九月

四の宮祭

十日 近江国滋賀郡大津の駅ハ坐す祭る神四座、大比叡大已貴小比叡国常立尊仲哀天皇小禪師火々出見尊接ぶるハ當社ハ日吉の神殿ハ故ハ四座と以この地ハ辺ると、里民云この神鎮座の日、官幣使四位某の卿ハ故ハ四座と以四位の宮と号そと、四神鎮坐のゆるハ四位と号もるハ、社説云祭る神五座大比叡小比叡気比小禪師塩土の老翁ハ小禪師と本社ハ故ハ四の宮とのハ例祭九月十日大津浦中の大祭ハ神輿二基引山十一邊物造花ハを出ると、夜ハ入て相撲有、

下鳥羽祭

十日 山城国宇治郡下鳥羽ハあり、祭る神牛頭天皇と号そ、例祭九月十日下鳥羽及び横大路の土人本居神ハす、神輿一基のり、名勝志云神社ハ法傳寺の巽二町ばかり森の中ハあり、

白川祭

十二日 名勝志云天満天神の祭ハ、て洛北白川の里南山の上ハあり、指社山王春日八幡紀事神輿一基鉾五本あり、○社説云祭る神天満宮少彦名

の尊掘社ハ前ふ同じく天満鎮座ハ延喜八年三月十三日之
旅所ハ本社鳥居の前二町ばかり西ふあり例祭九月十三日

土人産沙　後の月、二夜の月、高潔云十三夜の月、
神ゝゝゝ　豆名月、栗名月、月見ハ我朝の風之

十三夜

ちると迫世のうそ儒者ふ天邊將滿一輪月又光彩遍空
輪將滿ゝゝる詩又明の十二家詩ふ鄭少谷何大復が
十三夜の月と題ぶとゝる詩と引て異朝ふも十三夜の月
と賞ぜしゝ化ど附會の説ゝ信景云今彼集十二家詩を
るふ是八月十三夜ふて九月十三夜ふあらず其他一ツも九月十
三夜の月と賞せ一詩文ふ一句一章ありともそれハ
其人臨時の興ふて天下の名月ゝまる事ハ我朝のゝれ
旧風之　右中記　七十五代崇德院保延元年九月十三夜今宵
雲清く月明らゝ是むり一寛平法皇明月無双のよ一
仰出さる依て我朝九月十三夜と以明月の夜ゝゝ嘉盤記
生熊　万里ふ路部光卿の御説と引て云十三夜の月と賞
地　せ一正き起ゝハ天暦七年九月十三夜始て月の宴と行
ひゝゝ一ふ遺例ゝゝり来ゝ一ゝ但此宴ハ本八月十五夜の
御遊びとおゝて行ひゝゝる之其由ハ八月十五夜ハ先帝朱

の御国忌ふ當ゝゝる故ゝゝも後れて此九月ふ其遊と行ひ
ゝゝゝる之此月ゝゝゝと十五日ハ猶其日次も忌ゝゝられぐて、
十三夜ふ定て此月の宴と開き行ゝゝゝ　○忠道公十
三夜翫月詩云閑窓寂々月相臨從禽窮秋望已深潘
室昔蹤凌雲訪蔣家旧徑蹤霜尋十三夜影勝於古數
百年光不若今馮前軒回首見清明此夕價千金○唐ふ
冨士あゝゝゝふの月も見よ素堂○後の月とハ十五夜ふ對
一ていふ○二夜の月十五夜の月とくゝ二夜の月と賞せ○
栗名月、豆名月ハ浪華の俗十五夜を芋名月

芝神明

といひ、十三夜を栗名月、豆名月といゝふし、

祭

十日ようか　江戸芝増上寺大門の傍ふあり神領十五石
廿一日まで　別當金剛院神主西東氏當社旧地ハ増上寺の
山際ふあり故ふ飯倉明神と号ま祭礼九月十日ようか廿一日迄て
神幸ふ此節時ゝて秋雨多しゝゝと以て世俗神明のゝゝさん
祭とゝゝ祭礼の間社内ふ於て生姜と商ふ是と根勝姓姜と詩ふて一説に生姜と
ふ本朝醫方傳ふ云薑ハ穢土と去神明ふ通ま世俗ゝゝの
事と誤て傳ゝゝ生姜を賣ふ其外撞割笼ふ鑑
の花と画き内ふ鮎と盛りてこれど凡木箱と称ス但し

風木の餘りを作れるとぞ謂ふなるべし、赤詣の人必生姜と此ちき箱と買て帰る、

城南寺祭

廿日 神社啓蒙 城南の社ハ山城国鳥羽の里にあり、祭る所の神、坐鳥羽天皇、○社説云祭る所二十二社の内七社、伊勢、石清水、松尾、稲荷、賀茂上下、平野、春日、以上城南神と号す、例祭九月廿日神輿二基あり、この地人皇七十四代鳥羽上皇の離宮ありて王城の南にあるゆゑ、城南の離宮といふ、

鹿ケ谷祭

廿四日 紀事 浄土村十禪師祭云、洛東銀閣寺の門前北の方ハ十禪師の社あり、同所ハ八所明神の社あり、神号詳ならず、土人産土神とも、祭礼九月二十四日、今九天皇祭云云

今祭祀織

雍州府志 鹿ケ谷 記もれ及なし、

狸々菊

黄握々ハ万重大こん、乱握々ハ本紅中白尖て、大こんハ握々ハ握々の如くみてふなり、

女花

菊の異名、女節 女莖の異名あり、

兼和の色

菊の異名、藻塩草 唐ハて菊と是ふようてふなり、

兼和帝

かてゝ〻ゝとハ陶淵明ふもとまり、我朝ハてハ兼和帝仁和天皇より始てかて遊ひゆゑ、故ふ兼和の色と申よ、此

ゝろ、いまゝ菊の品も分ゝ多ゝ只黄なると用ひられしゝゝ黄菊とゝゝて兼和色とも蘇我菊とも申ゝゝゝ藻塩草あ説ゝくの如ゝとゝとも類聚国史ふ桓武帝の菊の御ゝゝ載らるゝゝゝ兼和帝より菊とハ、ゝて愛しゝあひ、只此帝ゝゝて菊とゝて遊ひゆゑ、後の哥ハ多くゝら菊ゝあり、

ゝら菊

和訓栞 菊ハ大要黄を貴ぶ、詩人の賞ゝ所、薬用ふ入もまゝ同ゝゝゝふ哥ふ多くゝゝゝゝハ新羅菊の義ゝとゝゝ、花史在編ふ菊品新羅一名倭菊千葉純白とゝゝゝ、

芍薬の根分

芍薬其六花肥大ゝらんと欲ゝ、

柴栗

壤とゝゝゝ毎年九月根を取削り去る、栃栗のこゝゝゝ、

熟柿

腸ふ秋の熟柿哉

支考

椎の實、椎柴、椎の葉

本草ふこゝゝゝ 羅山文集 余幼年より椎ハ木の名ゝ子果ゝて太平御覽ふ在と聞く、後ハ文考ゝて、蓋胡説歟項面書南山志を見るふ椎ハ科子ゝ、其末尖ゝて錐ふ似ゝ、故ふ椎ゝゝ、宋志ふ椎ふ作る木に従ふゝ 畧 和漢三才 大和本草 椎ハ闕書ふこゝゝ載て

尚会 椎子 鐵樹 其葉柳ニ似て鋸歯細ニ強く冬も枯
葉落ず其実長く尖て筆頭ニ似て紫褐色仁白く両片
とふる云く凡樫鉤栗椎子の棟相似たり小椀の如し俗呼
て供器といふ○季吟云堀川百首ニ椎柴と冬の題ニ出
せり其故わや冬ともる一説あまて実ニつきて椎
ハ秋季と持るふ椎柴も巣も実も秋ものり

松子

新松子

海松 大和本草 海松 立栗あり若水日信州
戸隠山よりあり然るハ日本ニ本より所り
から松と訓ずるハ非なるべし松ちく大ク子ハ果ちく食
ふべし日本の産ハ朝鮮ちり来るふおとと。 倭名抄 松子
漢語抄云五葉松 貞享式 此式
子和名万豆乃美○青球と ハ例の賞翫之
大坂の里語ニ新松子ちく

新蕎麥

奈何とあれハ荊ハ冬ニて食ふ

新米

食療 本草
ハ秋なる前後の動と賞ちて
粳米新熟の者ハ気と動し
年と經る者ハ恒病と発て

霜踏鹿

千首 かりのこ
霜置て岡べの道ハ
ちちちちの声 称院

松

に の部ニ
併せ出ス

七月

秋

の葉と載く 要華録 唐の時立秋の日京師楸の葉
を賣る婦女児童剪て花の樣ニ
てこれと戴く

一葉

桐一葉 淮南子 一葉落而天下知秋○一
と載く 葉ハ桐ともも柳とももつ人間体ちくし

一葉の舟

一葉の水ニ浮びちると舟ハ
ちちちち一葉の舟詩文多し

冷

御个 初秋の事

暮秋ハ

彦星

志の部二星 の冬ニ出ス

火取香

棚機ニ手向 江次第

西北机ニ居香爐一口納屋の百和香四両盛之

蒐麻子

公事根源 机の上ニ火とりニ終夜空焼物なり

唐朔麻くと 時珍曰楸葉大ク早く脱ス故ニ名

楸

り部ニ落ち

櫻

と楸ちくハ櫻葉ハ小ク早く発ス故

ふれと頼らふ

花景

鏞 邑子錢 ヒザキ キサク カフ
ふ出ス

テニブラ ライテンキリ人家往々ちと栽高さ一二丈白
鐵樹ニ類して皮赤龍の鱗の如し葉ハ杉本ニ類ちく
大或ハ尖ニ或ハ三尖夏筒子の花とひらくふ白色
紫点あり凋て莢と結ふ数十簇

蜩

大和本草 時珍
をりて枝の間ニ垂る長さ尺餘 曰小ク色青

緑なる者、爾雅註云小青蟬也此せみ山中にあり晩夏に故に名く常の蟬よりは小にして青赤く音時々聞く甚
さむく寒き鳴く

兼三秋物

引板

拾穂抄 板に木を添て鳴とつけて引

鹿と驚

李芒

天和本草 一菓 多く叢生す

八月

菱

これ物なり

取 菱 時珍曰芰實一名菱或は沙角この角稜嶒

これと菱とは俗呼て凌角 中略 自潮中

に生ず葉実ともに浮く其角硬して人を刺其色嫩き者青く老る者黑し嫩き時刺食に甘美く老る時は蒸

して食ふ

天和本草

八月九月これを採

穄

時珍曰穄苗茭米の如し八九月莖を抽んで三稜あり細花と

ひらく穗成りて

栗の穗の如し

瓢簞、百生

千生 和漢三才圖 青瓢簞草 会 苦瓢 俗

三云瓢簞草壺盧と一類にして別種なる者明けし巣花に

ありて壺盧に似て瓢の味食ふに堪ず四本なる者多く

炭斗に作る長して細腰なるは酒樽に作る一長五六

寸の者あり俗百生と称す二三寸の者あり千生と称す細

腰本末相均しき者俗呼て

平蕈

和漢三才圖会 平茸山林の濕地に生ず苦楝

の樹多くこれを出す十月盛に其形蕈に似て傘

薄く匾し故に名く大さ三四寸赤至て大なる者あり灰白

色裏白く細き刻こまあり性柔にして脆く其柄多く

正中にあるこれを畧偏て生ず大小叢生も味淡く甘し

鴻

和漢三才圖会 菱喰 雁類 灰色翻深黑其尾本白く末黑し腹白く脚黄紫黑く

して鼻の辺に黄の條あり其肉の味雁に劣る

鶴

和漢三才圖会 俗云比与土里狀ち鶏鴨に似て尾長く蒼茂色

頭上の毛乱れ起眼の辺に微赤色を帶ぶ脚臆蒼黑腹

の下灰白く俱に黑き斑あり觜利く脚脛短く掌まで蒼

黑く常に群をなす飛騰好て草木の實を食ふ或は云

山茶花を食ふ

鵜

古抄秋に食ふ式に見えたり

冬の部に入べき注也

日雀

和漢三才圖会 俗云比伽羅狀四十雀に似て小く頭背赤色頬の辺

に白黑相交る腹白く翅尾黑く其根澤あり

鶏

河原鶏 和漢三才圖会 俗云比和止里雀ようく全体黄色にして青と帯ぶ頭背頸翅ふ黒を交ふ尾黒し腹黄白嘴灰白く脚黒し其声清滑よく囀る又河原鶏狀鶏ふ似て稍大く頭背灰白く眼の後微黒く背ふ黒き斑あり翅蒼黒ふして黄と交ふ 大和本草 唐鶏 紅鶏 蓼鶏ふ作る狀略之

鰹漬 和漢三才圖会 一二すぐ一升洗ハまゝして塩三合和し三日ふして後石を以こゝろまと壓す或ハ同く茹子生薑穂蓼番椒ふ漬るも又佳く鰹の字未詳 本朝食鑑 鰹ハ小鰹ふ

九月 賜氷魚 九日 公事根源 十月の旬のこゝろまを今日氷魚を取ることくふ 年中行事 菊ゆめぢ折給ふこゝろきこのちろき肉食て菊と愛する中ふ殊ふ百菊ふして百種の名あるゆへ草ふ云和朝ふ傳ふ足利將軍義輝公御園ふ植られ御寵愛あり義景藤孝両人ふ贈られ一百種の菊あり人百菊ハこの種ふ云云

百菊 滑稽雑談 いまて

鴨上戸 和名抄 巳

ゆの部

ふ出づ、 錐栗 時珍曰栗稍小きもの山栗なり山栗の面ふ子の如くなるもの脹出て中ふ小き蟲あり花し出づ、殼ふ孔口あり、壓埃と吹去バ空虚となる大なる者ハ桃李ふ如し、其文理椰子の如し人用ひて胡椒秦椒ふ抹と收る瓢瓢ふ代ふ故ふ俗瓢の木とふ或ハ小児戯ふ吹て笛とす駿州ふ多くこれあり、祭礼ふこの笛と吹て神輿ふ供奉を

栗 和漢三才圖会 其木の葉女貞ふ似て厚く狭く長く微淡し三四月ふ細花と開く深赤色実と結ぶ大さ豆の如し自ら裂る中子細小ふく黒色別ふ其葉

櫨藤 時珍曰其子櫨の形ふ象る故ふ名く紫黒色微光る大さ一三寸四五ふして偏ふ人多く肉と剔き去り薬瓢ふ作て腰ふ垂 廣州記 藤ふ似て樹ふつく通草のごとし

稽 字彙 秣再生る稚苗

吉会 川まる田ふなる ひちのわふ出ぬハ世と今ふらふわきもとてゐとう

七月

百子姫 棚機七姫の内ふ百子の池より名くといふ、 百子の池 ふの部七子池

の一条ふ出川、

紅葉の橋 古今 天の川もみぢとはしふわたせばやたなばたつめの秋をしも待て

まつ川、真淵翁云かくもみぢをもてわたせむふや秋を待て
まつるとりふのこと紅葉の橋ハ秋ハもみぢと尊とすれバまづ
初秋ふて紅葉せぬ比ゆもうりうて、凡の秋のさまをそへ
のこふ中暑此紅葉を橋ふとりなをとこうう得うりょまそ
今うむふおもやまりろうが多し、〇青藍云此古今集の哥
より天の川原ふもみぢの橋ける趣ふ古くよりいまゝ
又棚機のまろまるんとするとき紅涙とおとせしを、
もみぢのちりしとふふ説ハ、後ふ設けゝるなるべし、

紅葉の帳 藻塩草 紅葉の戸ばりとハ錦の戸帳と七夕ふいひよせていへり、天木 かさゝぎの河風さちぬれそその、もみぢの戸ぼり浪やかくらん、後九条内大臣、

文殊會 八日 公事根源 是ハ東寺西寺ふて行ふる、
仁明天皇天長十年七月八日、大法師泰善はじめて文殊会を修ま 大政官府 其略曰、文殊会ハ畿内郡邑廣く此会を設け、飯食ホと具じて貧者ふ施しむく、是又文殊涅槃經の文ふ依るこ云ゝ若衆生ありて文殊師利の名を聞ん

ふ十二億劫生死の罪を除却せん若礼拜供養まる者ハ生々の處恒ふ諸仏の家ふ生まん云云

ゆらかぶつし 稲妻をいふ、秘蔵抄ふ出

桃の子 時珍曰桃の性早く花植易くして子繁し、故字木兆ふ従ふ十億を兆といふ其多きをいふなり、

兼三秋物

望月 説文 望ハ月の満るの日と相望む、君ふ朝するが如し、月ふ從ひ臣ふ從ひ壬ふ從ふ壬ハ朝するなり、

紅葉鳥 鹿の異名 藏玉 志られぬるらむ川田の山のもみぢ鳥もみぢの衣きてやなくらん、

桃吹 此条ふ出川、木綿

藻ふ住虫音ふ鳴 本草約言 蝦蟹等水中ふ螺螄あり 大和本草 約言ふいへる処古哥ふよめるわれからなるべし、藻ふ付て殻の一虎ある螺也、分殻の意こ、古今栄雅抄 蜑の刈藻ふ付て此むし栽からと身をほろぼすによりて名づくると 古今 蜑のかる藻ふすむ虫のわれからとねをこそなかめ世をばうらみじ 直子朝臣〇御傘ふハ雜と也り、

鵙 和漢三才圖会 鵙音臭 兼名苑又鶪字と用ふ日本紀百舌鳥と用来鵙形

鳩ふ似て小く、頭背尾ふ至て黄褐色、眼及び背額の容小き鶲ふ似て、眼の辺ゑ黒く、眼上の白き條頰ふ引し、背黒く、嘴末曲る、頰臆白く腹黄赤黒き横斑あり、脚白く、羽黒し、脛掌黒く爪利く、て毎ふ小鳥ゑ撃てこれゑ食ふ、其声高く喧し、奇異ゑ云べし如し、

○秋ふ至てよく鳴く、

鵙の草莖、鵙の早贄 興 俗

抄 むかしある男、野ゑ行て女ふあひぬゑとゝのくかゝらひつきて其家をとゝふ、女鵙のあるる草ゑさゝ、て曰、我家ゑうの汁草莖のもぢふ、ひたうゝるる里ふ行かとゝふ、男後ふ、これらゑとゝらぬゑきとゝ契て、さうぬゑ、その後心ふかもひあゝらおかあけふつゝうまゝり、私ゑとうゝるほゝふ、まれくてゆくゑまりぬ、次のゝしの春ゝ、ゆくありし野ふ行てとゝ〳〵草とゝるふ、霞こゝ〳〵聳てまゝ〳〵見えぎ、これねゑもあゝゑとむるゝく帰ゝぬといゝ、これ故將作の傳あり、

袖中抄 鵙の草莖とゝ鵙の草くゝるとゝまり、

哥林良材 鵙の草莖ふ鵙ふ時鳥の沓ふ、て有るが、沓手と取てゝくゝ〳〵ふゝて、其ゝりふゝるゆゝの物と、草の莖ふゝをゝるとゝふ、是と鵙の早贄とゝゆゝり、

藻塩草 鵙早贄とゝふゝをゝてゝあゝ所の草莖ふいきゝる虫かゝふ蛙ゑゝとゝて、刺て時鳥の為ゑとゝくもゝみふゝゝとゝりゝ、雲の御説ふ、説あり、此説ふ過べゝらず、

日くゝせゝ 鵙の性くゝて、必蛙或いゝとゝげゑゝと取く、草木の立枝ふ刺貫き晒ゝ、これを鵙の早贄とゝふ人気眛き別荘ゝゝまゝあゝゝ、

○諸説くゝゝる本説ふゝとゝくゝも後の人取用ひくゝよゝる哥ゝとあゝゝ、こゝふむゝとゝゝの説ふ、まゝゝゝひて句作あゝゝ、

鵙落

紀事 山林の間四ふ鵙の目と縫ひ架頭ゝ居常ふ繻竿と設て鵙鳥ゑ誘ゝ是ゑ鵙ゑ落ゝ云、

八月

木犀

花の条ふ出、

九月

百夜草

菊の異名ゝ、

義玉 名ゝ、

ゝふ翁が庭の百夜草花ゝきゝゝゝ白妙ふゝ、大和の國三輪の里ふ老翁あゝ、彼庭ふ一本の菊ゝゝゝて此翁ゑゝゝゝ、菊秋冬ゝゝゝ、春夏ゝゝも花も葉もゝゝゝ、所の者不審ゝて委くゝゝ〳〵聞ふ、七月一日ゝゝ毎夜菊の下露ゝ器物ふゝゝゝゝゝ百夜ゝゝ、毎月此花ゝ並ゝゝゝゝ依て此菊四季ふゝゝゝ、仍百夜草ゝゝ、

紅葉

和訓栞 紅葉ゝゝゝ、

紅出しの義ゆゑの反ちくとゆといふ
てゆこちこのこいつり、中略
もこぶるいとかちもるるりぢすの反づ
ちるもりぢふの反たふり、○ゆこ
膠木、蔦、檀、柏、槲、柳、梅、櫻、正木、ホ、各頭字の部ゆこちく
註も、○楓のゆこちぞゆとの故花とこい櫻とあがごく、
ゆこちとこい楓のゆこちぞゆとの故花とこい櫻とあがごく、
へその下る花ハこゆとこうこうこ山ゆこ里
こぶるゆとこまで庭ゆ

紅葉の舟 玄 和訓栞 源氏ふ紅葉をゆこぶこ
たる舟こゆも紅葉のこふゆ
ゆこちぢのこぶねこもこえこ、

紅葉かつちる 青藍云 俳諧歳時記ふ馬琴云紅葉こうちるのこうハのこ色こゆる梅
の花ゆどいこうふゆこぶこてえゆきこふゆ、
又陸佃ゆ埤雅ふ茶褐色ハ黄黒色こいこ、樹々の下枝
ハ早く色つくこるゆ、雨露のこふゆこう黄黒こ茶褐
色ふふりてちゆこるこいふ色わらん故ふつちる秋ゆ
下ゆちぢこちる山のゆーゆれぬれてゆひこう鹿の鳴ん

家醫 家兄羅文云かつちるハ數々ちるふゆ、去、此説これ
ゆぼつこるこかゆちここいつるハ盛ふ染こるゆちぢのゆこ
こいちりもゆむるこいふまゆこゆこ
のかゆこいふこゆこハ些ふて年ゆゆ
ると狩こいふ 俊頼集 ちゆれゆこここ
原のゆこちぢ狩このむ蔭ふこふこいつ

紅葉衣 桃華 禁葉 表黄、裏蘖芳、九月こり一説ふ面東青又黄、紅葉面
黄裏青青紅葉表青黄裏紅其外櫨紅葉、紅葉重、蝦手紅葉
等品々

紅葉土器 鹿文云増山の井ふ重陽の下ふ出ゆ
禁中重陽ゆ宴ゆこ
こゆ、御厨子所の預り高橋氏ハもとひこゆと、紅葉
土器の名目ふこいこ、按ゆるふ菊の盃ふ對ここる名ふ
ゆ、

紅葉鮒 和漢三才圖会 深秋ゆその鱗ゆ
こ、変ゆこゆこを紅葉鮒こいふ

七月

施餓鬼 施餓鬼棚 紀事 此月朔日こり十
五日ふ至て寺院の意ふ
川施餓鬼
任せゆこゆこ修こ、ゆの法門前ふ檀こ四隅ふ構へゆこ須弥
の四州ふ比ゆ、寺僧ゆの上ふ座し經こ誦し、中央ふ種々の供

物を備ふ是ハ鬼子母神の子をとり食ふ故ふ佛戒めて今よ
り汝ら食ハ別ふ与へんと誓ひ給ふこの故ふ末世の仏才子ハ
勅して毎日浄飯七粒づゝを喫へその飢渇をもくいなぶと云、
○一説ふ目蓮の母餓獄の中ふ墮ちてこの功徳をまうけ
諸の餓鬼をして食を得もしむ、

施餓鬼通覽

廣大施餓鬼の法浄き所を点定し地を掃ひ掛を作ふ長き
三尺ふ過ぐ〻も但桃樹柘榴の外用ふるとゝろ鬼神ハ
ものとてこゝと食ふことをえざ、或ハ浄地の上大石の上、或泉池
江海流水中、これ川餓鬼ふ用ふ東ふ向うて施す、尤時と戌時定め
てこゝと行ふ大幡三本こゝふ咒謁と書て云唵嚩嚩吽嚩唎
呼吒婆婆訶、こゝと室樓閣經の咒ハ如来の隨とあゞ、
別ふ焦百鬼王と用ふるゆゑ施食のゝゝめ面前鬼ふ始ふ慈

倶舎論頌

鬼ハ月と日ゝとゝ、五百
人間の一月を一日として壽五百歳、

摂待

門茶

仏祖統紀

宗曉傳曰
義井と城南の楪社ふ鑒法華水といふ以て行者ふ飲しむ、
亭とをの上ふ作て施もふ湯茗を以す、屋を結ぶて數楹
創て摂待といふ○往来の人
ふ茶と施もふ門茶も云、

洗車雨、洒涙雨

天中記七

月の六日の雨と洗車雨ともいふ七日の雨を洒涙雨ともいふ、

藻塩草

車と洗ふ雨とハ七夕の別とゝふ○この夕へ雨ふれば天
の川水漲りて二星會ぶことをうる
俗説この洒涙雨となもいふ誤りしあや、

施火燒

大文字焼
鳥居の火
船形りの火

紀事

七月十六日今宵東山浄土寺の山上
妙法の火ふ薪を以て大字と点ぜ此字畫九筆の及ぶ
ふ薪を以て船形りの火
處ふあらぜ傳へいふ室町家繁昌の日遠望遊觀の為これと
点ぜしむ故ふ一条通りと正面ともゝ○一説ふ延德元年七月十
六日、相國寺横川和尚始て二色と作る是將軍義高追悼
のゝゝ、凡この月六日より薪を伐点火をるふ至るまゝと
ふ預うるれ數十家あり、今日申の刻各伐乾ところの薪
を搭ひ山上ふ登る、凡大文字一畫長さ百五十間余、五又ぢり
と隔て薪木と積事一堆ゝゝ數四百八十余所各薪と積終り
て後日の没もるを待て同時ふ火と点ぜ、この外北山松ぶ寺ふ
妙法の火と点じ、船岡山ふ船形りの火と点じ愛宕山ふ鳥
鳥居形の火と点ぜ洛外所々の山岳并ふ原野ふ諸人集りて、
桔梗の枝擠の枝破子公卿基の類を燒く、

善福寺童

とんを聖昊の送火とゝひ又施火とゝふ、

相撲 十五日 江戸麻布雑色町ふあり麻布山と呼ま開山了海上人八親鸞上人の弟子ゝ今日開山了海上人の忌日あゝ故ふ寺内ふ祭る所の麻布仙花権現の社前あて童相撲あり報恩のこゝろあるべし

公羽花 剪紅羅 剪沙花 剪秋羅 ともいゝ花の形刻ゝ有てふ刀或ハ鋏と以てきうふせるがごゝ俗ふせんといふゝ秋深紅の花をひらゝ種類数品あり 松本セン 小倉セン ブシセン フレクロ 眼皮ハ二類異種ゝ

カンヒ フレクロハ三四月五六月ふ咲依て剪春羅ともゝゝ総て此花和種ゝ昔嵯峨清涼寺の北ふ寺ありゝ仙翁寺と云其寺絶て跡ふ珍花生ゝ時人仙翁花ともゝゝ則剪羅紅あり又紅梅艸ともふ

千秋樂 盤渉調の曲也 体源抄 千秋樂 柏子八又十六柏子○王子降誕七夜ふと是と奏ゝ盤渉調ハ秋の野ふ萩女郎花凡ふ吹〳〵ゝ如く吹ゝ〇俳書ふ千秋樂と出〳〵万歳樂秋凡樂と出さゝ秋凡樂ハ漢の武帝の時出来て秋声の辞あゝ秋季ふハ分一ふあゝ

八月 **釋奠** 献能 続日本紀 聖武天皇天平二十八年八月癸卯釋奠服器及儀と改め定む〇二月ふ同ゝ春の世の部ふ云べし 公事根源あゝ日釋奠の胙とまゝゝ藏人持て朝餉の前ふ云ゝ藏人答てふゝやのつゝさの奉ゝ昨日の釋奠の胙曽と文字とふゝゝひて高く擎持て簾の中ふ入事ゝ此度ハ二月ふあゝぎゝや胙と献ゝ八月ふ限るゝ兼ゝ猶有職の人ゝ尋ぬゝ〇釋奠の翌日ゝ事ゝ昨ゝひゝゝぎのゝゝ

千鳥 鶺鴒 いの部 稲負鳥 の条ふ注ゝ

千振 胡黄連ゝと の部ふ云ゝ

千生 ひの部 瓢薯 の条ふ注ゝ

九月 **泉涌寺舎利會** 八日 浴の泉涌寺舎利殿ふおいて毎年九月八日舎利会と行ふ音楽あり律師法海宋の白蓮寺よゝ受持の仙牙あり

仙蓼 珊瑚ゝさ の部ふ出

梅檀の實 時珍曰其子金鈴の如し熟する時ハ黄色金鈴と名ゝ形ふ似るゝ〇梅檀ハ楝ゝ夏のこの部ふ云

七月 **觀洗** つの部 机洗の 条下ふ出ゝ **水灯會**

十六日 城州宇治郡大和田黄蘗山万福寺ふおゐて當寺ハ華人黄蘗隠元琦禅師明暦中の建立之[紀事]今宵宇治川の舩中ふそてきまを修し水中施食の法事く其式舩二艘を双へ申の刻むうりふ岡屋の前ふ出先ッ流ふ沂て宇治橋の下ふ至る暮ふ及で舩中数个の燈臺を点じ僧徒左右ふ座を列ね七如来の牌を安し供物を備へ經巻を誦し音磬をならして流ふ随ひ下るふをひて後三百六十个の燈を宇治川ふ浮へ流ふまかさすへ水ふ類ひ散乱せしむ恰も蛍火の如しその灯白紙を以ふ蓮花を造りて内ふ艾心を竪その熟艾ハ焔硝を以て煮る火をその末ふ点しなまじ或ハ流ふまかさすへ伏見豊後橋の下ふ至るものあり僧徒亥の刻むうりふ岡屋の前へ帰る其間遊覧の舩数千之[月令廣義]南国の凡俗中元の夜家ゝ各羨飯と具へ齋供を門前ふ羅或ハ㵎欄の所傷亡の野鬼を祝祀し畢りて水燈三十六をさゝげ流水ふむかひて浮む名づけて度孤といふ燈ハ紙燈なり

相撲

部領使 [漢書注]両々相當りて力を技藝射騎ふ觝戯をもる故ふ角觝といふ[事原]史記秦の二世甘泉宮ふ在て楽を角力戯俳優戯とふ之ん漢の武帝この戯を好む即ち今の相撲之[垂仁紀]大和国當麻蹶速と出雲國野見宿祢とに力を撲しむ蹶速野見ふ勝れあそハれその腰を踏折られて死せり野見ハ菅家の祖之[扶桑略記]柏原天皇の時より代々天子皆悉く相撲を好む貞観以後寂然として無事之今聖主これを捨給ハ又楽しからずや〇先ッ二三月のころ大将以下陳の座ふ於て相撲使のことを定む諸国七道ふ遣して相撲人と召もとることを部領使といふ[公事根源]相撲（江次第ニ仁寿殿東庭の相撲と供御ノ相撲と奉行あり東宮ふ云南殿出御のとき仁寿殿ふ於て召合の抜出ふあり）是ハ諸国の供御人まうち人則諸国の防人々をめしあつめて七月ふ相撲の節をひて天子の御覧ありてよう先十六日の間ふ召仰ありて上卿勅と奉りて左右の次将ふ相撲あるべきよしを仰らるゝ左右の近衛方と分て国々へ使を下して相撲を召これを寄集ふこと使といへり廿六日ふ内取といふことあり仁壽殿（江次第ニ東宮ふ云六の月ハ廿六日ふの月ハ廿五日仁寿殿ふ於てこれを行ふ御物忌のとき清涼殿ふおいてこれあり近年御物忌を甲ときのこのふて内取とハあらハしく義このふて内取とハ故ふ左と右と右相撲あり）ふ出御ふみ左右の角力人（東庭）まて角力十五番あり故障あるときハ仰ふ随て進止をも擯昇の上ふ狩衣袴を着く

延元三年江記三云角力人三十人淡路行列この饗東宮唱子狩衣
犢鼻褌に差細狩衣の上に帯を並べ下衣袴に着て走る各三十人
に一ときに出でまふ取て勝負あり、廿八日 大の月 小の月 七日 召合
あつて、裏屋云召合技出八左右相撲相合 次第云勝方乱声
時と決る左勝負右勝負のごとき右先ツ勢曽利と奏し左先ツ
綾三と奏す又せんけいあるゆきまを他の舞を奏す、天皇
南殿に出御、王卿参上す、大将相撲の奏を執る十七番取こ
勝方乱声あり、又廿九日 技手 とて、角力をもよおして御覧ぜ
らるゝ、神亀三年に始まりて諸國より召上せらる、寛平七
年に八童相撲と御覧あり、こゝを角力の起りと甲に日本紀
垂仁天皇七年七月當麻邑に勇士あり、云〇助手最手加
手に出でられ相撲ふの所に助手是と服手しらふ、江次第
こゝに云今関服をとりこゝに出てらるゝ名と設けこゝに
る歌〇童相撲 辻相撲 各頭字の部に分て注、

薏苡仁

和漢三才畜会 苗は黍に類し、葉の間に枝をもちて穂を出
し、實を結ぶ其梢の尚ふに白花を開く、凡草木の花落
て實を結ぶ此は花と実と別に形四く末尖り端に白絲三條と
出て暑乾くときは絲脱去て孔あり上下通ずに小児絲を
貫きて念珠とす、

西瓜

和漢三才畜会 慶安中 黄蘗隠元入
朝の時、西瓜扁豆ホの種を携へ来り

始て長崎に種 本朝食鑑 水瓜は西瓜に、俗に瓜中水多
故に名く、大和本草 三月種を下し蔓延て地に布四方に
黄花を開く甜
瓜の花のごとし、

鈴虫

和漢三才畜会 金鐘虫 月鈴児
俗云鈴虫、此亦蟋蟀の類 食馬、
松虫に似て首小く尻大く背窄く腹に黄白色あり夜鳴
声鈴を振ふ如し、里里林里林とふ〳〵〇此鈴虫の
名まの部松虫の条に云、

すげの庭鳥

異名八ツ類 ふる〳〵 この
はぐきの山ふるゝやさゝ
蓬ふ 杜のもけの庭鳥、

兼三秋物

芒

尔雅 薄草
の聚て生ず
と薄とふ又芒とふ 杜葉に〇時珍曰芒兼皆草のごと
うして大く長さ四五尺甚快利にして人を傷ること鋒刃の
如し、七月長き莖を抽んで穂をなす、蘆葦の花のごと
者く、〇 縵芒、篠芒、鷹の羽芒、糸芒、薇芒、十寸穂芒、
麻芋穂の芒、真蘇芋の芒、穂芒、花芒、

相撲草

和漢三才畜会 野原湿地ふあり、葉地に布て義生も、忍凌に似く
微扁く石菖に似て浅く秋莖と起て嶺に穂をなす、青白

色細子ある、ゆまどもうそぶ、其莖扁く強健長さ六七寸小児莖と取て穂を縮結て纖の如くし、二筒ニ用ひ一ハ其禮めふさ〻をさみ、両人莖と持て透徹柄 加羅拔くきの部にあるべし、相引く、切らる方輪と千す、

すごる もぐと鹿といそるハ誤ニ、先板の諸抄ともふ

もぐらひて、秋の部ふ出もふようそ、ふ贄して其ことわりを注さ、古今 もぐらもちの秋の萩原朝ぐちて旅ゆく人をいの ぞくうん 真朔公羽云もぐるハ日本紀ふ螺蠃と書てもぐるとよあり、一ふハ似我蜂とも云此蜂ハ糸の木の虫をけん来て、巳ど巣ふて七日兄ひぬるもバ己ごがかき蜂とあれりとのつ、さて其子ハ一度巣とくちて又帰来らぬよ〻、其如く今別ゆきて、又ろとものちられぬ人をもバ帰るをろつろまこんとくちをのきくろあり、中暑此三の何ともちれねぐ萩原とのふふつとてもがるハ鹿の事ふもぐ、ひさ説ともいふ公ニ俳諧の書ハ後の説ども ふるよりうく物をもぐ、くるる誤文多し、

芋 芋の莖をのふ 大和本草 唐の芋の整ふ煮て食し、生ふて酢とくして食ふ、

八月

胡 鱸鉤 鄭鮗

大和本草 鮒魚大なる者二三尺三月以後七月まで肥ゆ暑月脂多くして味よし八月よりもとる夏秋さ〻〻鮒 クモロタ 鱭 脂多く鮒 夏月腸の味よし〻松江ふ多し、中華松江の鮒味よ〻ふるとヒイラとつふ八其大サ日本のセイゴの如しと云河鮒味尤よし暑月の佳品ニ海と河との間ふあるもの味よ〻漁人ふ多と物或ハ戈ふて突てとる 猴蔓 鰺つる ころふ ねるよ〻 動つ半殘

九月

任吉相撲会

士言 室の市 拾芥抄 九月十三日任吉相撲會 社家説 神

外市 興玉出嶋頭宮へ渡御、傳々供あり津守の神主勅使代として宣命と讀畢てそ相撲十三番童相撲三番あり、擯鼻禪の上ふ注連を纏ひて手合あり是今日の神事ニ、〇一説ふいふ神前へ黄金の升と作つて新穀の稲と奉ちるく、かりて農家用ふる処の升と此処ふ持来ちて賣ちりこ、ちりて種々の市人群集ひる故宝の市ちふ也、宮社の新嘗会ニ心ふべ〻今神輿と別殿へ迁し奉りて五穀新嘗の神膳ふと奉る相撲会の事中頃ちり沙汰ふ〻室の市外市是ニ〇外買て

分別ゝる月 晦日 九月晦日、摂州住吉の神輿王出嶋見るめ 芭蕉

住吉の神送

の仮殿に渡御、即祓と修まるを住吉の御菅の祓と云ふ、祝祠あり、又此祭と称も、出雲石と云ふ所あり、神宜出雲と遣ふ拜むこれを神送と云ふ、今日四天王寺石の鳥居の邊ゝ神送つ、あり、忌坂所々の神社も又神送りの神事あり、

月令

此記戌月之候鷹為鳩、蛤飛物化為潛物、九月節

爵入大水為蛤

芒散

其花老る時翠の如く

醉楊妃

百菊の内に大白入薄紅のもの万重大々輪、ありて、風ふきこぼして戰乱もるゝ鷺毛の如く

追加

八月

朔梅

冬のふの部、冬の梅の条に注す、

七月

星草

大和本草 穀精草、沢中水田の中に叢生す、葉の中より一莖を抽んで其形真蘭に似て、莖の末り白花の四きあり、○俗太皷のブチといふ、

り

七月

琉球芋

大和本草 甘藷、葉は番薯と載す、葉の形に似たり、根は瓜樓根に似たり、根の餘のひけもの又鷺毛の如く根の下に短き蔓あり、根の形卵に似て大きなり、鴨の卵に似てかたくるもあり、大なるは重さ一斤あり、長きあり、四きなるは、夏月蔓長く生ず、中暑此種元禄の末、琉球より薩州に渡る、煖土によろし、寒地に植もて生せず、

八月

鶴

大和本草 和呂鬼ツ、ゝとの八常の、ゝグミより三倍して大なり、ほゝ多し、山中にあり、鶴の字順の和名抄に唐韻を引けり、中華の書に怪鳥といへり、

九月

万年青九前おき

此詞増山の井に出る万年青のまえおき、牡丹の脇松の胴とそ立花に用ゆるなり、但し池の坊三ヶの傳受あるに委しくこれを、

し

八月

鴫の羽盛

鴫の羽もり、千鳥の羽もりなど料理にする事あり、切る頭翅を以て全体のさまを作りその脊のところへ焼くる肉を盛るこれを鴫

の羽盛
とりふ

増補歳時記栞草秋之部終